

秋田県文化財調査報告書237集

曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

—野沢岱遺跡—

1993・3

秋田県教育委員会

曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

の ざわたい
— — 野沢岱遺跡 — —

1993・3

秋田県教育委員会

序

本県には、先人の遺産である埋蔵文化財が数多く残されています。この埋蔵文化財を保護し、後世に伝えてゆくことは、私たちの努めであります。

このたび、曲田地区農免農道整備事業で路線の一部が、野沢岱遺跡を通過することになりました。このため本教育委員会は、工事に先立つて道路工事にかかる部分の遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡や土坑などを検出し、遺構外からは、土器・石器などが出土し、当時の生活の一端を明らかにすることができました。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護のために広く活用され、同時に郷土の歴史資料として役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査の実施並びに本報告書の刊行に当たり御援助・御協力をいただきました秋田県農政部・北秋田農林事務所・大館市教育委員会・比内町教育委員会をはじめ関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成5年3月20日

秋田県教育委員会

教育長 橋 本 顯 信

例　　言

1. 本報告書は、曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の3回目の報告書である。
2. 本報告書は平成3年度に調査した大館市所在の野沢岱遺跡の発掘調査結果を収めたものである。
3. 本書の執筆は、柴田陽一郎が行い、藤岡光男の協力を得た。
4. 発掘調査および遺物整理にあたって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

秋元信夫　板橋範芳　千田和文　成田滋彦　八木光則

凡　　例

1. 各遺構に付している略記号は以下のとおりである。

SI(堅穴住居跡) SK(土坑)

2. 遺構の番号は検出順に通し番号とした。精査段階で欠番となったものもある。
3. 掘図中の柱穴(P)のマイナス表記の数字は深さである。
4. 土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修　財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。
5. 掘図中の遺物実測図と拓本は土器・土製品と石器類に分け、それぞれ通し番号とした。石器類の番号にはSを付した。図版中の遺物もそれにしたがった。
6. 石器観察表中の単位は、長さ、幅、厚さがcm、重さがgで、土器観察表の単位はcmである。
7. 文章中および表中の法量の推定値は()で表示した。
8. 石器実測図・土製品の1点鎖線は、破断面を表している。
9. 掘図中のスクリーン・トーン、シンボルマークは以下のよう使い分けた。これ以外のスクリーン・トーン、シンボルマークは各図中に凡例を示した。

擦り	凹み	● 土器 (RP)
擦り切り	敲き	▲ 石器 (RQ)

目 次

序

例 言・凡 例

目 次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで	1
第2節 調査の組織と構成	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 周辺の地形・地質	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	
第1節 遺跡の概観	9
第2節 調査方法	9
第3節 調査経過	10
第4章 調査の記録	
第1節 基本層序	15
第2節 檜山遺構と出土遺物	15
(1) 壁穴住居跡	15
(2) 土坑	34
第3節 遺構外の出土遺物	42
第5章 まとめ	75
図 版	

挿 図 目 次

第1図 野沢岱遺跡の位置と 周辺の遺跡分布図	4	第18図 S I 17平・断面図	33
第2図 遺跡周辺地形図	8	第19図 SK F03・SK 04・10平・断面図	36
第3図 地形図・調査区範囲図	12	第20図 SK 11・12・13・14・15 ・16平・断面図	39
第4図 遺構配置図	13	第21図 遺構内出土上石器 (3)	40
第5図 遺跡基本層序図	14	第22図 遺構内出土石器 (4)	41
第6図 S I 02平・断面図	17	第23図 遺構外山上土器 (1) - I群 ・II群 (1)	49
第7図 S I 05平・断面図・遺物分布図	18	第24図 遺構外出山上土器 (2) - II群 (2)	50
第8図 S I 06平・断面図	20	第25図 遺構外出山上土器 (3) - II群 (3) ・III群 (1)	51
第9図 S I 06遺物分布図	21	第26図 遺構外出土土器 (4) - III群 (2)	52
第10図 S I 08平・断面図	23	第27図 遺構外出土土器 (5) - III群 (3)	53
第11図 S I 08遺物分布図	24	第28図 遺構外出土土器 (6) - III群 (4)	54
第12図 S I 09平・断面図・遺物分布図	26	第29図 遺構外出土土器 (7) - III群 (5)	55
第13図 遺構内出土土器 (1)	28	第30図 遺構外出土土器 (8) - IV群	57
第14図 遺構内出土土器 (2)	29	第31図 遺構外出土土器 (9) - V群 (1)	58
第15図 遺構内出土上石器 (1)	30	第32図 遺構外出土土器 (10) - V群 (2)	59
第16図 遺構内出土石器 (2)	31		
第17図 遺構内出土土器 (3)	32		

第33図	遺構外出土土器 (1) - VI群、上製品	61	第40図	遺構外出土石器 (7)	69
第34図	遺構外出土石器 (1)	63	第41図	遺構外出土石器 (8)	70
第35図	遺構外出土石器 (2)	64	第42図	遺構外出土石器 (9)	71
第36図	遺構外出土石器 (3)	65	第43図	遺構外出土石器 (10)	72
第37図	遺構外出土石器 (4)	66	第44図	遺構外出土石器 (11)	73
第38図	遺構外出土石器 (5)	67	第45図	遺構外出土石器 (12)	74
第39図	遺構外出土石器 (6)	68	第46図	上坑形態分類図	76

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	5	第3表	層別出土遺物数表 (2)	45・46
第2表	層別出土遺物数表 (1)	43・44			

図 版 目 次

図版 1	1 遺跡遠景 道日本スキー場から （南西→） - 矢印が遺跡--		3 B区東全景（調査後）（北→）	
	2 遺跡近景（北西→） 車のあるところがA区北西斜面--		図版 6	1 遺構内出土土器 (1)
	3 調査前の状況 C区からA・B区を 見る（南→）		2 遺構内出土土器 (2)	
図版 2	1 調査前の状況 A区からB区を見る （北→）		図版 7	1 遺構内出土土器 (3)
	2 遺物出土状況 (M A49グリッド・4層 RP1) (西→)		2 遺構内出土土器 (4)	
	3 A区西斜面基本構造断面 (北西→・南東)		図版 8	1 遺構内出土土器 (5)
図版 3	1 S 102壁穴住居跡 完闇 (南→)		2 遺構内出土土器 (6)	
	2 S 105壁穴住居跡 完闇 (南→)		図版 9	1 遺構外出土土器 (1) Ⅲ-1-a
	3 S 105壁穴住居跡 炉跡 (南東→)		2 遺構外出土土器 (2) Ⅲ-1-a～Ⅲ-1-h	
図版 4	1 S 106壁穴住居跡 完闇 (北→)		図版 10	1 遺構外出土土器 (3) Ⅲ-1-b～Ⅲ-1-c
	2 S 108壁穴住居跡 完闇 (南西→)		2 遺構外出土土器 (4) Ⅲ-1-d～Ⅲ-3	
	3 S 109壁穴住居跡 完闇 (東→)		図版 11	1 遺構外出土土器 (5) Ⅲ-4・Ⅲ-6
図版 5	1 S 117壁穴住居跡 完闇 (北西→)		2 遺構外出土土器 (6) Ⅲ-5	
	2 S 117壁穴住居跡 上縦・白色粘土塊 出土状況 (南西→)		図版 12	1 遺構外出土土器 (7) Ⅲ群浅縫 2 遺構外出土土器 (8) IV-1、土製品

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

曲田地区農免農道は、大館市曲田・中山両地区の果樹などの流通合理化を目的とした曲田字沢口から中山字兎沢に至る全長3.3kmの道路である。

本農道の計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、県農政部北秋田農林事務所は、文化財保護法に基づき秋田県教育委員会に遺跡調査の依頼をした。秋田県教育委員会はこれを受けて、平成元年度に計画路線内の遺跡分布調査を行い、路線内に係る周知の遺跡を1箇所確認した。さらに平成2年度に試掘調査可能な地点について分布調査を行い、新たに家ノ後遺跡と上塙遺跡の2遺跡を発見した。

この遺跡分布調査の結果を受けて、平成2年度には家ノ後遺跡と上塙遺跡の範囲確認調査を実施し、両遺跡の範囲内を計画路線が通ることが明らかになった。これらの遺跡の保存について、秋田県教育委員会は原図者と協議の結果、記録保存の措置をとることで合意し、平成3年5月13日～6月8日に上塙遺跡、同年6月10日～11月15日に家ノ後遺跡の発掘調査を実施した。また、同年10月21・22日には野沢岱遺跡の範囲確認調査を実施し、今回、路線内の本調査を実施したのである。

第2節 調査の組織と構成

所 在 地	秋田県大館市曲田字野沢岱102-4外
調 査 期 間	平成4年7月6日～平成4年9月25日
調 査 面 積	2,200m ²
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	柴田 陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター文化財主任）
総 務 担 当	猪川 清（秋田県埋蔵文化財センター工査）
	佐々木 真（秋田県埋蔵文化財センター主任）
調査協力機関	秋田県北秋田農林事務所 大館市教育委員会 比内町教育委員会

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡周辺の地形・地質

野沢岱遺跡が存在する大館市は秋田県の北東部に位置し、東は鹿角郡小坂町と鹿角市、南は北秋田郡比内町、南西は北秋田郡鷹巣町、西は北秋田郡由代町に接し、北西及び北緯は青森県との県境となっている。市域は大きくは標高200~800m前後の山地と標高40~100mの盆地から成る。前者はいわゆる出羽山地の一部で、北西側に白神山地、東側に高森山地、南西側に摩当山地が存在する。後者は断層による陥没盆地で、内部には米代川・長木川・下内川・犀川等の河川が存在し、これらの河川の營力によって大館段丘地や低地が形成されている。

野沢岱遺跡は大館市南部の河岸段丘上にある。大館盆地周縁には米代川とその支流によって形成された段丘が発達し、高位から第1段丘~第5段丘に区分されている。遺跡は中位の第3段丘上に立地する。この段丘面は開上段丘とも呼ばれ、構成層は鳥越軒石質火山灰層の河成二次堆積物である。遺跡周辺の段丘や低地の基盤層は第4紀の末固結堆積物で、遺跡北方及び南方の山地は主に新第3紀の大滝層と大葛層及び火山性貫入岩類からなる。剥片石器の原料となる頁岩が含まれるのは大滝層で、この層は油田地域の女川層に酷似し、硬質泥岩と浮石凝灰岩との互層をなして遺跡北方の高森山地に広く分布している。

遺跡の東側では北方の鞍掛山（標高484.4m）東麓から高森山地を下刻して南流する数本の侵食谷が、段丘を開析して南側の十二所先行谷低地へ流れ込んでいる。遺跡周辺は、北西側~南東側が侵食谷によって開析され、北西に向かって張り出す舌状台地となり、西側は一段低い平坦面となっている。調査区の中央からやや南側には深さ2m以上の埋没谷が東西方向に入るが、現地表面はほぼ平坦で、中央部の標高は約89.5m、台地上の南側と東側沖積地との比高差は約9m、西側の平均面との比高差は約3mである。

野沢岱遺跡は大館市の南部、JR大滝温泉駅の北西約2.5kmに位置している。

参考文献

秋田県『秋田県総合地質図幅 大館』 1973（昭和48）年

秋田県農政部農地整備課『土地分類基本調査 大館』 1986（昭和61）年

第2節 歴史的環境

今回の野沢岱遺跡の調査では縄文時代早期、前期、中期、後期の土器が出土し、縄文時代前期・中期の竪穴住居跡と前期もしくは中期・後期の上坑を検出した。ここでは、野沢岱遺跡の周辺にあって発掘調査された縄文時代の遺跡を中心に概観する。古代、中世の遺跡については『大館市史』第一巻を参照されたい。なお、文中（ ）内の数字・記号は第1図、第1表と対応し、文献16に掲っている。

大館市と比内町には合計164箇所の遺跡が知られている。野沢岱遺跡周辺の縄文時代の遺跡は第1図の範囲で25箇所で、野沢岱遺跡（C）を含めて13箇所が発掘調査されている。いずれも米代川と犀川が形成した河岸段丘や低丘陵地などの、沖積地を見下ろす高台に立地する。

縄文時代早期の土器は、北西3.5kmの山館上ノ山遺跡（4-71）、東1.7kmの薦ヶ長根IV遺跡（4-123）、南西2.6kmの横沢遺跡（12-13）で出土している。いずれも貝殻沈線文系の土器である。山館上ノ山遺跡は前期から晩期の集落跡で、地点を換えながら円筒下層a式期から大洞C式期までの竪穴住居跡が検出された。前期の捨て場からは膨大な量の遺物が出土したが、茂原下岱式土器群の編年の位置付けが明確でないこともあって前期前葉の土器の様相は不明な点が多い。円筒下層式土器群は、他の多くの遺跡からも出土しているが、それ以前の前期前葉の土器は薦ヶ長根IV遺跡と上型遺跡で、早期末から前期初頭らしい土器が少數出土しているにすぎない。

中期前葉までは山館上ノ山遺跡や上型遺跡の北西2.5kmの本道端遺跡（12-19）にみられるように集落が形成されたことがわかるが、中期中葉の住居跡は検出されていない。円筒上層c～e式土器の出土は比較的小ないが、このころから大木系土器の出土例が増加する。大木8a式、8b式土器は横沢遺跡、木道端遺跡などで出土している。横沢遺跡ではさらに中期後葉の住居跡が検出されている。大木9式土器、中の平Ⅲ式土器は木道端遺跡や山館上ノ山遺跡などでも出土している。家ノ後遺跡ではわずかながら大木10式並行期の土器が出土した。大木10式並行期から後期初頭にかけての遺跡は隣接する上型遺跡のほか、木道端遺跡があり、発掘調査によって集落跡であることが明らかにされている。

後期前葉では、上型遺跡の南3.5kmの入日堂前遺跡（12-7）、東3kmの萩峠遺跡（4-81）、山館上ノ山遺跡などがあり、発掘調査により集落跡であることが明らかにされている。これらの遺跡や薦ヶ長根IV遺跡、上型遺跡では袋状土坑を含む上坑群が検出されている。

晩期では、発掘調査によって晩期の土器が出土し、住居跡や土坑群が検出された遺跡には薦ヶ長根Ⅲ遺跡（4-122）、山館上ノ山遺跡、家ノ後遺跡がある。家ノ後遺跡では、これらの遺跡からの出土遺物量をはるかに上回る量の遺物も出土し、晩期の周辺遺跡と比較して特に目立つ存在である。

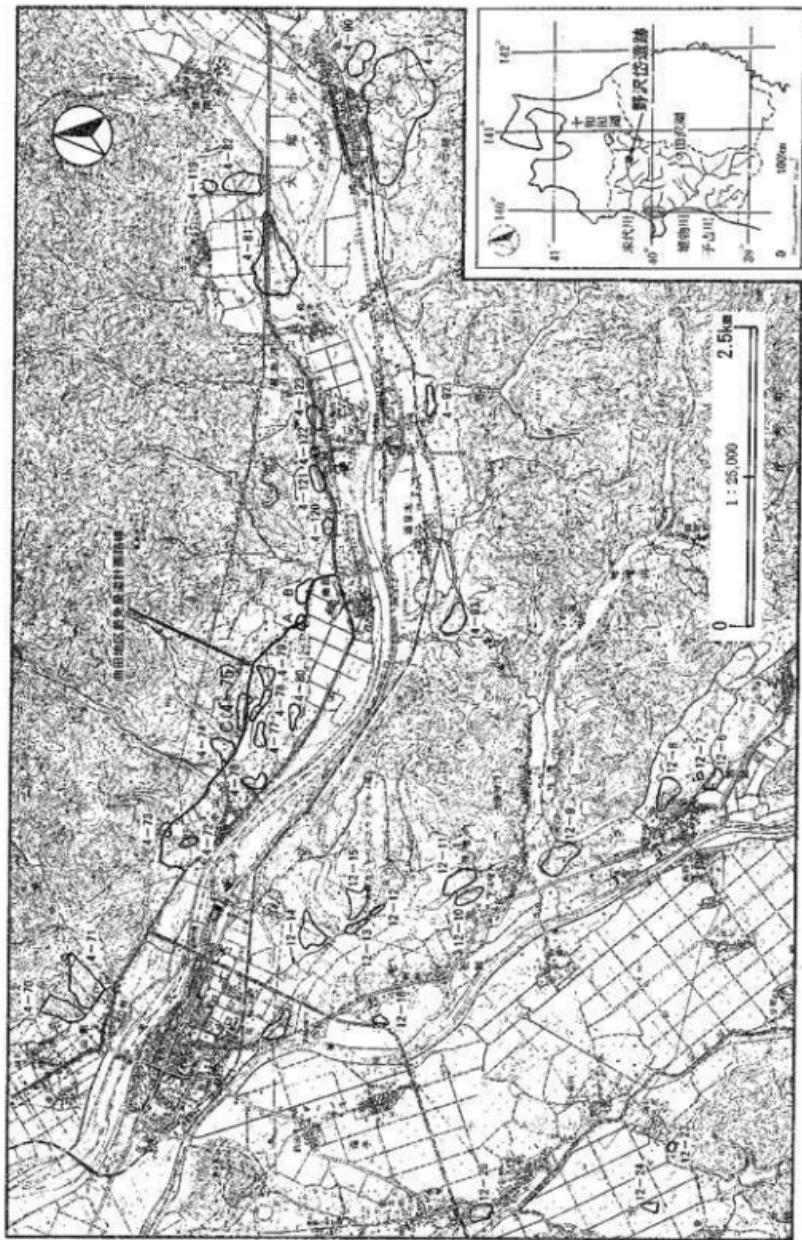


図1 図 野沢岱道路の位置と周辺の道路分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

米代川流域には、後・晩期の墓域と考えられる著名な遺跡が多い。上流域では、後期に属する岡の特別史跡大湯環状列石及び大湯環状列石周辺遺跡（鹿角市）、高屋館跡（鹿角市）、小坂環状列石（小坂町）、晩期の玉内遺跡（鹿角市）、中流域では晩期の山館上ノ山遺跡（大館市）、矢石館遺跡（田代町）、藤株遺跡（藤巣町）、下流域では晩期の柏子所貝塚（能代市）などがある。これらの他、前期～中期の配石墓が数多く検出された孤岱遺跡（森吉町）もある。

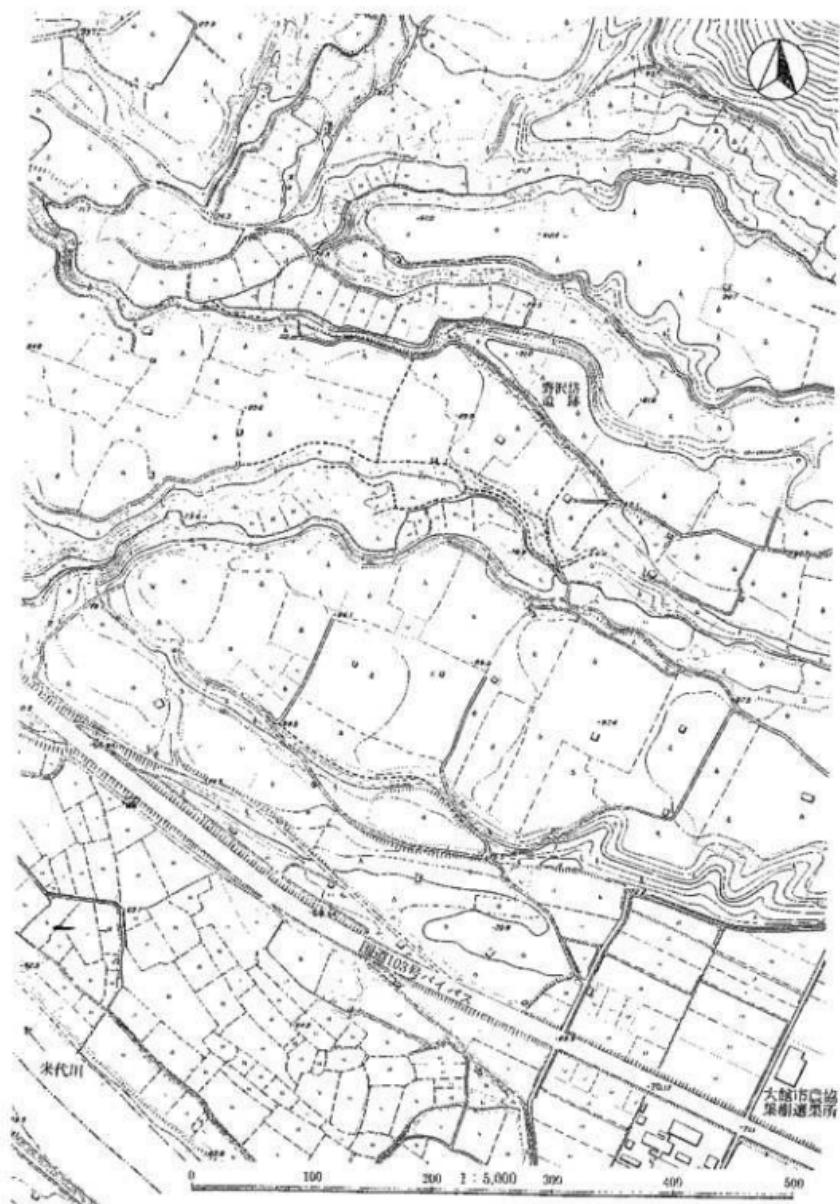
家ノ後遺跡と隣接する舌状台地の西方には、東西1.5km、南北約500m、標高85m～92mの台地が広がっている。この台地は南北方向に延びる中山沢の冲積地への出口付近から、東に入る3本の沢によって区切られ、東から西に延びる細長い舌状台地が3列連なる地形となっており、周知の7遺跡（第1図、第1表参照）が存在する。これらの遺跡のうち野沢岱遺跡を除く6遺跡は未発掘であるが、内容が明らかになれば、十二所から山館に至る米代川右岸の河岸段丘や低丘陵地に立地する遺跡が、地理的にはほぼ連続して解明されることになり、当該地域の縄文時代の様相がより明確になるものと考えられる。曲山地区農免農道の路線は最も北側の舌状台地（冷水山根台地）を通る計画があり、今後埋蔵文化財の保護に留意した対応が必要である。

註 山館上ノ山遺跡は合計7回の発掘調査が行われ、様々な遺跡名で報告されている（文献②③⑤⑥⑦⑧⑨⑩）。本書は最近の大館市教育委員会による詳細分布調査（文献⑨）及び秋田県教育委員会作成の遺跡地図（文献⑩）に拠った。

参考文献

- ①比内町教育委員会 「夷館緊急調査報告書」 1973（昭和48）年
- ②大館市教育委員会 「大館市山館「上ノ山遺跡」発掘調査報告書」 大館市史編さん部資料第15集 1975（昭和50）年
- ③秋田県教育委員会 「秋田県遺跡地図」 1976（昭和51）年
- ④比内町教育委員会 「谷地中ノ館」遺跡発掘調査報告書」 1978（昭和53）年
- ⑤大館市史編さん委員会 「大館市史」第一卷 1979（昭和54）年
- ⑥秋田県教育委員会 「国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第84集 1981（昭和56）年
- ⑦秋田県教育委員会 「秋田県の中世城館」 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- ⑧比内町教育委員会 「大口當前遺跡発掘調査報告書」 1982（昭和57）年
- ⑨比内町教育委員会 「比内町埋蔵文化財調査報告書 本道端遺跡」 1986（昭和61）年
- ⑩秋田県教育委員会 「味噌内根山農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 柏ノ沢遺跡 -」

- 沢遺跡 -』秋田県文化財調査報告書第169集 1988(昭和63)年
- ⑩秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I-上ノ山遺跡・上ノ山II遺跡 -』秋田県文化財調査報告書第173集 1988(昭和63)年
- ⑪秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II-上ノ山II遺跡 第2次調査 -』秋田県文化財調査報告書第193集 1990(平成2)年
- ⑫秋田県教育委員会 『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』 1990(平成2)年
- ⑬秋田県教育委員会 『国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV-上ノ山II遺跡 第2次調査 -』秋田県文化財調査報告書第211集 1991(平成3)年
- ⑭秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3)年
- ⑮秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県北版)』 1991(平成3)年
- ⑯文化財保護委員会 『大潟町環状列石』 1953(昭和28)年
- ⑰鹿角市教育委員会 『大潟環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)～(8)』鹿角市文化財調査資料29・31・32・33・35・38・42・43 1985～1992(昭和60～平成4)年
- ⑱秋田県教育委員会 『西山農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI-高屋跡 -』秋田県文化財調査報告書第198集 1990(平成2)年
- ⑲小坂町環状列石調査団 『小坂環状列石墳墓』 1969(昭和44)年
- ⑳秋田県教育委員会 『玉内遺跡発掘調査報告書-国道282号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査 -』秋田県文化財調査報告書第171集 1988(昭和63)年
- ㉑奥山潤 『縄文晩期の組石棺』 考古学雑誌第40巻2号 日本考古学会 1953(昭和28)年
- ㉒秋田県教育委員会 『熊株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第85集 1981(昭和56)年
- ㉓能代市教育委員会 『柏子所貝塚発掘調査報告書』 1972(昭和47)年
- ㉔秋田県教育委員会 『追跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集 1990(平成2)年
- ㉕大野憲司 『狐傍遺跡について-1989年の範囲確認調査から-』 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第5号 1990(平成2)年
- ㉖秋田県教育委員会 『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I-上型遺跡 -』秋田県文化財調査報告書第219集 1992(平成4)年
- ㉗秋田県教育委員会 『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II-家ノ後遺跡 -』秋田県文化財調査報告書第229集 1992(平成4)年



第2図 遺跡周辺地形図 (アミ部分は遺跡の調査範囲)

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

野沢岱遺跡は北西に張り出す舌状台地上にある。発見された地形や遺構の配置から、舌状台地全体が遺跡の範囲と思われるが、遺跡の南縁から北縁へ台地の東側を切り崩して農道が通り、調査区西側平坦部の南半分は果樹園造成による削平を受けている。工事区域内遺跡範囲は台地上の現農道の東・西側の部分である。調査区現況は杉林・雜木林・果樹園・原野であった。調査区の周囲はほとんど果樹園に囲まれているため、調査区内を縦断する現農道とそれにいくつかの進入路が接続する。

今回の調査地点は舌状台地の北西縁にあたる辺部の一部と北西側の斜面で、調査面積は2,200m²である（第2図、第3図）。調査区中央部（B区）のやや東側には深さ2m以上の埋没谷があり、B区の西（A区）と東（C区）では遺構の在り方が異なる。

発掘調査の結果、縄文時代の堅穴住居跡6軒、土坑9基を検出し、縄文時代早期・前期・中期・後期の土器が出上した。堅穴住居跡は、中期が5軒で、後期が1軒、いずれも重複はない。中期のものは中央部に位置する。土坑のうち1基は、フラスコ状を呈し、中期の所産である。他の土坑のうち7基はC区に位置し、いずれも重複はない。時期は縄文時代前期と考えられる。もう1基は北西部（A区）に位置し、時期は不明である。

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の点1箇所（工事用センター杭No.77）を選定し、これをグリッドの起点MA50とした。MA50から磁北を求めて、それから12度50分30秒東へかたよった方向（真北）をグリッドの南北基線とした。この南北基線及びそれと直交する東西基線から、4m×4mのグリッドを設定し、15箇所の杭を仮レベル原点とした。グリッド杭には、東から西に向かって東西方向を表すLT・MA…MT・NA…NT・OA…ODというアルファベットと、南から北に向かって南北方向を表す46・47…の2桁の数字を組み合わせた記号を記入し、4m×4mの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした（第3図）。

遺物は、遺構外出上のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに

に取り上げた。基本的に竪穴住居跡は十字に上層観察用のベルトを残し、四分割して調査した。土坑は、長軸に沿って二分割して調査した。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、基本的には1/20の縮尺で作図した。遺物出土状況図は1/10もしくは1/20の縮尺で作図した。写真撮影は、35mmのモノクロとリバーナルフィルムを使用した。

室内における整理は、遺構は現場で取った平・断面図より第2原図を作成し、これをトレイスした。遺物は洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

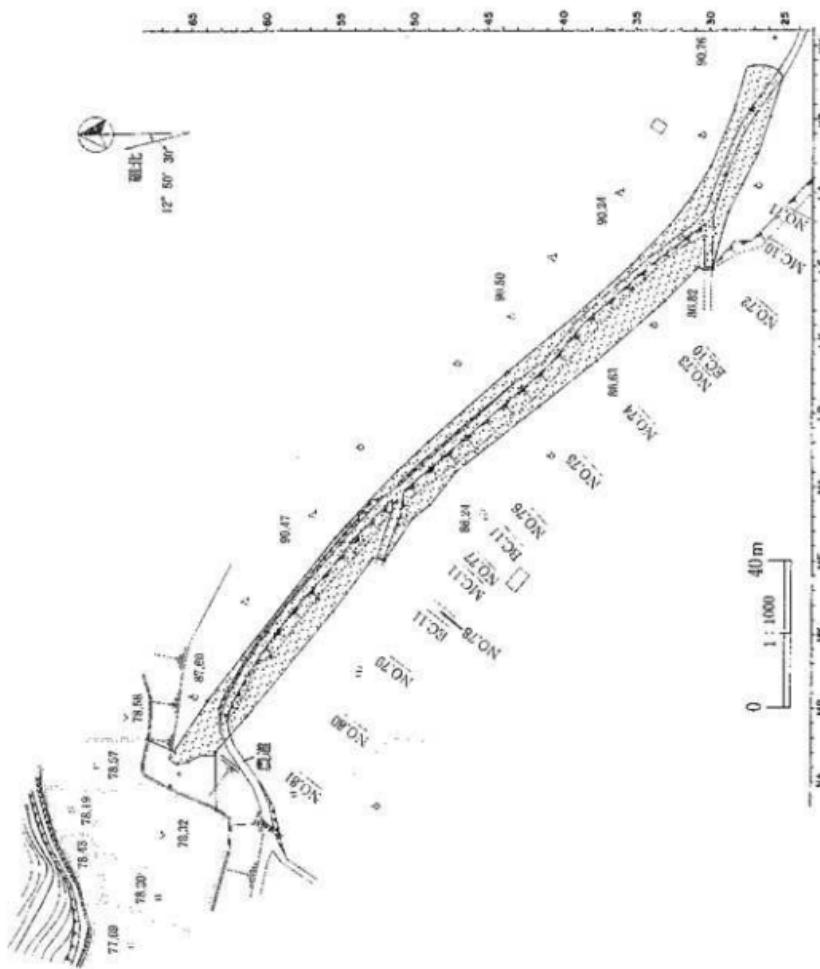
第3節 調査の経過

平成4年6月16日に北秋田農林事務所と現地立ち会いをし、調査区の再確認と調査区内を縱断する現農道の付替道路や調査区外の進入路、排土置場などについて協議した。調査は7月6日から9月25日まで実施した。

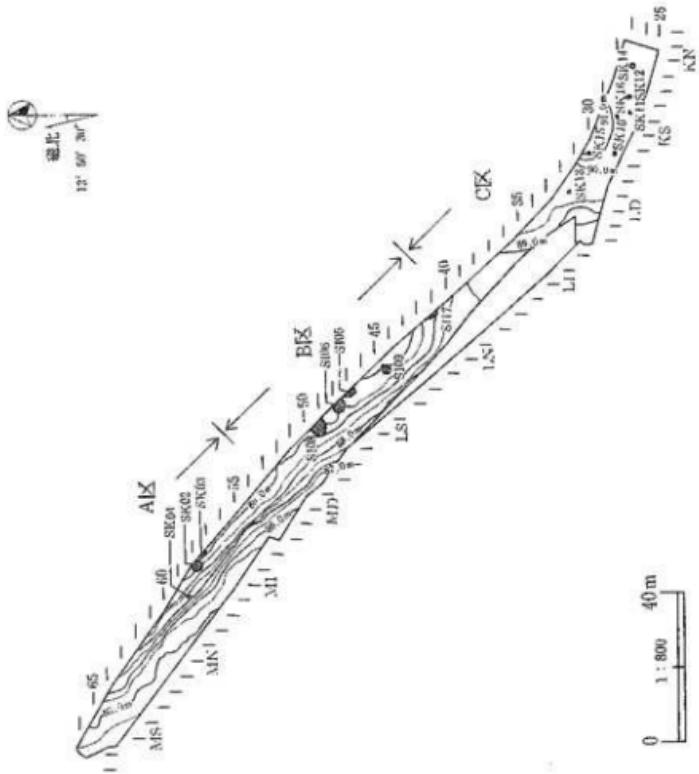
- 7月6日 調査区内にある伐採後の下枝・葉の除去と草刈りから開始した。プレハブが設置され、埋蔵文化財センターから発掘用資・器材が到着した。6月16日の協議で未解決の事項について、北秋田農林事務所と現地で再度協議した。
- 7月7日 グリッド杭の打設開始。ベルトコンベヤーと発電機が搬入された。
- 7月8日 ベルトコンベヤー12台を運搬・セットし、配線終了後、北西側（以下A区とする）斜面の表土剥ぎを開始した。
- 7月10日 ベルトコンベヤー2台が不調の為、入替作業を行う。
- 7月13日 A区斜面の表土剥ぎを終了し、第3層（大湯浮石層）・第4層（黒褐色土）の掘り下げに入る。第3層は極く部分的に薄く認められるが、第4層は厚く、鶴文前期・後期の土器が出上した。
- 7月16日 北内町福田地区の祭典のため、作業は半減。そのため、第3層が残っている北西端寄りで作業を集中して行なう。ベルトコンベヤーのクレーム分2台の修理が終了したのでそれを加えて全てを稼働させた。
- 7月17日 A区西の第4層の掘り下げを開始。
- 7月22日 A区西の掘り下げを終了し、農道を除くA区東側（農道寄り）の東側剥ぎを開始。土層断面観察用ベルトの除去と等高線の実測作業を併行して行った。
- 7月24日 A区東の第2層・第3層の掘り下げを開始。
- 7月27日 A区東第4層の掘り下げと、新たにB区斜面（西側—以下B区西とする）の耕耘を開始した。

- 7月28日 B区の平坦部（以下B区東とする）の粗掘を開始。果樹園であったため、掘りやすく、作業の進行は早い。
- 7月29日 B区西にあり、手を付けれないでいた漆の木、大小30本をユンボにて抜根後、粗掘開始。土器・石器もA区に比較して多く出土する。
- 8月1日 調査済のA区西に砂利が敷かれ農道として使用可能になった。これで現農道の付替道路の約半分が完成したことになる。
- 8月4日 A区西に付替道路ができたので、その上のA区東にある現農道とその脇の未掘部分の粗掘を開始した。
- 8月17日 B区西の調査が終了し、付替道路が完成した。気温は33.6°Cとなったので、小休止を入れて作業を継続。ここ数日は猛暑が続いている。
- 8月24日 A区東で堅穴住居跡（SI02）と上坑（SKF03）を検出した。
- 8月25日 昨日検出した遺構の精査を開始。SKF03はプラスコ状土坑である。
- 8月27日 A区東の遺構精査を残して、調査の主力を再びB区に移した。
- 9月1日 A区東の堅穴住居跡の精査を継続。B区東でも堅穴住居跡（SI05）を検出した。
- 9月3日 B区東ではさらに堅穴住居跡（SI06・SI08）や土坑らしい遺構も検出された。検出次第に順次精査に入った。土坑と思われたものは全て耕作や木根による擾乱であることが判明した。
- 9月8日 北秋田農林事務所とB区東の現農道と、調査区外の果樹園への進入路の調査について現地で協議を行う。進入路部分の調査を先にやり、代替路ができるから現農道部分の調査をすることにした。
- 9月11日 雨のためB区東の堅穴住居跡の精査・実測をシートで仮設の屋根をかけて継続した。農道部分の掘り下げも併行した。調査区南東の半壠部（以下、C区とする）の粗掘も開始。
- 9月16日 C区西側で土坑を4基検出し、ただちに精査に入った。
- 9月17日 B区とC区の間にある埋没谷の調査を開始した。
- 9月24日 C区で検出した上坑群の精査・実測を集中的に行った。
- 9月25日 全ての遺構の調査を終了し、発掘調査の現場作業を全て完了した。

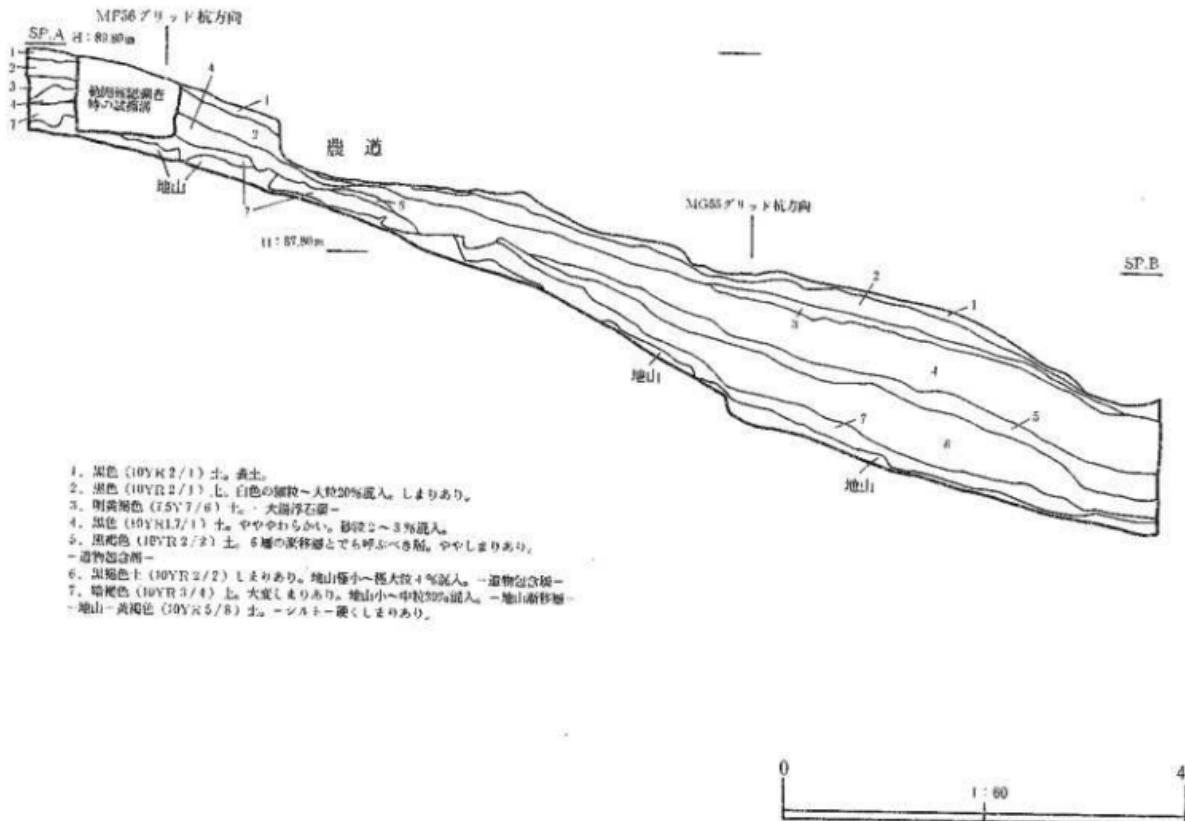
この後、12月から秋田県埋蔵文化財センターで遺物・図面の整理作業を行い、報告書を作成した。



第3圖 地形圖・調查区範囲



第4図 連絡配置図



第5図 遺跡基本層序図

第4章 調査の記録

第1節 基本層序

今回の調査地点は前述したように舌状台地の北西縁辺部の一部と北西の斜面であるが、地点により層厚など異なる様相を呈する地点もある。表土から地山まで8層に分層した。舌状台地全体が遺跡の範囲と思われるが、遺跡の南縁から北縁へ台地の東側を切り崩して農道が通り、調査区西側平坦部の南半分は果樹園造成による削平を受けている。

基本層序は大略以下のとおりである。

1. 黒色(10 YR 2/1)土。表土。一層厚10~25cm
2. 黒色(10 YR 2/1)土。白色の細粒~大粒20%混入。しまりあり。一層厚12~20cm
3. 明黄褐色(7.5 Y 7/6)土。一大湯浮石屑--層厚5~10cm
4. 黒色(10 YR 1.7/1)土。やややわらかい。砂粒2~3%混入。一層厚20~60cm
5. 黒褐色(10 YR 2/2)土。6層の漸移層とも呼ぶべき層。ややしまりあり。一遺物包含層--層厚18~25cm
6. 黑褐色土(10 YR 2/2)しまりあり。地山極小~極大粒4%混入。一遺物包含層--層厚10~20cm
7. 暗褐色(10 YR 3/4)土。大変しまりあり。地山小~中粒20%混入。一地山漸移層--層厚10~15cm
8. 黄褐色(10 YR 5/8)土。硬くしまりあり。一地山--
地山までの深さは西側平坦部で60~160cm、北端部では90cm、埋没谷は2m以上に達する。
遺構確認面は5層上面である。

第2節 検出遺構と遺物

遺構は竪穴住居跡6軒、土坑9基を検出した。以下、竪穴住居跡、土坑の順番に記述する。なお、遺物の出土地点については土器(「RP!と略す)、石器類(「RQ!と略す)の平面分布図・垂直分布図を掲載したので、その図を参照していただきたい。また、石器には、挿図中の番号の先に「S」を付して、土器と区別して記述する。図版中の番号もこれにしたがった。

1 壁穴住居跡

調査区の北西部（A区）で1軒、中央部（B区）で5軒を確認した。A区の1軒とB区の5軒のうち1軒の計2軒は全掘したが、B区の4軒は1/3か半分ほどは路線外のため、全掘できなかった。なお、柱穴は「P」と略称し、たとえば柱穴1は「P1」とし、押図中の標記もこれにしたがった。

S I 02壁穴住居跡（第6図、図版3）

【検出位置】 A区の傾斜面MG57グリッドに位置し、5軒で確認した。

【平面形と規模】 平面形は梢円形で、規模は長軸3.02m、短軸2.35mである。面積は5.6m²である。

【柱穴】 柱穴は、長軸に直交するように、中央に3本（P.1～P.3）配置されている。本道構外の壁際の7箇所に不整円形、もしくは不整梢円形の柱穴らしいプランを検出したが、並びが不規則で、断面形が擂鉢形であったり、底面に凹凸があったりすることから攪乱の痕跡と判断した。

【床面】 平坦でしまっている。

【壁の状況】 斜面に構築されているため、南西側の壁は無い。壁高は北西側で0.64mである。

【壁溝】 検出されなかった。

【炉】 南西側の壁寄りP1とP2の間に地床炉を検出した。炉の平面形は梢円形で、その規模は長軸0.68m、短軸0.26mである。

【堆積物の状況】 上廻断面図は2本（S.P.A～B, S.P.C～D）を作成した。土色はいずれも褐色系である。S.P.C～Dの断面によれば斜面の上から自然に流入した堆積状況であるが、S.P.A～Bの場合、3層に地山粒子が30%混入し、各層の厚さが場所により異り、波状を呈することから、人為堆積と考えられる。

【その他の付属施設】 検出されなかった。

【出土遺物】 (第13図1, 2) 床面より土器が2点出土した。同一個体の深鉢形土器の胴部片である。無文で、胎土に多くの砂粒を含み、脆い。色調は、赤褐色を呈する、比較的薄い土器である。構築時期は、出土土器から、中期か後期と考えられる。

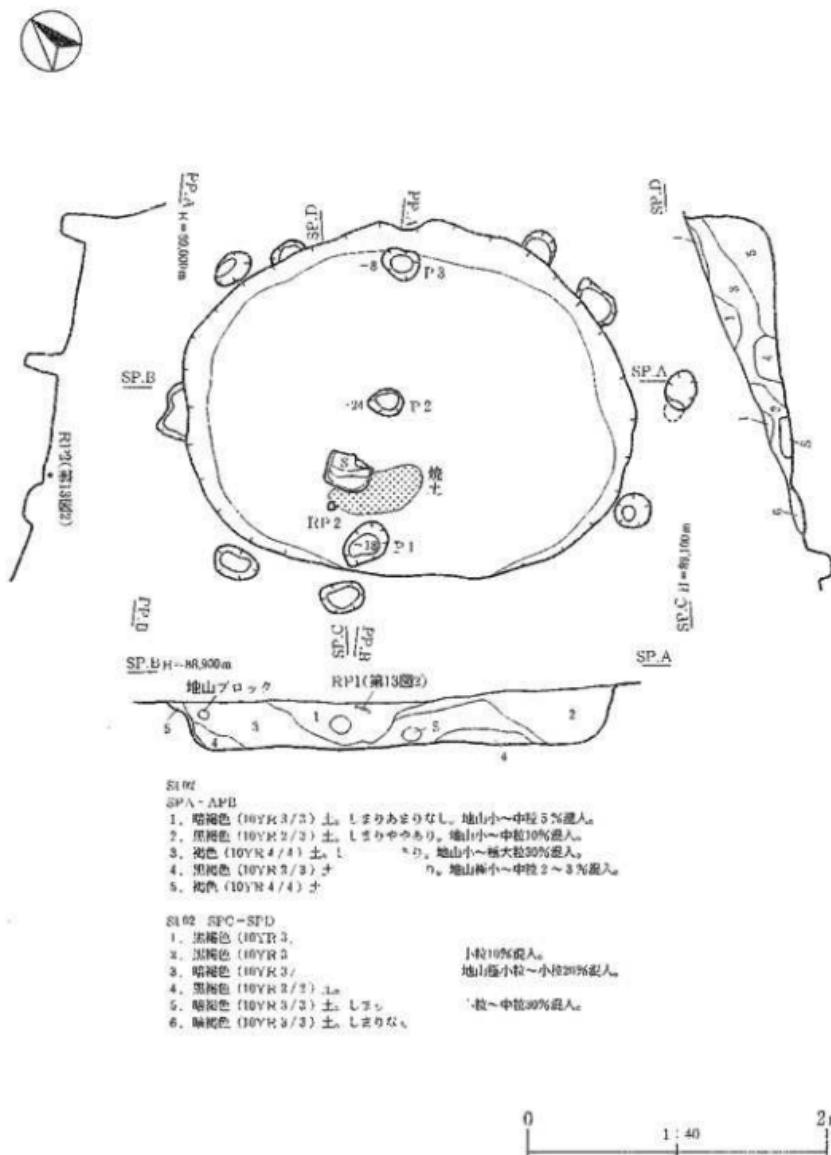
S I 05壁穴住居跡（第7図、図版3）

【検出位置】 B区のL.O46・L.P46グリッドに位置する。5軒で検出した。

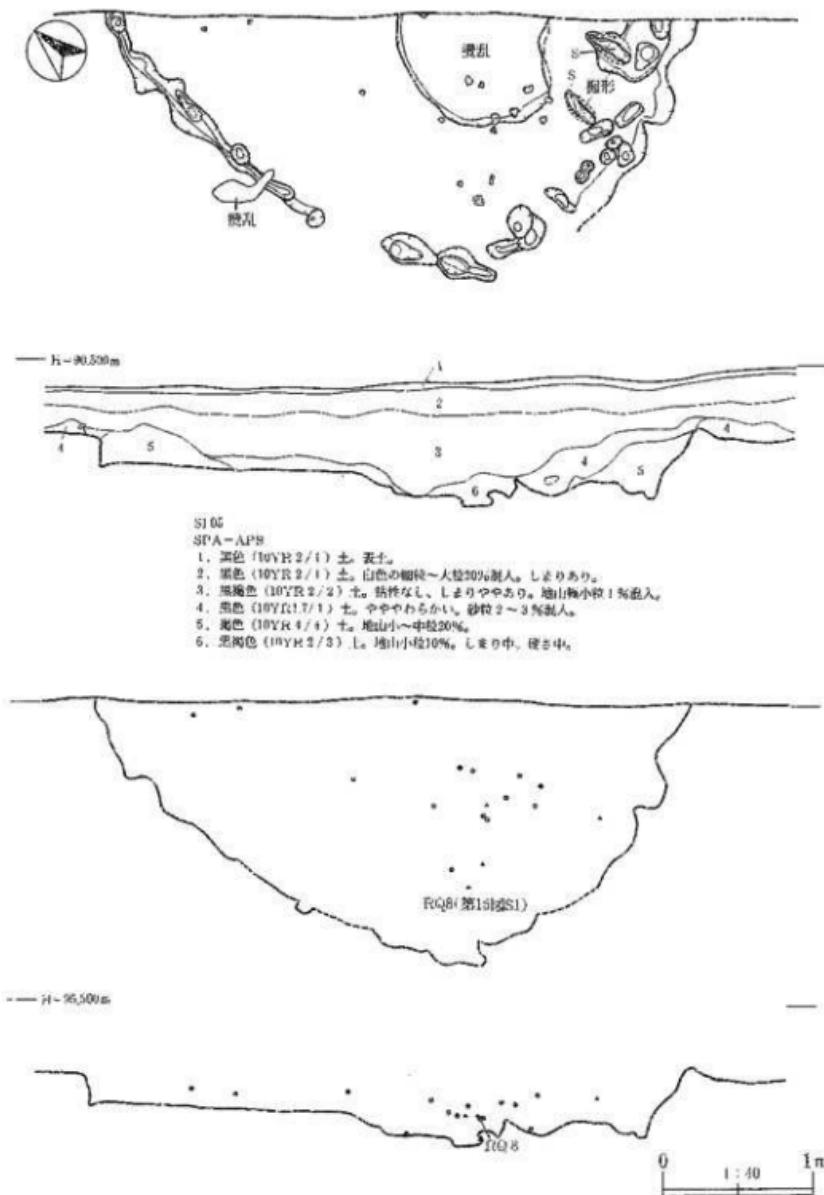
【平面形と規模】 住居跡の半分は調査区外で全容は不明であるが、平面形はほぼ円形になるものと思われる。現存部の直径は3.95mである。

【柱穴】 壁際にはあるものの、主柱穴と思われるものは検出されなかった。

【床面】 中央～南東部は木根や耕作によると思われる凹凸がある。それ以外はほぼ平坦である。



第6図 SI 02平・断面図



第7図 S I 05平、断面図、遺物分布図

【壁の状況】 調査した部分は木根と耕作による擾乱や削平を受けていたため、本来の高さは残っておらず、部分的に消失している所もある。調査区境の十層断面によれば、壁高は0.17～0.47mである。

【壁溝】 炉周辺の他、擾乱や削平により部分的に途切れている所もあるが、全周するものと思われる。壁溝は幅0.05m～0.18mで、それに沿って、間隔は一定しないが、径0.06m～0.25m、深さ0.06～0.30mの竪柱穴が並ぶ。

【炉】 南東の壁際に、長さ0.30～0.33mの長椭円形の自然礫が、壁に向って0.37mの間隔で2箇平行に並んでいる。自然礫はいずれも石自体よりひと回り広い掘方をもつ。自然礫間やその周囲に焼けた痕跡はないものの、人為的に埋められたものであることから、炉として使用されたものと考えられる。

【堆積土の状況】 十色は褐色系を主体にしており、埋土は3～6層でそのうち、5・6層には地山粒子が混入している。レンズ状の堆積をしていることから自然流入して堆積したものと思われる。

【その他の付属施設】 2箇の炉石のやや北側の床面に、最大長0.96m、深さ約0.30mの落ち込みを確認した。これらのはば直下に、本住居跡構築以前の倒木痕があるが、床面や土層断面観察の結果、住居跡廃絶後に倒木痕の隙間に落ち込んで塞みになったものと判断した。

【出土遺物】 (第15図S 1・2) 土器は細片が多く図示できなかったが、焼成・胎土とも良好で、色調は浅黄橙色を呈することから、中期の所産かと考えられる。石器のS 1は削器で、裏面の右側縁には調整剥離を施し、左側縁には刃こぼれが残る。S 2は磨製石斧破片で、刃部がわずかに残る。

S I 06竪穴住居跡 (第8図、図版4)

【検出位置】 B区のLP47・LQ47グリッドに位置する。5層で検出した。

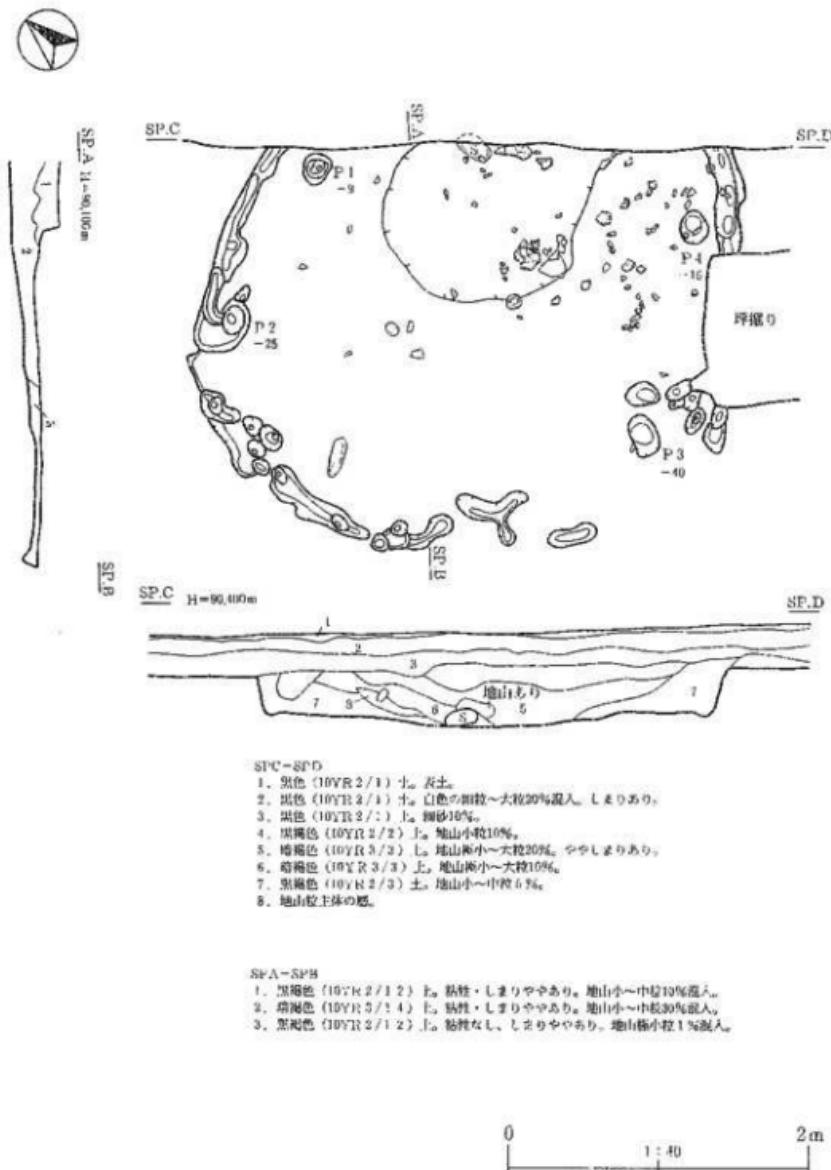
【平面形と規模】 住居跡の1/3ほどは調査区外で全容は不明であるが、平面形はほぼ椭円形になるものと思われる。現存部の最大長は3.63mである。

【柱穴】 壁溝のやや内側に4本(P 1～P 4)の柱穴がある。平面形や配置状況、深さから判断して竪柱穴と考えられるもので、椭円形の長軸の壁に沿って、調査区外にもう2本は配置されるものと推定される。

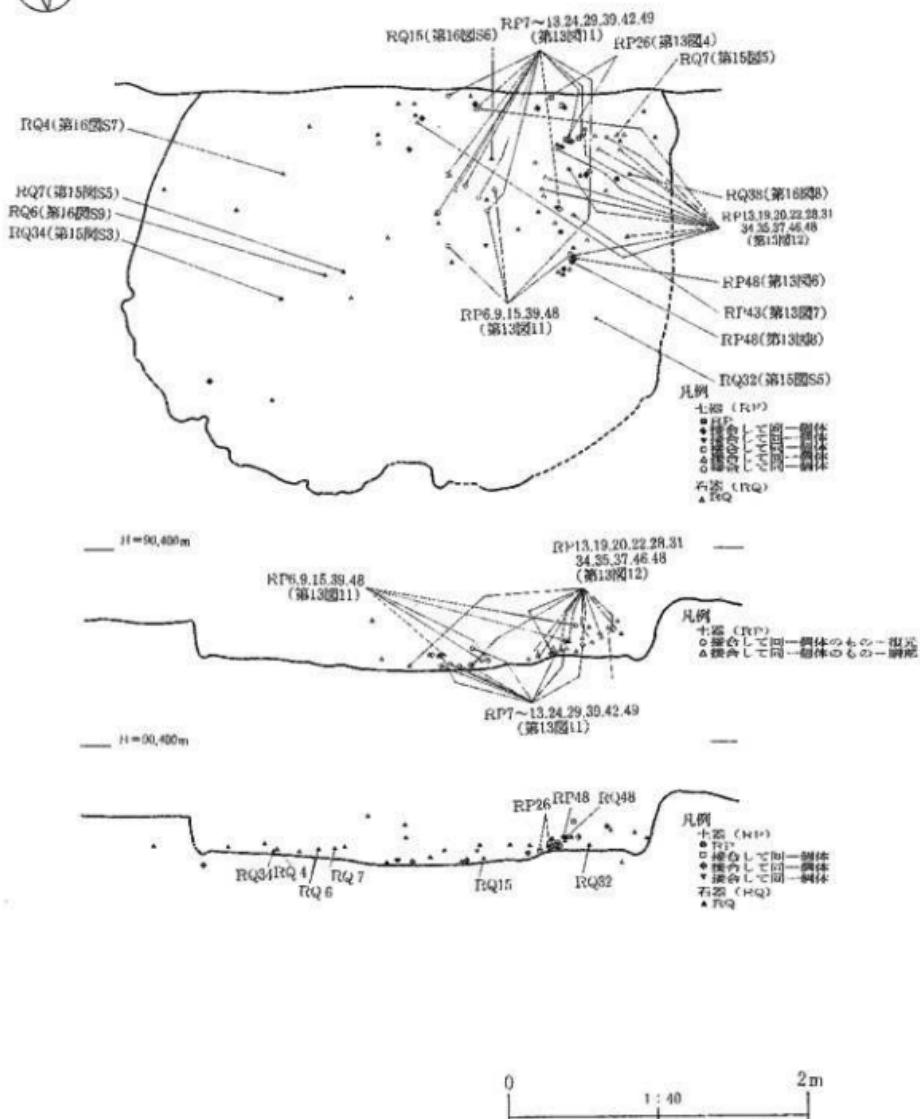
【床面】 平坦で比較的良く締まっている。

【壁の状況】 範囲確認調査時の坪掘りや耕作によるとと思われる削平で南側と西側で一部途切れる。遺存状態の良い北東側での壁高は0.26m～0.42mである。

【壁溝】 上記のように壁の途切れている所は壁溝も残っていない。現存部分の壁溝は幅0.07m～0.18mで、それに沿って、間隔は一定しないが、径0.09m～0.20m、深さ0.03～0.15mの竪柱穴が並ぶ。



第8図 S I 06平・断面図



第9図 S I 06遺物分布図

【か】 炉は検出されなかった。調査区外の壁に長楕円形の自然石が一部見えているが、炉石かどうか不明である。

【堆積土の状況】 調査区と未調査区との境の土層断面に(S P.C~D)によれば4層目から掘り込まれている。遺構内は4層に分層した。8層は地山がブロック状に入るが、それ以外は、暗褐色土で地山粒子の混入度が低く、レンズ状の堆積状況を呈することから、自然に流入したものと思われる。

【その他の付属施設】 床面のやや北東側に不整楕円形の落ち込みを検出した。最大長1.33m、深さ0.05~0.08mで、断面形が浅皿状であるが、その性格は不明である。また、南壁の柱穴(P 3)との間の壁が0.78m途切れている。特別硬化してはいないが、あるいは出入口かとも考えられる。

【出土遺物】 (第13図3~11、第14図12、第15図3~5、第16図6~9) 上器はいずれも深鉢形土器である。3は波状口縁の波頂部に隆沈線による渦巻文、その下に沈線による曲線的な文様を施している。5・8も沈線による曲線的な文様を施す胴部片で、6はさらにその下に垂下する2条の沈線を施す。7は縄文地の口縁部に瓜形文を施す。11は胴部上半へ口縁部と底部から復原実測したもので、小波状口縁で、胴部は縄文地、肥厚した口縁部には凹線文がめぐる。

S 3・4は石鎚で、S 3は円基鎚、S 4は円基有茎鎚である。S 5~S 7は削器で、S 5は縦長で両面の両側縁に剥離痕を有し、S 7は横長で、両面の周縁に調整剥離によって刃部を作出している。S 8は搔器で、調整剥離を施さないが、横長の両端が鋭く尖る。S 9は凹みと擦面を有する疊石器である。本遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉の大木8b式期と考えられる。

S I 08豎穴住居跡(第10図、図版4)

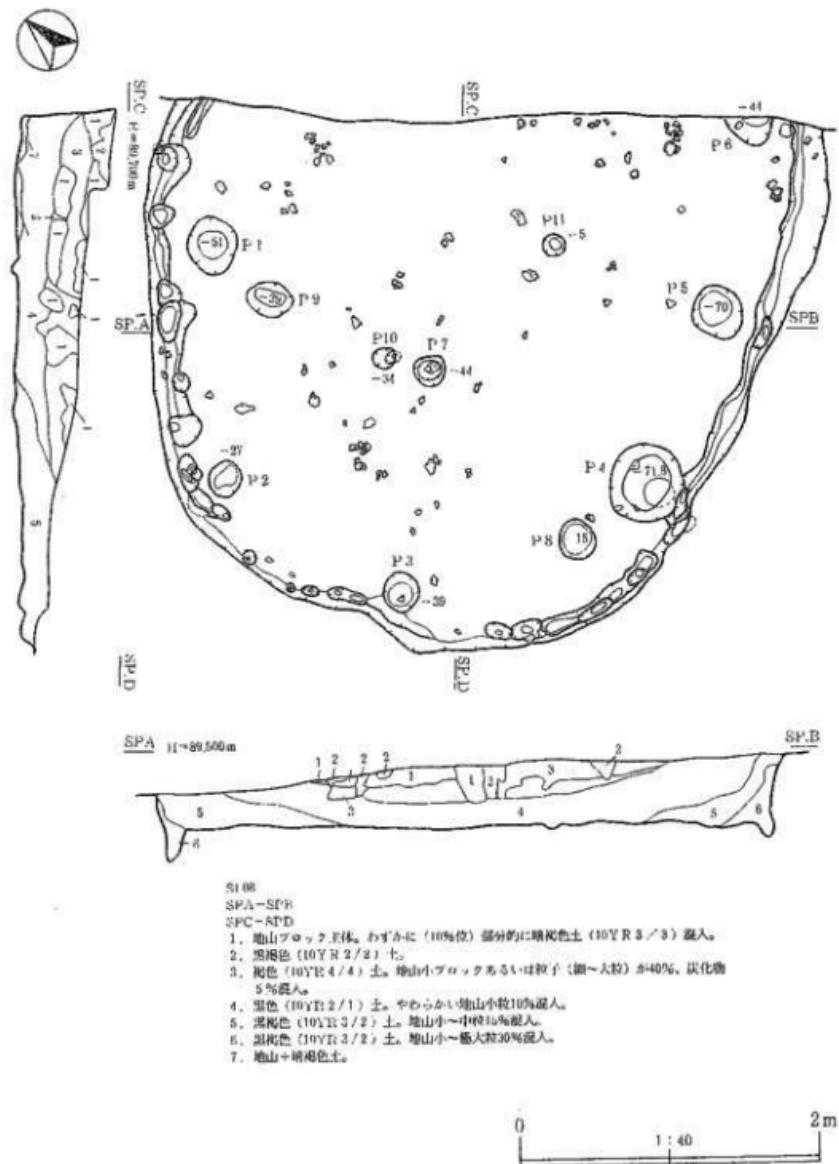
【検出位置】 B区のL R48・L49グリッドに位置する。5層で検出した。

【平面形と規模】 住居跡の1/3ほどは調査区外で全容は不明であるが、平面形は楕円形になるものと思われる。短軸4.48mで、長軸は現存部分で3.62mである。

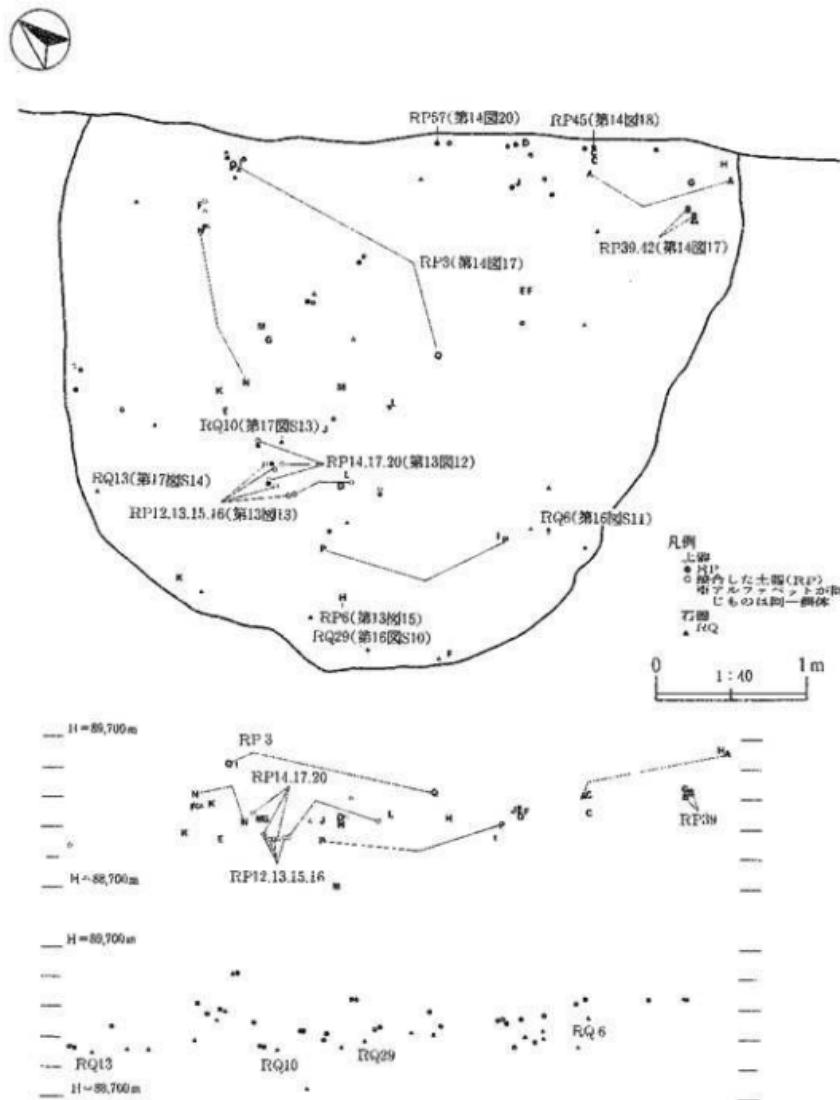
【柱穴】 11本の柱穴を検出した。このうち主柱穴は、径や深さ・柱の間隔から、P 1~P 7までと推定される。P 1~P 6は壁際に沿い、P 7は短軸のほぼ中央に位置する。P 8も壁際に位置するが、深さ15cmと他の柱穴よりも極端に浅いことから、支柱と考えられる。P 9~P 11は、平面形・規模・深さ・柱配列が他の柱穴と異っており、その機能は不明である。

【床面】 平坦で良く締まっている。

【壁の状況】 他の豎穴住居跡に比較して壁の遺存状況は良好である。西側に緩傾斜しているため、壁高は東側で0.63mあるが、西側では0.20mである。



第10図 SI 08平・断面図



第11図 S.I. 06遺物分布図

【壁溝】 南西部で部分的に1箇所途切れている。壁溝の幅は幅0.06m～0.25m、それに沿って、間隔は一定しないが、深0.06m～0.27m、深さ0.05m～0.16mの壁柱穴が並ぶ。

〔か〕 検出されなかった。

【堆積土の状況】 7層に分層した。土色は黒褐色土もしくは黄褐色土を主体にしており、このうち1～3層は3層中に1層の地山大ブロックが多く混入した感のある堆積状況を呈していることから、人為堆積と考えられる。1～3層の下位の4～7層、特に4・5層はレンズ状の堆積を呈していることから、自然流入による堆積と考えられる。したがって住居跡が自然に埋まりきらない廃地となっている時点で、人為的に埋められたものと考えられる。

【その他の付属施設】 上記のように南西部の壁溝は一部途切れている。その壁際には支柱穴P3とP4があり、その間のP4寄りに支柱P8が配されている。そしてそのP3とP8の間の外側にある壁溝はP3との間で0.50mほど途切れる。途切れた部分の床面や壁の外側は特別踏み固められた痕跡はないものの出入口の可能性も考えられる。

【出土遺物】 (第14図13～20、第16図S10・11、第17図S12～14) 土器の20は浅鉢形土器で、他は深鉢形土器である。13は波状口縁で、口縁部は無文、胴部は撚糸文地に3条の沈線を横位に施文する。14～16は胴部に数条の沈線による曲線的な文様を施文するもので、15は渦巻状の文様も施文する。7は無文地に懸垂文を施文する。20は平口縁で、繩文地である。口縁に併行してめぐる隆沈線が、胴部から伸びる曲線的な隆沈線と連結する。

S10は凸基有茎鐵、S11・12は尖基鐵である。S13・14は綫長の削器で、片側縁もしくは両側縁の片面もしくは両面に剥離痕を残す。本遺構の構築時期は、出土土器から、縄文中期の大木8b式期と考えられる。

S I 09堅穴住居跡 (第12図、図版4)

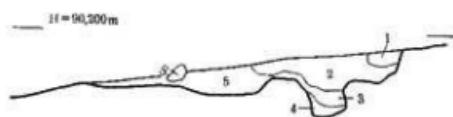
【検出位置】 B区のLN44グリッドに位置する。5層で検出した。

【平面形と規模】 西側は農道造成の際に削平されたためか、壁は遺存していない。現存部の平面形はやや丸味をおびた不整三角形である。規模は長軸2.37m、短軸2.15mである。推定面積は3.5m²である。

【柱穴】 本遺構床面のはば中央に柱があり、その周辺と壁際には柱穴が配置される。柱穴は、平面形が不整円形・不整橢円形で、大きさが一定せず、深さも0.03m～0.11mとまちまちである。ただ、P1は平面形が円形で、深さが0.21mと他に比較して深く、掘形もしっかりしていることから支柱穴と考えられる。

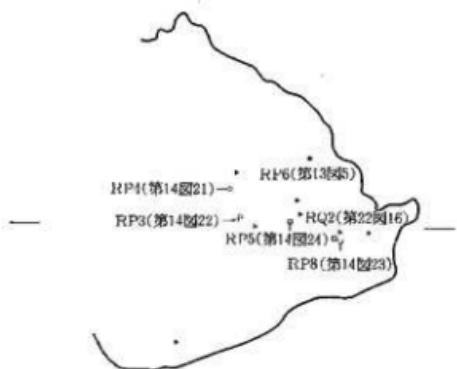
【床面】 やや凹凸があり、周辺の地山と変わらない硬さである。

【壁の状況】 西部に壁は遺存せず、残存している壁もかなり出入がある。壁高は東部で0.15mと浅い。

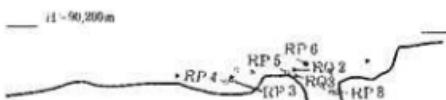


SP△=APB

1. 黒褐色 (10YR 3/2) 土。粘性なし、しまりあり。地山極小～大粒5%混入。
2. 黄褐色 (10YR 3/3) 土。粘性なし、しまりあり。地山極小～大粒15%混入。
3. 黒褐色 (10YR 2/3) 土。粘性・しまりあり。地山小粒10%混入。
4. にごい黄褐色 (10YR 4/3) 土。粘性なし、しまりややあり。地山中粒10%混入。
5. 黑褐色 (10YR 2/2) 土。粘性なし、しまりなし。地山極小～大粒5%混入。



凡例
上層 (RP)
同じ記号は同一個体
石器 ▲ RQ



0 1 m
1:40

第12図 S I 09平・断面図、遺物分布図

【壁溝】 検出されなかった。

【か】 床面のほぼ中央にあり、平面形は北西部が隅丸方形に近く、南東部が梢円形で、長軸0.91m、短軸0.59mである。断面形は漫皿形で、深さは0.11mの掘込部である。2辺に各1箇ずつ自然石が配されているかが石かどうかは判然としない。周囲には石の抜き取り痕は検出されなかった。また、掘り込み面や石に焼けた痕跡は確認されなかった。

【堆積土の状況】 5層に分層した。1層は確認面から掘り込まれており、断面形が柱穴様を呈することから本造構よりは新しいと考えられる。したがって、本造構の堆積土は1～4層で、地山粒子を含んだ黄褐色土か黒褐色土を主体にしている。堆積状況はレンズ状であることから、自然流入による堆積と思われる。

【その他の付属施設】 造構外の壁にはほど近い所に柱穴が2本検出されたが、造構に伴うものかどうかは不明である。

【出土遺物】 (第14図21～25、第22図S15・16) 上器の21～24は深鉢形土器で、25は底部である。21・22は胴部に縫合の撚糸文を施文しており、22は口縁部を沈線で区画して無文帯とし、胴部に懸垂文を施文している。23は2条の沈線間に竹管文を施文する。S15・16は石鐵で、S15は尖基鐵である。S16は折損しているが、S15と同じ類かと思われる。造構の構築時期は、出土土器から、繩文時代中期の大木8b式期と考えられる。

S I 17整穴住居跡 (第18図、図版5)

【検出位置】 B区南東端のLJ40・LK40・LK41グリッドに位置する。5層で検出した。

【平面形と規模】 全体の2/3以上が路線外で、全容は不明であるが、調査部分は円形を呈し、その最大長は2.82mである。

【柱穴】 南西端寄りの床面上に長軸0.27m、深さ0.26mの梢円形の柱穴 (P 1) がある。この上には厚さ0.10mの灰白色粘土が覆っており、その範囲は0.20m×0.30mである。P 1の周囲には径0.10m、深さ0.08m～0.97mの柱穴が2本ある。この他、確実に径0.12m～0.15m、深さ0.11m～0.41mの柱穴が5本、不規則に配置されている。この5本の中で最も深いのはP 2としたものであるが、他は深さ0.11m～0.15mである。

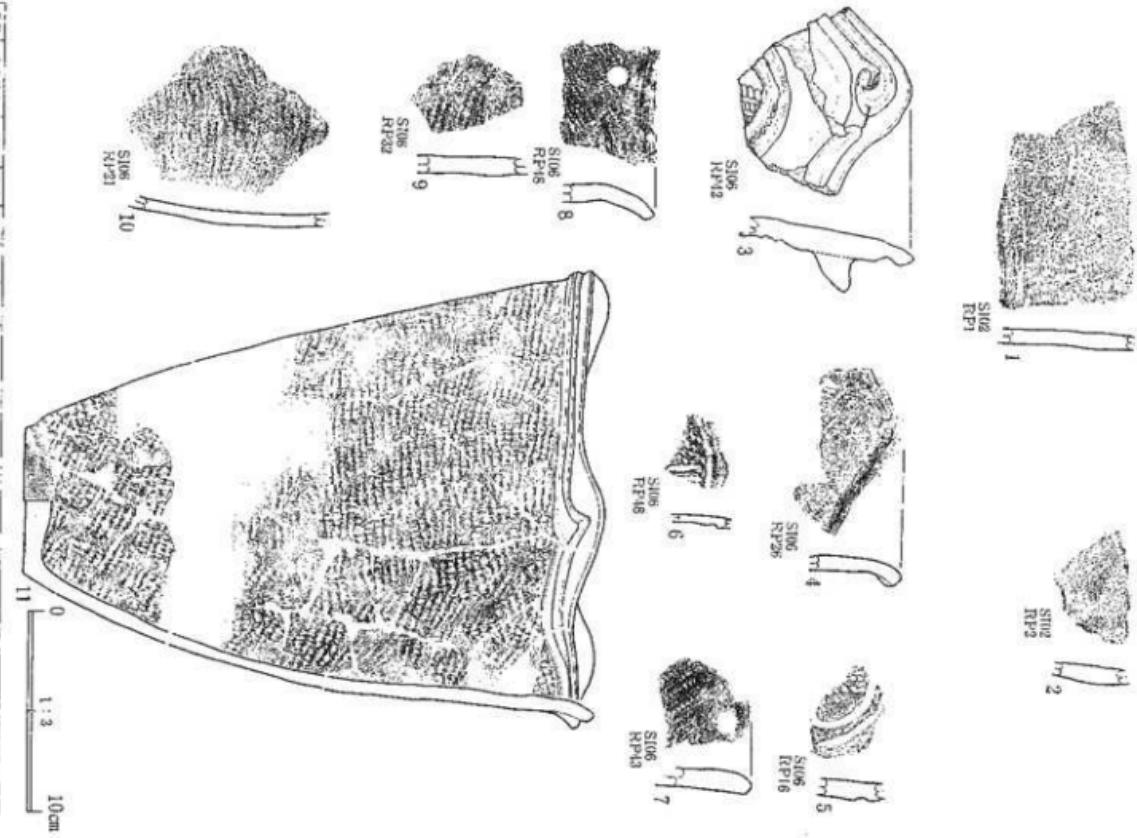
【床面】 やや凹凸があり、あまり締っておらず地山と同じ硬さである。

【壁の状況】 後世の擾乱や壁の崩落などにより多少の出入りがある。壁高は、調査区境で0.33mある。

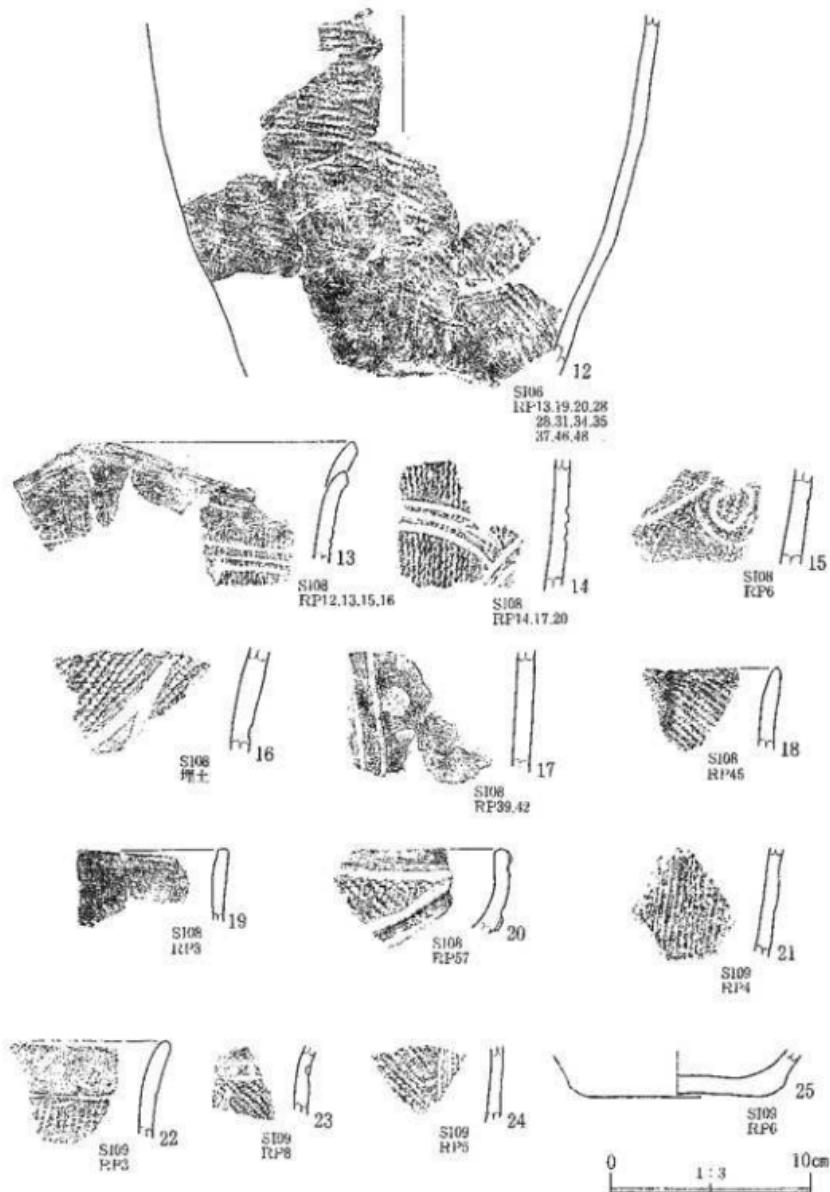
【壁溝】 検出されなかった。

【か】 検出されなかった。

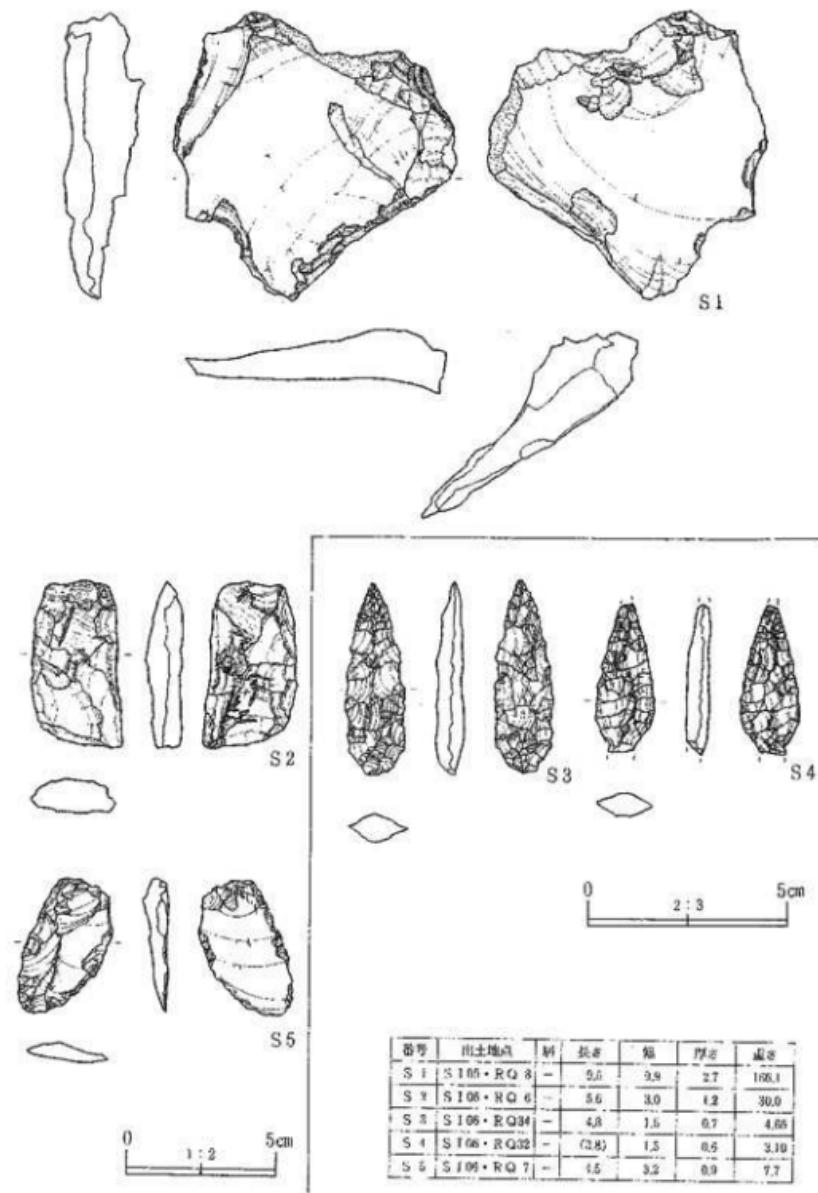
【堆積土の状況】 調査区境の土層断面によれば、2層の下から木造構が掘り込まれている。造構内は3～9層の7層に分層した。褐色土や暗褐色土を主体にしており、暗褐色土体である



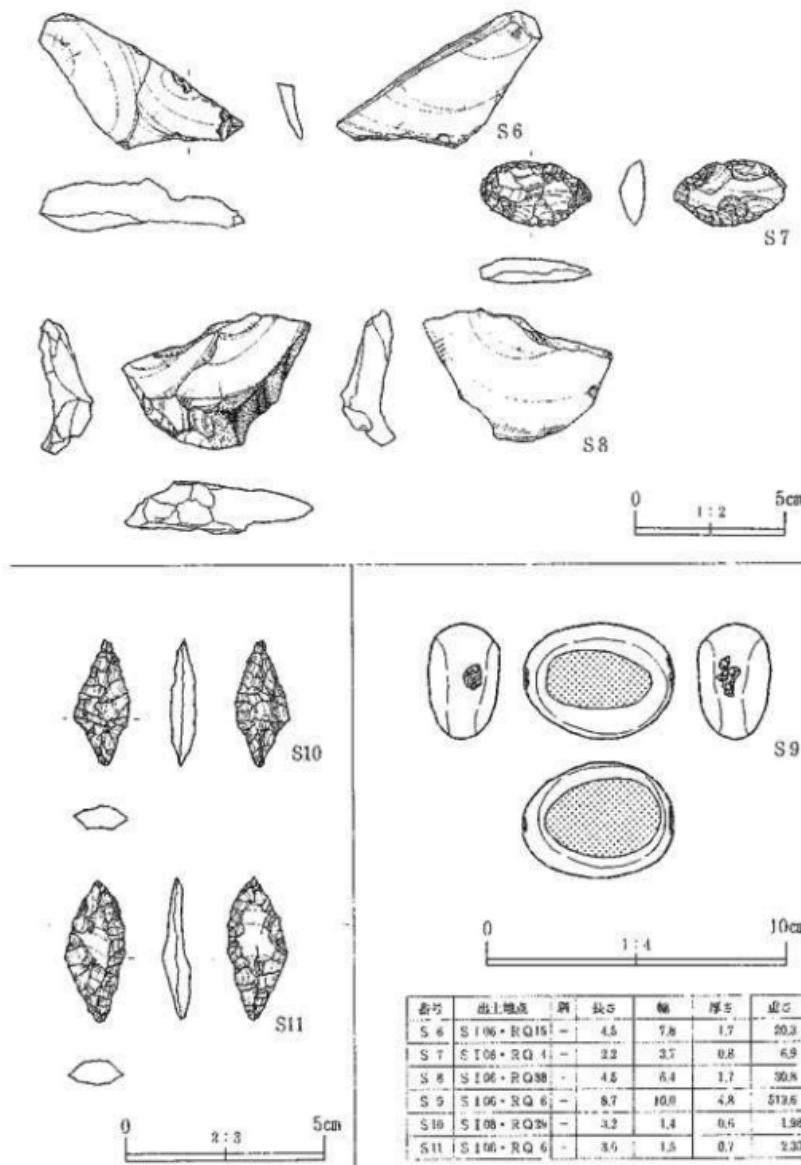
第13図 遺構内出土土器(1)



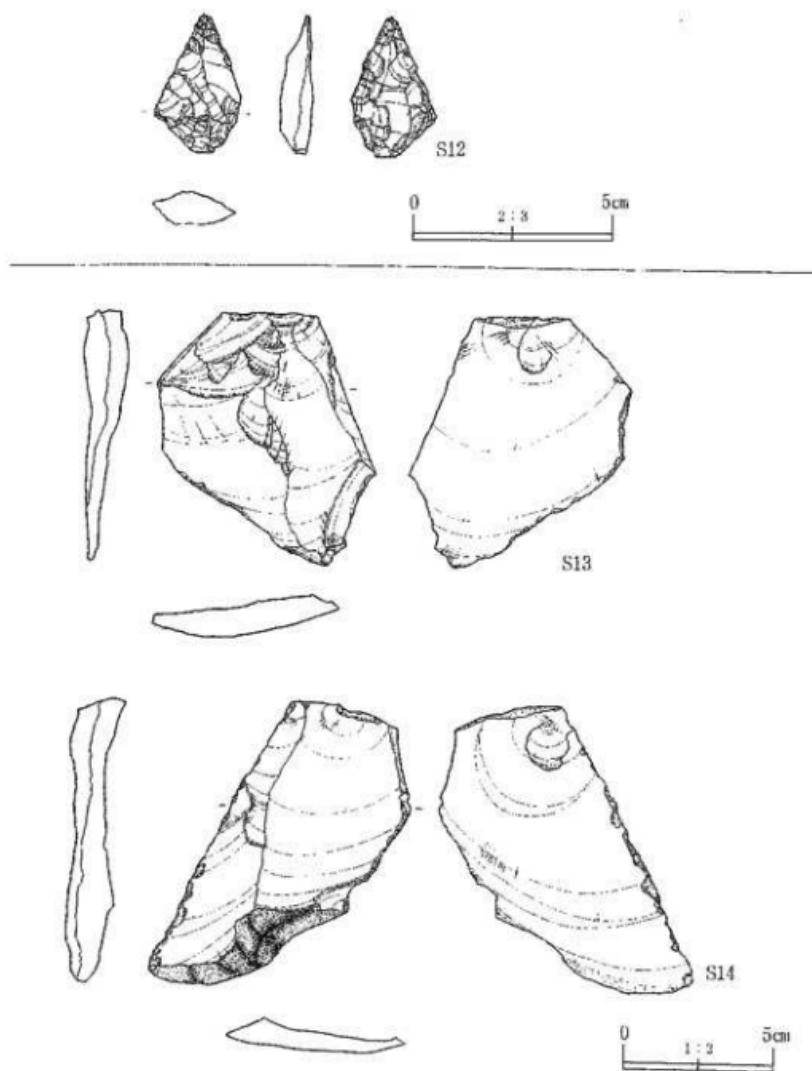
第14図 遺構内出土土器(2)



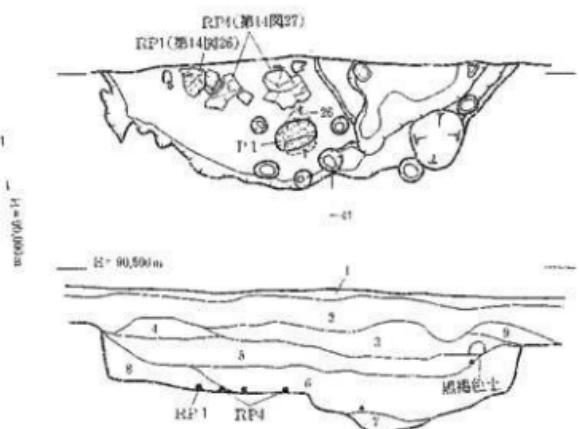
第15図 遺構内出土石器(1)



第16図 遺構内出土石器(2)



第17図 遺構内出土石器(3)



S I 17

1. 黒色 (10YR 2/1) 土。一表土。
2. 黒色 (10YR 2/1) 土。白色の礫付。大粒30%混入。しまりあり。
3. 黄褐色 (10YR 4/4) 土。地山層へ大粒のブロック状に50%混入。粘性あり。
4. 灰褐色 (10YR 8/4) 土。しまりあり。
5. 黑色 (10YR 1/1) 土。粘性。しまりあり。
6. 黄褐色 (10YR 3/4) 土。地山層へ中粒15%混入。
7. 黄褐色 (10YR 4/4) 土。地山層ブロック混入。
8. 黄褐色 (10YR 4/4) 土。地山層へ中～中粒30%混入。
9. 黑褐色 (10YR 2/2) 土。地山層小粒1%混入。

P1 (SI 17)

1. 灰白 (10YR 8/1) 色 (弱) 土。軟らかく、粘性あり。
2. 浅色 (10YR 4/3) 土。地山層へ大粒20%、炭化物小粒1%混入。さらさらして、しまり・粘性なし。



第18図 S I 17平・断面図

下位の4～8層は自然流入によるレンズ状の堆積状況を呈し、上位にある褐色土の3層は地山粒子がブロック状となって50%混入している。したがって、下位の4～9層は自然流入による堆積で、本遺構がほぼ埋まりかけて窪地となっている時に、3層が人為的に埋められたものと考えられる。

【その他の付属施設】 調査区境の南壁に接している落ち込みを一部検出した。現存部の規模は1.18m×0.61mで断面形は掘鉢状で、深さは0.26mである。炉に伴う可能性はあるものの、その機能は不明である。

【出土遺物】 (第21図26・27、第22図S17) 上器の26・27は平口縁の深鉢形の粗製土器である。いずれも口頸部が内寄り、口縁部が緩く外反する。S17は石皿で、全面に擦った痕跡が残る。遺構の構築時期は、出土した上器から、縄文時代中期中葉と考えられる。

2 土坑

A区で2基、C区で7基検出した。C区の土坑(SK10～SK16)は6層若しくは7層で検出した。いずれも遺構間の重複はない。

SKF03 フラスコ（袋）状土坑 (第19・21図)

【検出位置】 A区東側緩斜面のMG57グリッドに位置し、第4層上面で検出した。S102整穴住居跡の東側に隣接している。

【形状】 半分は調査区外であるが、平面形は円形を呈するものであろう。断面形はフラスコ状を呈する。

【規模】 開口部径1.85m、口頸部径1.66m、底部径2.40m、深さ1.50mである。

【堆積土の状況】 遺構は断面図中の7層から掘込まれており、1・3・4層はそれぞれ基本層序と一致している。遺構内は6～21層まで16層に分層した。土色は、上半部が黒褐色土、下半部が明黄褐色土を主体にして、地山土がブロックもしくは粒子となって混入している層が多い。特に下半部はその傾向が著しく、地山が50%ほど混入しているか、地山土主体の層が多い。

上層の堆積状況は上半部の6・8層はレンズ状に近い堆積であるが、8層以下の9・10層との境目は波状となる。下半部の9～21層も全体としてはレンズ状に近い堆積で、壁際が厚く、中央部にいくにしたがって薄くなる傾向がある。しかし、層それぞれの厚さ・形状・混入物など一様ではない。14・17層に黒褐色が薄く、端状に入る。以上のような状況から、本遺構は人為的に壁際から丁寧に埋められたと推定される。

【壁・底面の状況】 壁の凹凸は比較的少なく、底面は中央部がややくぼみがあるものの、他は平坦である。

【付属施設】 開口部の壁際に不整円形・不整方形の黒褐色土落ち込みを7箇確認したが断面

形が擂鉢状もしくは極端な凹凸があることから、根などによる擾乱と判断した。

【出土遺物】（第21図28～30、第22図S18）28は波状口縁で、円線文を施す上器である。29は無文、30は細い撚糸文を施す上器である。S18は石竈で基部に打面を残し、両面の周縁に荒い調整剥離を施す。遺構の構築時期は、出土した土器から、縄文時代中期中葉と考えられる。

S K04土坑（第19図）

【検出位置】△区東側緩斜面のMJ58グリッドに位置し、第6層上面で検出した。S102堅穴住居跡の北西側に位置している。

【形状】平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。

【規模】長軸1.12m、短軸0.84mで、深さ0.27mである。

【堆積土の状況など】5層に分層した。黄褐色土を主体にしており、2層の黒褐色土には地山粒子が20%混入し、3層の黄褐色土は地山ブロックを主体としており壁崩落土と考えられる。また、5層の黒褐色土には炭化物粒子が10%混入している。以上のように3層は壁崩落土と考えられ、土層の堆積状況はレンズ状を呈していることから、本遺構は自然堆積であると推定される。

【壁・底面の状況】壁に凹凸がなく、底面も平坦である。

【付属施設】検出されなかった。

【出土遺物】出土しなかった。

S K10土坑（第19図）

【検出位置】C区のKT28グリッドに位置する。

【形状】平面形は円形で、断面形は開口部がわずかに広がる、円筒形である。

【規模】直径0.82m、深さ1.20mである。

【堆積土の状況】9層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体にしており、全体的に地山粒子が混入している層が多い。このうち5層には地山粒子が30%混入し、7層は地山（黄褐色土）と暗褐色土が小ブロックもしくは粒子となり、混じりあっている。また、8層は地山が壁際に現状に入る。以上のように地山がブロック状にもしくは部分的構造となって混入し、また、層個々は、形が不定でレンズ状の堆積を呈していないことから、人為堆積と考えられる。

【壁・底面の状況】壁は凹凸がなく、底面は壁際から中央部が部分的に緩く、窪んでいるもののほぼ平坦である。

【付属施設】検出されなかった。

【出土遺物】出土しなかった。



第19図 SKF03・SK04・10平・断面図

SK11土坑 (第20図)

【検出位置】 C区のKG26グリッドに位置する。

【形状】 平面形は円形、断面形は壁の1/3ほどの上からやや開口する円筒形である。

【規模】 直径0.94m、深さ0.82mである。

【堆積土の状況】 5層に分層した。黒褐色土・黄褐色土(地山)を主体にしており、1~3・5層には地山粒子が混入し、4層は地山主体で黒褐色土が2~3%混入する。

上層はレンズ状の堆積を呈しており、4層の地山土体上は土坑断面の形状から開口部の壁崩落土と推定されることから、自然堆積と考えられる。

【壁・底面の状況】 壁はあまり凹凸がなく底面は平坦である。

【付属施設】 検出されなかった。

【出土遺物】 出土しなかった。

SK12土坑 (第20図)

【検出位置】 C区のKP27グリッドに位置している。

【形状】 平面形は橢円形、断面形は鍋底形である。

【規模】 長軸1.30m、短軸0.97m、深さ0.36mである。

【堆積土の状況】 2層に分層した。いずれも黒褐色土で、地山粒子をわずかに含むが他の混入物はなく、レンズ状の堆積であることから自然堆積と考えられる。

【壁・底面の状況】 壁は凹凸がなく、底面は平坦である。

【付属施設】 検出されなかった。

【出土遺物】 (第21図31~34) 31・32は無文地に粘土紐を貼付して区画文を施文する土器である。33は浅い沈線で曲線的な文様を施文している。本遺構は、出土遺物から、縄文時代後期前半に構築されたものと考えられる。

SK13土坑 (第20図)

【検出位置】 C区のLB31グリッドに位置する。

【形状】 平面形は円形、断面形は開口部がわずかに広がる円筒形である。

【規模】 直径0.85m、深さ1.20mである。

【堆積土の状況】 5層に分層した。上部の1~3層は黒褐色土、下部の4・5層は極暗褐色で1~3層より暗い土色で、いずれも地山粒子が混入している。特に3層には地山が40%混入し、地山の粒子・小ブロックが厚さ1~3cmの鍋状となっている。

土層の堆積は、最下部の5層が地山ブロックを含む水平な堆積で、その上の4層中央部に3層が「U」字状に近い堆積をしていることから人為堆積と考えられる。

【壁・底面の状況】 壁は凹凸がなく、底面は平坦である。

〔付属施設〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

S K14土坑 (第20図)

〔検出位置〕 C区のKN26・27グリッドに位置する。

〔形状〕 平面形は円形、断面形は開口部がわずかに広がる円筒形である。

〔規模〕 直径0.73m、深さ1.42mである。

〔堆積土の状況など〕 6層に分層した。土色は黄褐色か黒褐色が主体で、上部の1・2層には地山粒子が混入している。3・4層は黄褐色土(地山)と黒褐色土が共に認められる層で、5層は地山の二次堆積層である。

土層の堆積状況は1～4層まではレンズ状の堆積であるが、下部の5・6層はほぼ水平な堆積を示す。3層は地山と黒褐色土が交互に縞状に堆積し、4層は地山と黒褐色土の混合層で、5層は厚さ5～8cmで、意識的に敷かれたような状況である。以上のことから、本遺構は、人為堆積と考えられる。

〔壁・底面の状況〕 壁は全体的にわずかに凹凸があり、底面はほぼ平坦である。

〔付属施設〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 出土しなかった。周辺のグリッドから前期前半の円筒下層式土器が集中的に出土していることから、本遺構は該期に構築された可能性が高いと考えられる。

S K15土坑 (第20図)

〔検出位置〕 C区のKS25グリッドに位置する。

〔形状〕 平面形は円形、断面形は開口部がわずかに広がる円筒形である。

〔規模〕 直径1.21m、深さ0.99mである。

〔堆積土の状況〕 4層に分層した。土色は黒色か黒褐色で、いずれも地山粒子が混入している。3層には壁崩落土と思われる地山ブロックも実際に混入している。

土層の堆積状況は最下層の4層がほぼ水平で、3層から上が厚目のレンズ状を呈している。以上のように、上記の混入物や堆積状況の様子を勘案すれば、人為堆積と考えられる。

〔壁・底面の状況〕 壁は凹凸がなく、底面も平坦である。

〔付属施設〕 検出されなかった。

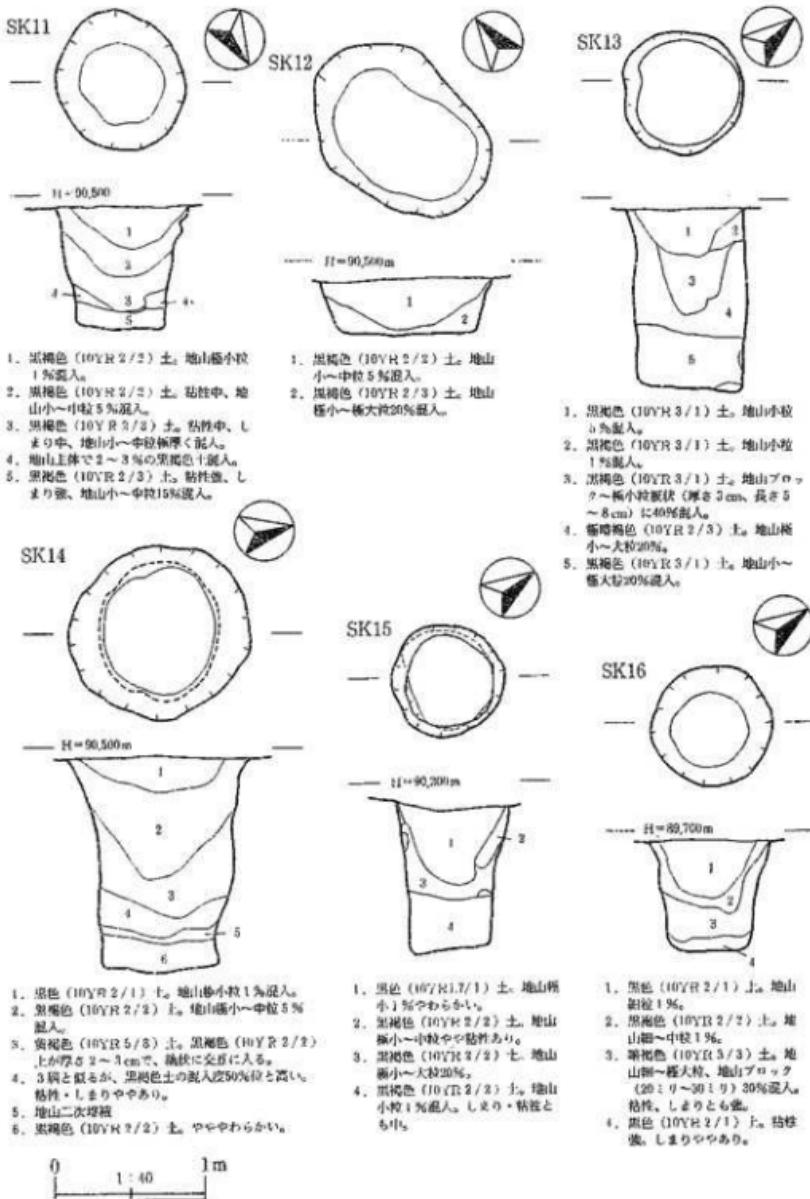
〔出土遺物〕 出土しなかった。

S K16土坑 (第20図)

〔検出位置〕 C区のKG27・28グリッドに位置する。

〔形状〕 平面形は円形、断面形は上半部がやや開口する円筒形である。

〔規模〕 直径0.81m、深さ0.73mである。



第20図 SK11・12・13・14・15・16平・断面図

图21图 遗物出土土器(3)

器物	出土地点	层位	尺寸	说明
25	S1 II	B2 I	9.85	直口瓶，腹部有浅刻划纹，口沿有深刻划纹。
26	S1 II	B2 I	11.05	直口瓶，腹部有浅刻划纹，口沿有深刻划纹。
27	S1 II	B2 I	11.05	直口瓶，腹部有浅刻划纹，口沿有深刻划纹。
28	S1 II	B2 I	11.05	直口瓶，腹部有浅刻划纹，口沿有深刻划纹。
29	S1 II	B2 I	11.05	直口瓶，腹部有浅刻划纹，口沿有深刻划纹。
30	S1 II	B2 I	11.05	直口瓶，腹部有浅刻划纹，口沿有深刻划纹。
31	S1 II	B2 I	11.05	直口瓶，腹部有浅刻划纹，口沿有深刻划纹。

比例尺 1:3 10cm

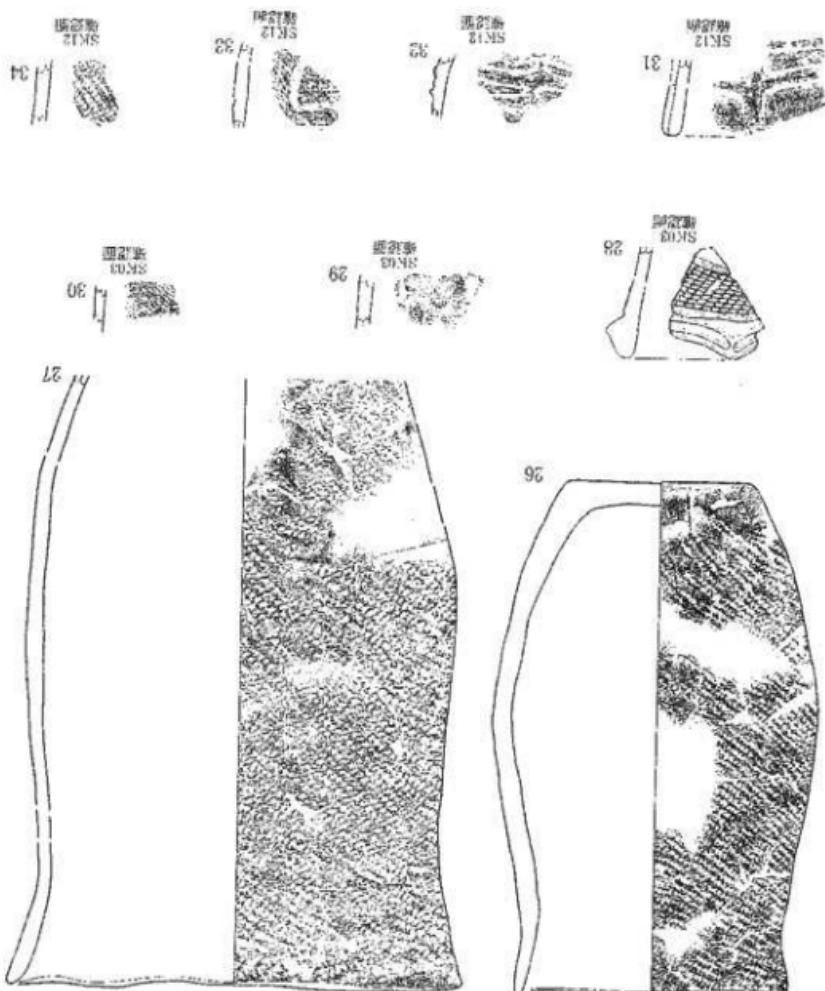
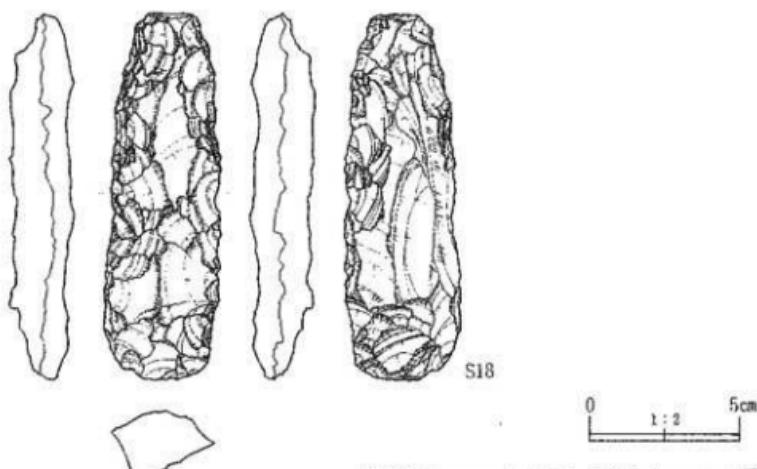
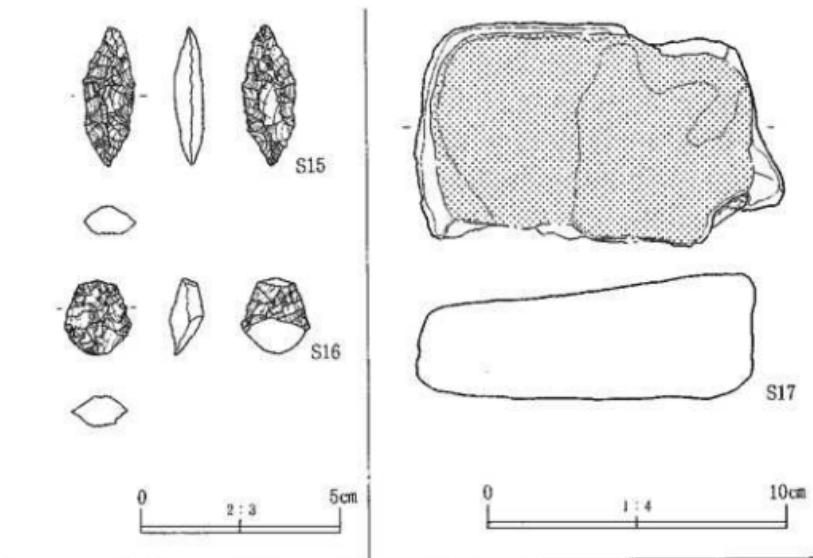


图21图 遗物出土土器(3)



番号	出土地点	器	長さ	幅	厚さ	重さ
S15	S 109・RQ 3	-	3.5	1.3	0.7	2.8
S16	S 109・RQ 2	-	1.9	1.6	0.8	2.17
S17	S 117・RQ 1	-	15.1	24.6	8.8	4096.0
S18	S 503・複数個	-	12.1	3.9	2.2	105.3

第22図 遺構内出土石器(4)

〔堆積土の状況〕 4層に分層した。上色はいずれも褐色系で、3層には地山粒子・ブロックが30%混入し、粘性強く、しまりがある。

土層の堆積状況は1～3層は波うちながらもレンズ状に近いが、最下部の4層は水平に近い堆積状況である。以上のように、混入物や堆積状況から人為堆積と考えられる。

〔壁・底面の状況〕 壁の半ばから上部にかけて部分的に凹凸がみられる。底面は平坦である。

〔付属施設〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

第3節 遺構外の出土遺物

遺構外からは、縄文時代早期・前期・後期の土器・石器と土製品・石製品が出土している。出土した遺物は土器類3,873点、石器類769点で、大コンテナ（59cm×38.6cm×20.7cm）で14箱ほどの量である。グリッド別の出土量（第2・3表）をみると量にはらつきがあるものの埋没谷を除き、ほぼ全域に分布する。特に住居跡群の多いB区に集中する。時期別の大まかな傾向をみるとA・B区では中期の土器が圧倒的に多いが、A区では前期後半や後期前半の土器も出土している。また、C区では、中期の土器はA・B区ほど多くなく、後期前半や前期前半の土器も出土している。特に東端のSK14周辺からは前期前半の土器が主体を占める。

出土地点・櫛名は、器形を復原できたものは観察表中に記入し、破片についてはその下に明記している。また、石器は全て観察表中に記入している。なお、説明にあたって必要な土器は遺構内のものも適宜、引用した。遺構内・外出土土器・石器の番号はそれぞれ通し番号となっていることから、挿図番号を省き、挿図中の土器・石器番号のみを記した。

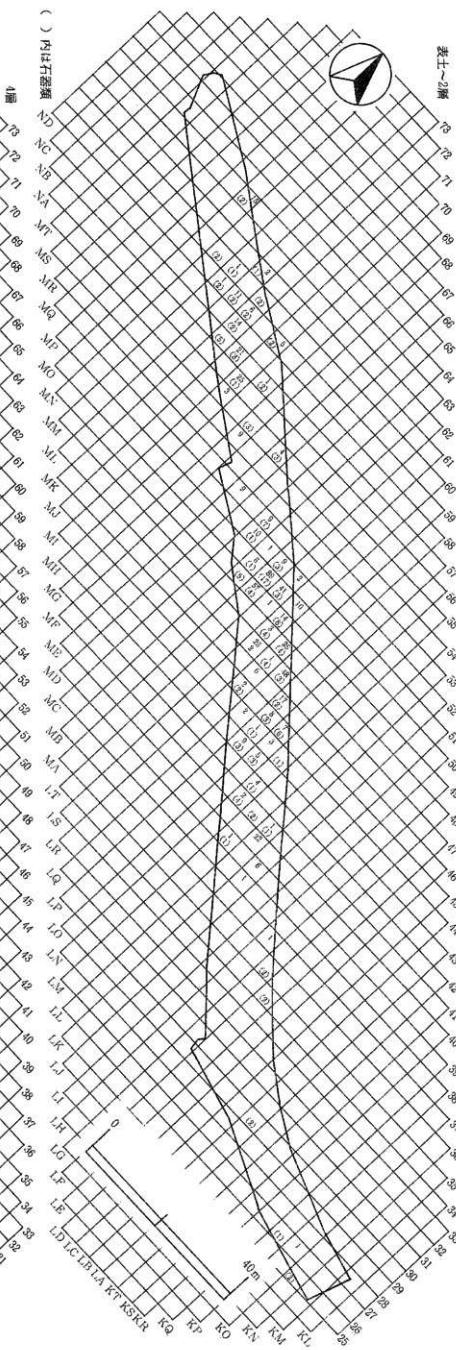
1. 土器

土器の分類は時期毎に群に分け、その中で口縁部を中心に器形・文様構成から類別し、文様の施文手法の差異によって細分した。

I群土器 早期の土器（35～38）である。いずれも色調は褐色～赤褐色で、器厚が5～6mmと薄く、焼成は良好である。37は胎土に纖維を含む。35・36は外面に極く浅い沈線を施し、内面はもっと深い沈線である。37・38は35・36よりもやや深めの沈線を施し、内面は条痕の土器である。

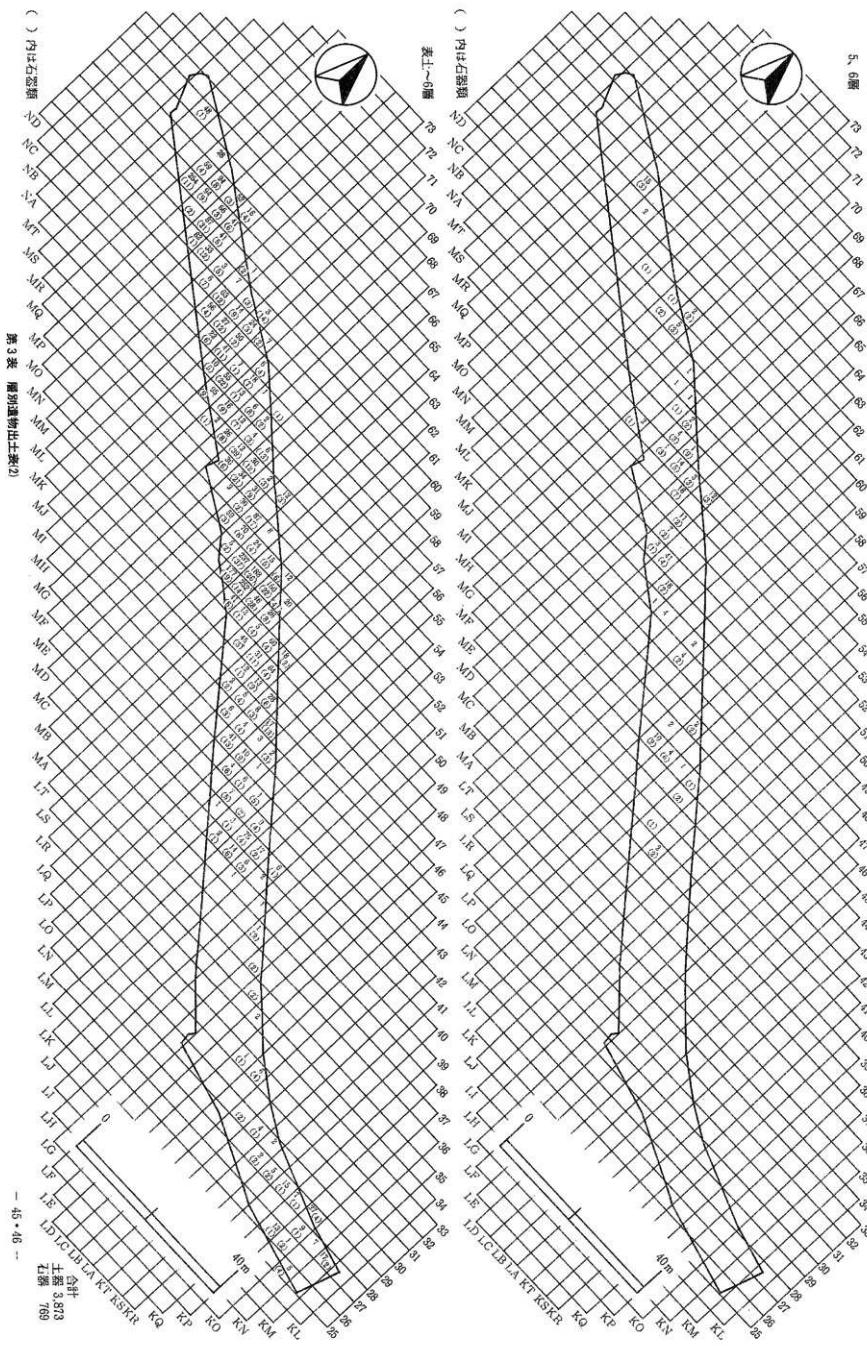
いずれも、早期中葉のムシリI式あるいは楕木I式に見られる幾何学的な細隆起線文が沈線に置換された土器である。

第三回 遊興外の出上:遊物



10

第三節 遺構外の出土遺物



II群土器 前期の土器である。

1類 (39~41)

いずれも深鉢形土器で、同一個体と思われる。口縁部に太い隆帯をめぐらし、その隆帯上に瓜形文を、胴部に不整撚糸文を施文し、胎土に纖維を含む土器である。40・41は胴部片で、39と似た特徴をもつ。いずれも前期前半の円筒下層b式土器である。

2類 (42~55)

口縁部文様帶に主として繩文原体か絡条体の側面圧痕文を施文するものである。内面は研磨されて平滑である。

a種 (42~45, 50・52・53) 平口縁で、口縁部文様帶の幅が狭く、主にその下端に細く低い形ばかりの隆帯を有する土器である。53は小型の土器である。前期前葉の円筒下層d式土器である。

b種 (46・47・49・51・54) 口縁部文様帶が比較的広く、主として側面圧痕文を斜位または縦位に施文する上器である。46・49・51・54・55のように波状口縁を呈する土器もある。円筒下層d式土器である。54は胴部上半に最大径があり、隆帯上に竹管文を、胴部には木目状撚糸文を施文しており、器形から大木b式土器の影響がよみとれる。

c種 (48) 平口縁で、隆帯により狭い文様帶を作出し、隆帯上に刻目を有する。繩文地で、口縁部や胴部に縦絡文を施文する。円筒下層d式土器である。

III群土器 中期の土器である。

今回の調査で出土した土器群の主体を占める。深鉢（鉢）形土器が圧倒的に多く、浅鉢形土器は極めて少なく、壺形土器は1点の出土である。この中で時期的には中葉の土器が多い。

深鉢（鉢）形土器

1類 波状口縁で、口縁に沿って降沈文や凹線文、波頂部に渦巻文を施文する土器である。

a種 (56~59) 胴部に降沈文による懸垂文・有棘文を施文する土器である。56は底部を欠き、1/3の残存である。繩文地で胴部上半に最大径をもち、頸部で内窪し、口縁部が外反する。57・58も同様な器形と思われる。59は口縁部がわずかな波状で、緩く内凹する。

b種 (60~63) 口縁部に凹線文、胴部に沈線を施文する土器である。60・61・63は繩文地で、波頂部下に懸垂文や渦巻文を施文する。62は無文地の波頂部に浅い沈線を平行に施文する。

c種 (64~66) 胴部に撚糸文を施文する土器である。66は64・65よりも小ぶりの土器で、口縁部が緩く外反する。

d種 (67) 胴部に条痕文を施文する土器である。1点のみで、やや小ぶりの土器である。胴部が直立気味に立上り、口縁部が緩く外反する。

2類 (68・69) 波状口縁で、口縁部に隆沈文か凹線文、波頂部に円形文を施文する土器である。胸部には68は撚糸文、69が縄文を施文する。

3類 (70・71) 波状口縁で、口縁部に1条の沈線、胸部に3本1対の懸垂文か曲線文(弧状文)を施文する土器である。いずれも縄文地に、太くてやや深い沈線で文様を施文している。

4類 (72) 波状口縁で、口縁部が短かく「く」字状に外反し、波頂部に円形文を施文する土器である。縄文地で口縁部がやや肥厚気味である。

5類 (76・77) 波状口縁で口縁に平行する隆線を施文し、口縁と隆線との間は無文である。波頂部に円形文、隆線下には沈線による渦巻文、胸部には横円形文と山線文(弧状文)を施文する。縄文地で、口縁部がわずかに内弯する。74よりも隆線が細く、低く、焼成は良好である。

6類 (73・74) 平口縁で、口縁に平行する1本の隆線がめぐる土器である。胸部には73が縄文、74は撚糸文を施文する。

7類 (75) 波状口縁で、口縁部に凹線文、波頂部に刻目、波頂部下に沈線による弧状文を施文する土器である。縄文地で、色調は明赤褐色を呈し、内面は平滑である。

8類 (78~81) 円形もしくは横円形に区画して、沈線間を磨消している。78は波状口縁で、口縁部が内弯する器形で鉢形土器になるかも知れない。

9類 (82) 鰐状突起を有する土器である。

10類 (83・84) 平口縁で、口縁部に2本の太い隆線を貼付する土器である。いずれも厚手で、平口縁である。口唇部は83が平坦で、84は山形状になる。

浅鉢形土器

1類 平口縁で、隆沈線を施文する土器である。

a種 (85・86) 隆沈線による渦巻文と刻目を施文する土器である。85は胸部に横位の平行沈線と曲線文を施文する。85・86は同一個体であろう。

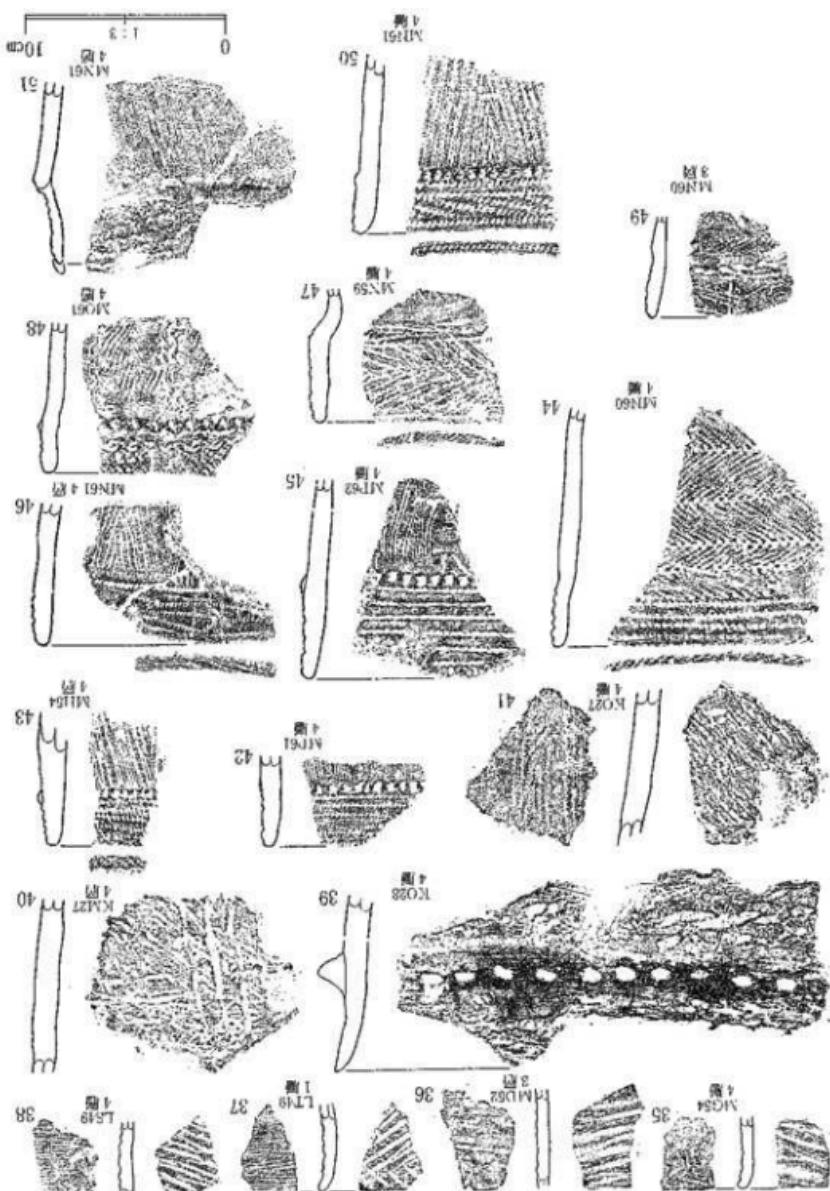
b種 (87) 隆沈線が横に展開し「横円形文」を施文する土器である。隆沈線が口縁部付近以外は剥落しており、その痕跡から、撚糸文を全面に施文した後に粘土紐を貼付したことがわかる。

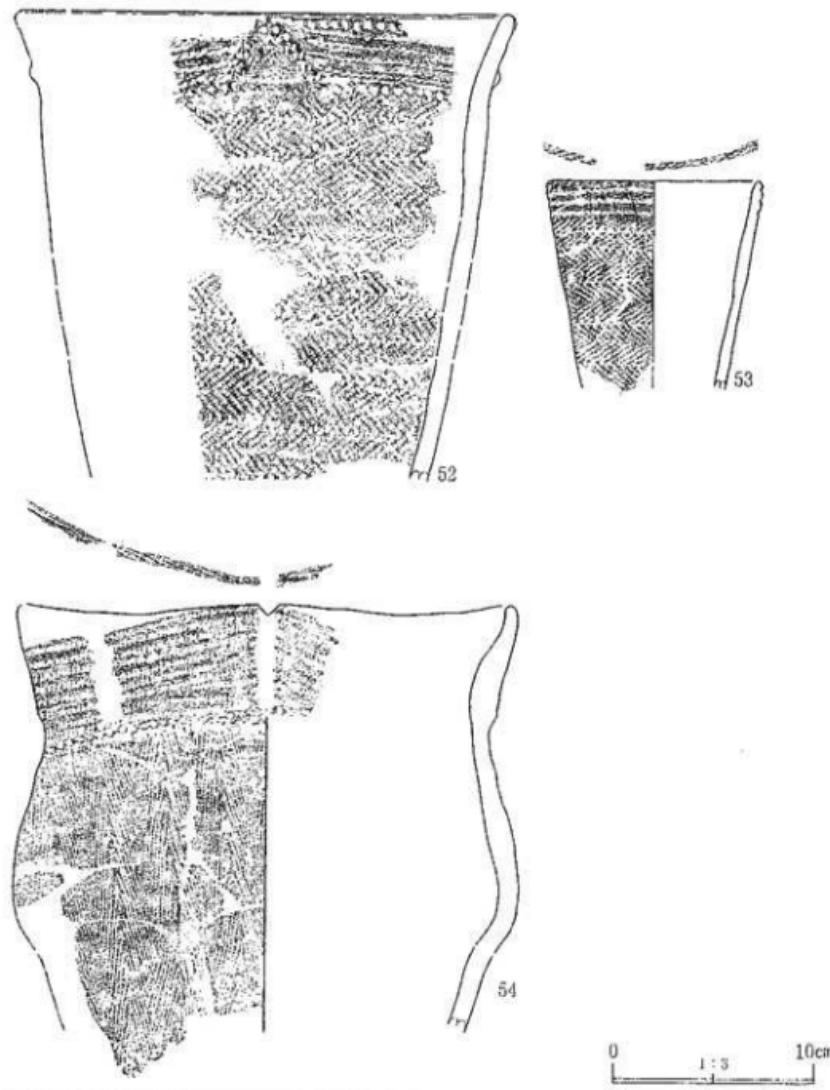
c種 (88) 隆沈線を円(横円)形や曲線的に施文する土器である。縄文地である。

壺形土器 (89・90) 2点は同一個体である。胸部上半に大変浅く、細い沈線で平行沈線・弧状文・山線文を施文する土器である。器厚は大変薄い。地文は縄文で、口頃部は無文である。

IV群土器 後期前半の土器である。

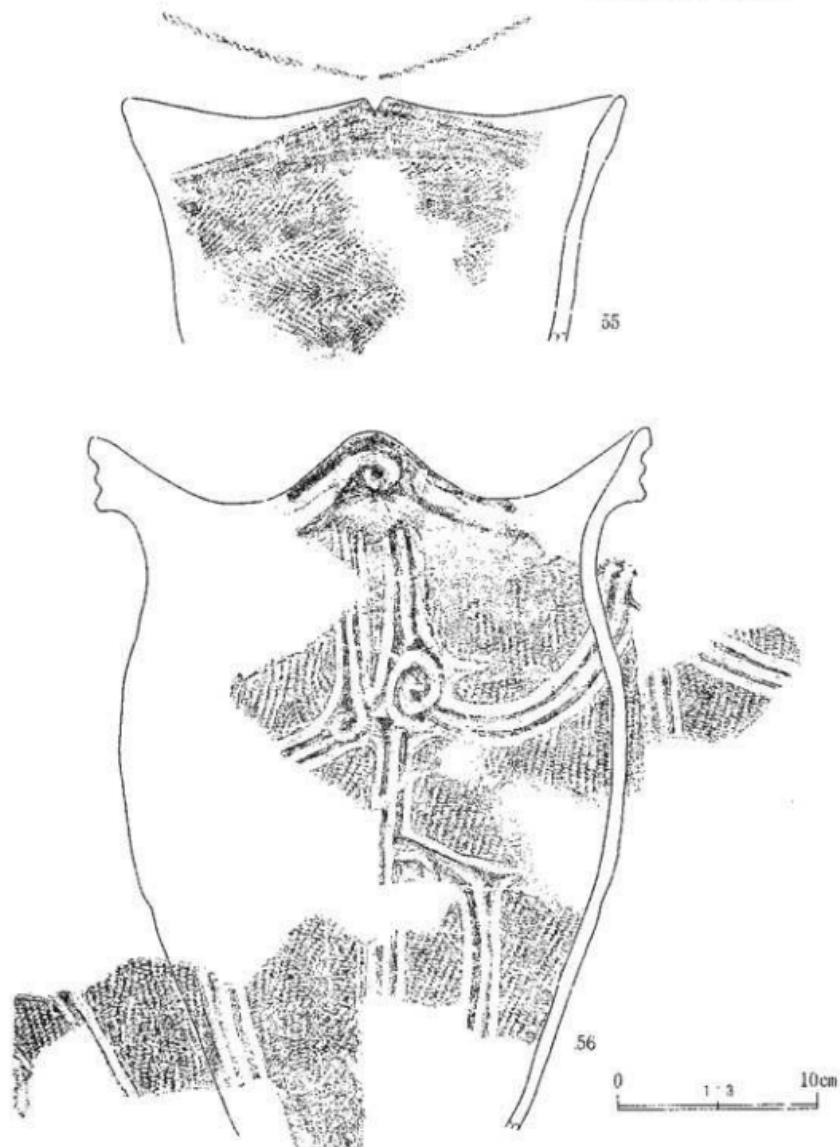
第23圖 遺跡外出土器物(1) - 1號・II號(1)





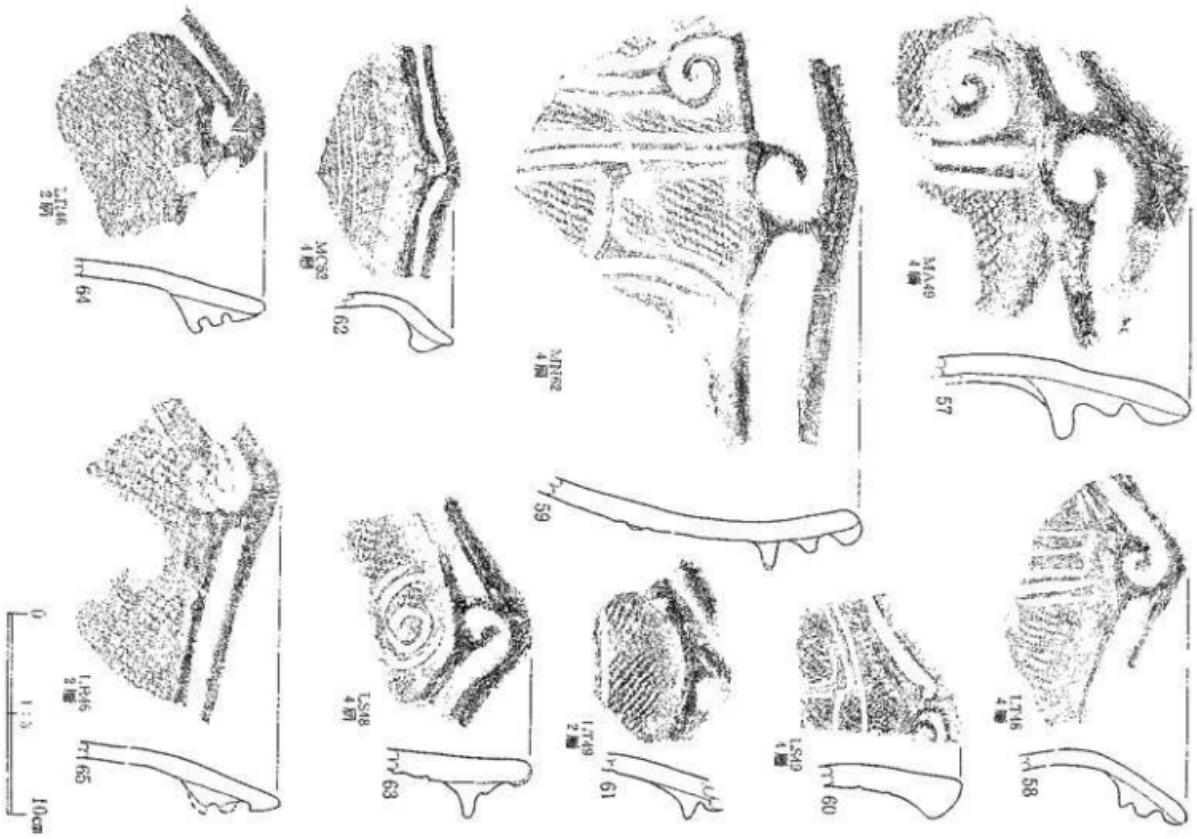
番号	古土地点	層	器形	口径	概評	文様・特徴など	備考
52	MH 54	4	深鉢	25.0	—	(23.4) 残部に斜条文の側面と底文、胸底に斜縞羽状模文、内面平滑。 器底に斜縞。	
53	MO 61	4	深鉢	16.5	—	(10.6) 口縁部に斜条文の側面と底文、胸底に斜縞羽状模文。	
54	MJ 56	3	盤	24.5	—	(21.4) 盤状、底部に網目、口縁部に斜条文の側面と底文、原土上 に木板焼付、周溝に木口法焼付。	

第24図 遺構外出土土器(2)- II群(2)



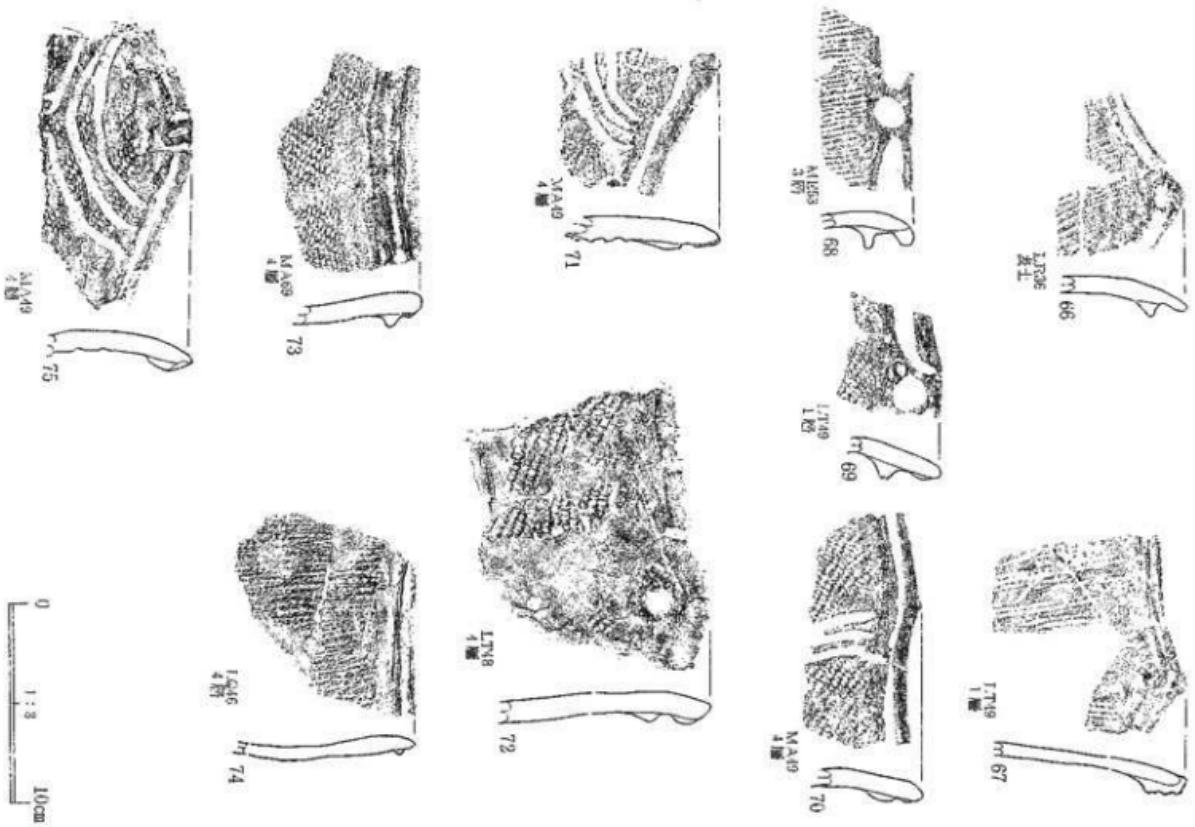
番号	出土地点	種	器形	口径	底径	高さ	文様・記符など	備考
55	MO. 82	4	深鉢	24.8	-	13.3	波紋口縁、内面和外に網目、近底部に筋条溝の側面に環文、腹底	
56	MN. 61	1	深鉢	28.1	-	13.1	三輪足刃状脚文、腹底に波巻文、側面に泡垂文、背面文、外面にメタリ化物付着	

第25図 遺構外出土土器(3)-II群(3)・III群(1)



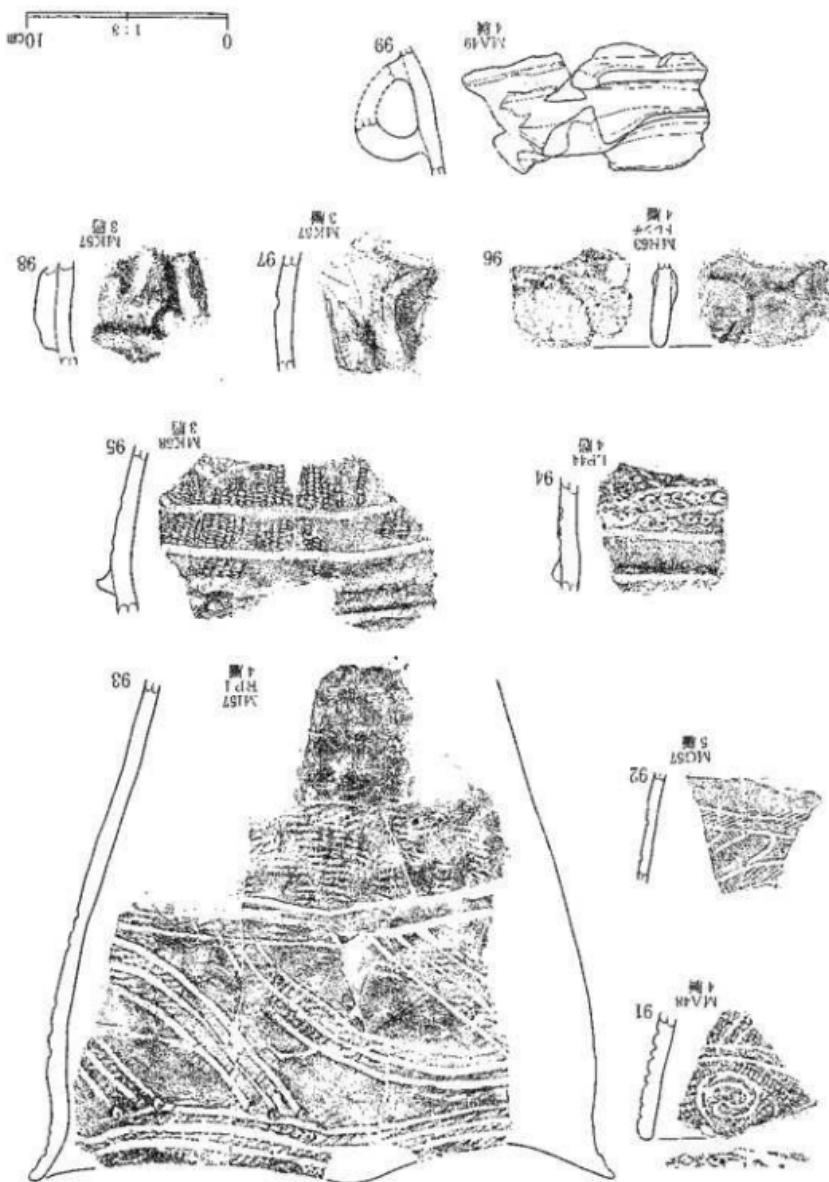
第26図 連構出土土器(4)－III群(2)

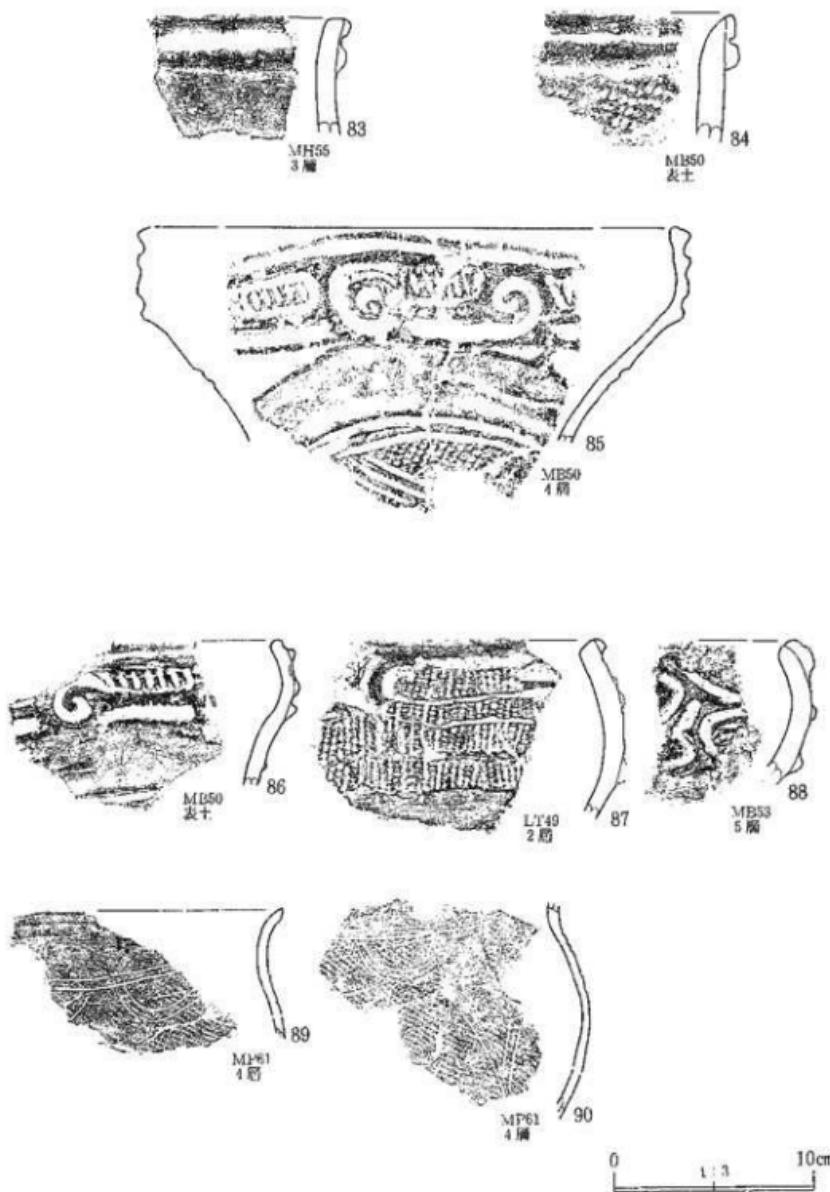
第3節 造構外の出土遺物



第27図 造構外出土土器(5)－Ⅲ群(3)

第28図 遺跡外出土土器(6)一見(4)





第29図 遺構外出土土器(7) - II群(5)

深鉢（鉢）形土器

1類 (91) 波状口縁で、縄文地に沈線による渦巻文や曲線文を施文する土器である。縄文地で、沈線は細く深い。

2類 (92) 縄文地の沈線間に磨消縄文を施文する土器である。

3類 (93) 波状口縁で、縄文地である。口縁部には3条の平行沈線、胴上半部は3条の斜位の平行沈線文と曲線文を施文し、その間に磨り消しを施し、沈線の連結部には円形竹管文を施文する土器である。器形は胴部が緩やかに外反しながら立上り、口頸部で内弯し、口縁部は短かく「く」字状に外反する。

4類 隆帯をめぐらし、縄文地に平行沈線を施文する土器である。

a種 (94) 3条の沈線間に円形竹管文を施文する土器である。

b種 (95) 隆帯の直上に1条、隆帯の下に間隔の広い2条の沈線を施文する土器である。

c種 (96~98) 無文地に断面三角形のつまみ出したような隆帯を貼付している土器である。97・98は部分的に隆帯に沿って浅く太く沈線を施文する。

壺形土器 (99) 無文地の体部破片で、2本の隆帯間に把手を付けている赤色塗彩の土器である。地文は無文である。内外面とも丁寧な調整を施す。

V群土器 粗製土器を一括した。

1類 (100~103) 平口縁で口縁部がほぼ真っすぐ立ち上がるもので、地文に縄文か撚糸文のみを施文している土器である。103は小型の完形土器である。

2類 平口縁で口縁部が外反している土器である。

a種 (104~108) 口縁部がわずかに外反するもので、縄文地の上器である。

b種 (26・27) 胴中央部に最大径をもち、口頸部がすぼみ、口縁部が緩く外反する土器である。S.I.17号穴住居跡から2点出土している。中期中葉の上器と考えられる。

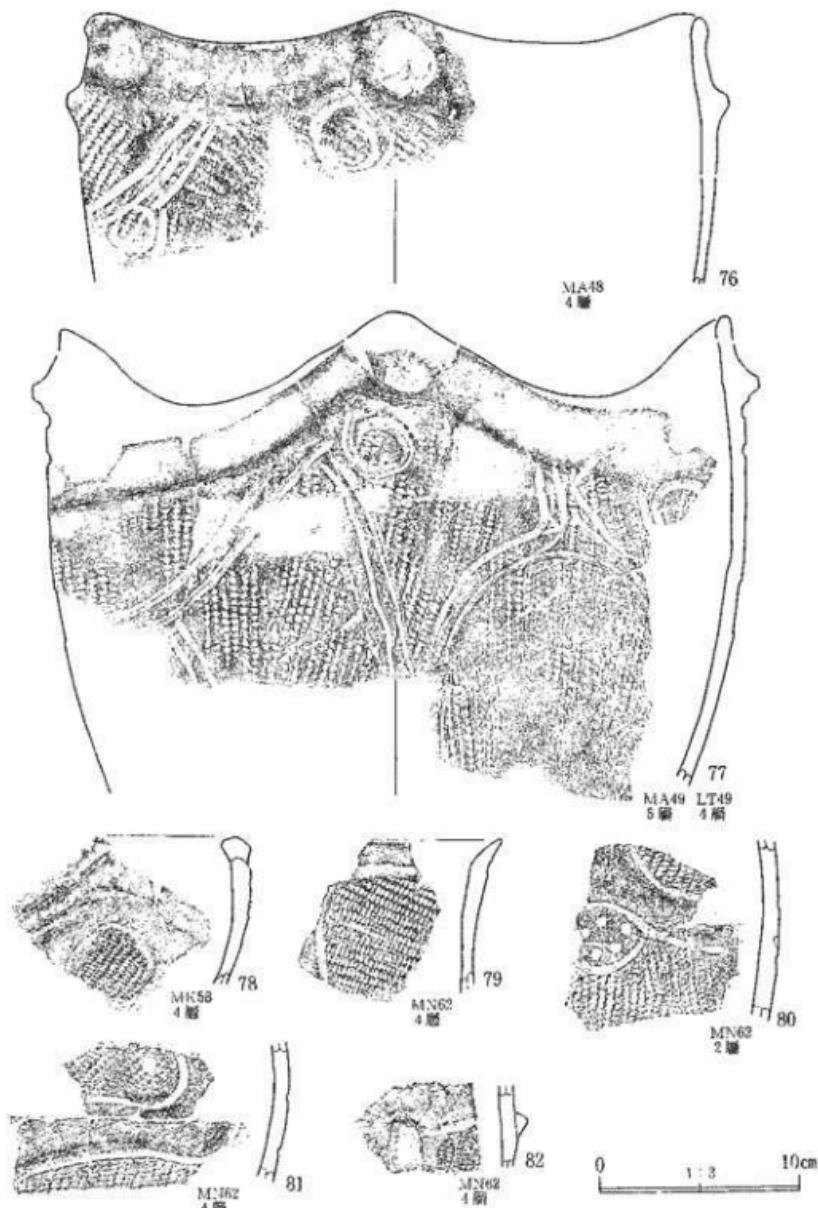
3類 (117) 平口縁で、口縁部が内傾する土器である。撚糸文を縦位に施文する。ゆがみがひどく、平面形は梢円形で、断面形は場所より異なる。

4類 (107~110) 波状口縁で、口縁部が外反している土器である。107・108・110は緩く外反するが、109は内弯したのち「く」字状に短かく外反する。

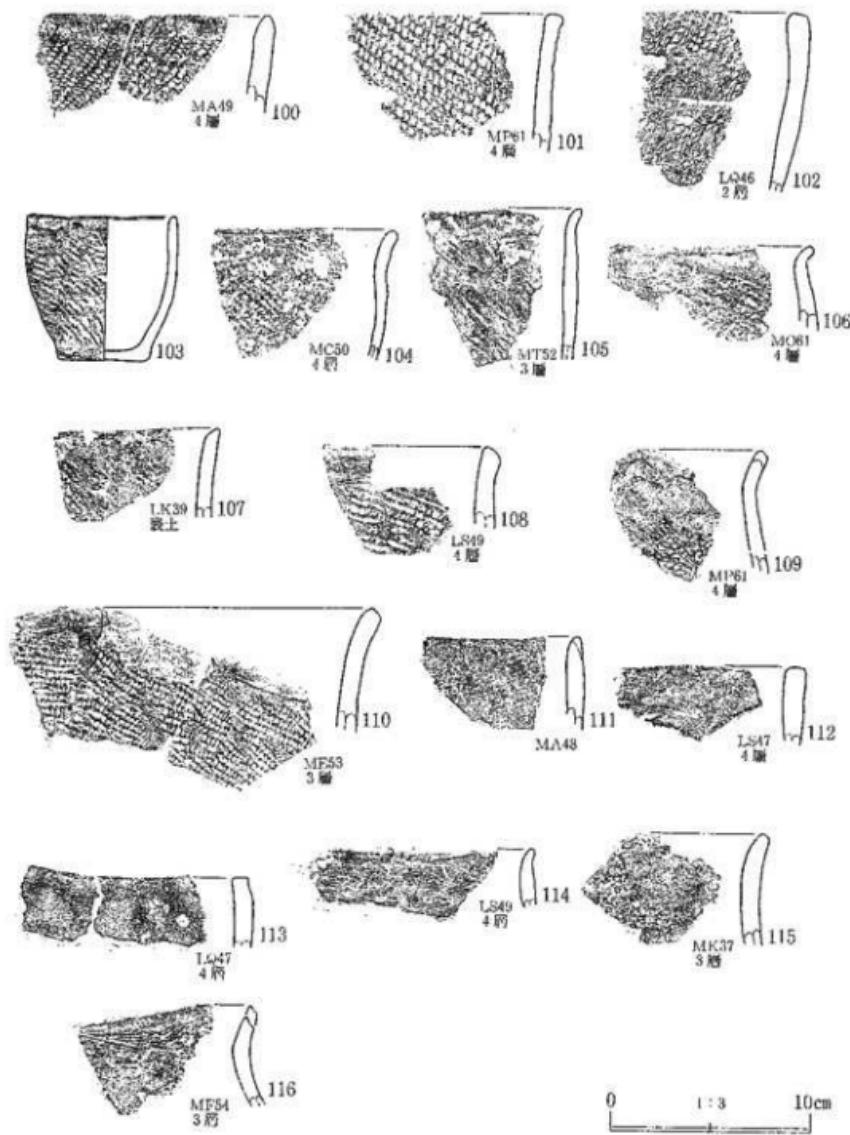
5類 (111~113) 平口縁で、無文の土器である。いずれもやや厚手である。

6類 (114~116) 波状口縁で、無文の上器である。5類に比較してやや薄手である。

116はやや外反し、口唇部の断面形が三角形様となる。

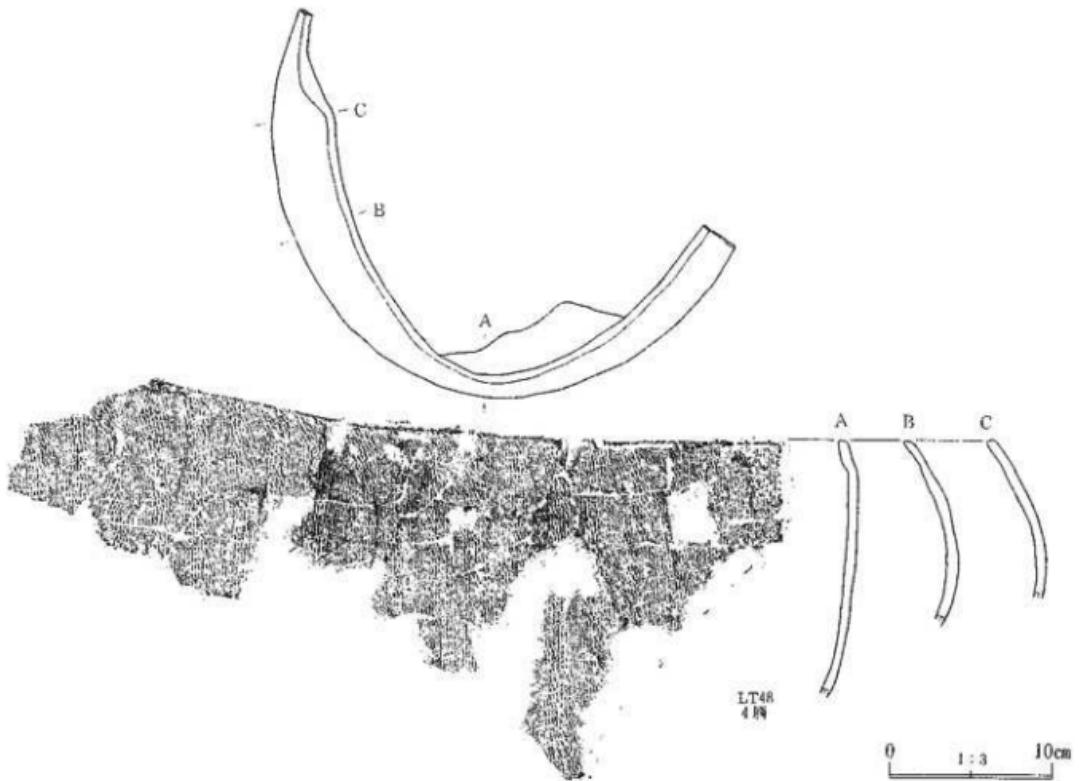


第30図 遺構外出土土器(8)-IV群



番号	出土地点	層	器形	口徑	底径	周長	文様・調査結果	備考
103	MP 61	4	深鉢	7.5	4.5	7.3	平口縁、腹部は純文地	

第31図 遺構外出土土器(9)- V群(1)



第32表 遺構外出土土器(II-V群)(2)

VI群土器 (118~128) 土器底部を一括した。

119は底部周辺がわずかにつまみ出されたように張り出し、121は胴部下端まで不整燃糸文を施文する。118は胴部下端近くまで木目状燃糸文を施文する。120は台付土器の底部で台部下端まで羽状繩文を施文する。118・120は内・外面とも丁寧な調整により平滑となっている。以上の底部は文様・器形・胎土から、119・121は縄文時代前期前半、118・120は前期後半の円筒下壺式土器と考えられる。

122~128はいずれも胴部下半まで縄文か燃糸文を施文しているもので、125は揚げ底となっている。128は底径4.7cmの小型土器の底部である。

(2) 土製品

ミニチュア土器 (129) 底部片で、底径3cmである。

土偶 (130) 土偶の腕部で、正・背面と両側面に円形竹管文もしくは円形竹管様の刺突を施文する。折損部分に孔(径8mm)のあいていた痕跡が残る。現存部の長さ4.2cm、幅5.6cmである。

不明土製品 (131) 土偶の足部に似た形状で、縦の切り込みや浅く細い沈線が入る。上部が欠損している用途不明の土製品である。高さ2.2cm、幅2.8cmである。

(3) 石器 (第34図~第45図)

①剥片石器

剥片が多く出土した割りには定形的な石器は少ない。石質はほとんどが頁岩である。

石鏃 (S19~S21) 3点出土した。S19・21は尖基鏃で、S20は有茎凸基鏃である。

石匙 (S22~S27) 6点出土した。S22・23は片面のみに粗い調整剥離を施す横型の石匙である。S24~S27は長身の台形状の縱型石匙である。片面の周縁に細かい調整剥離を施す。

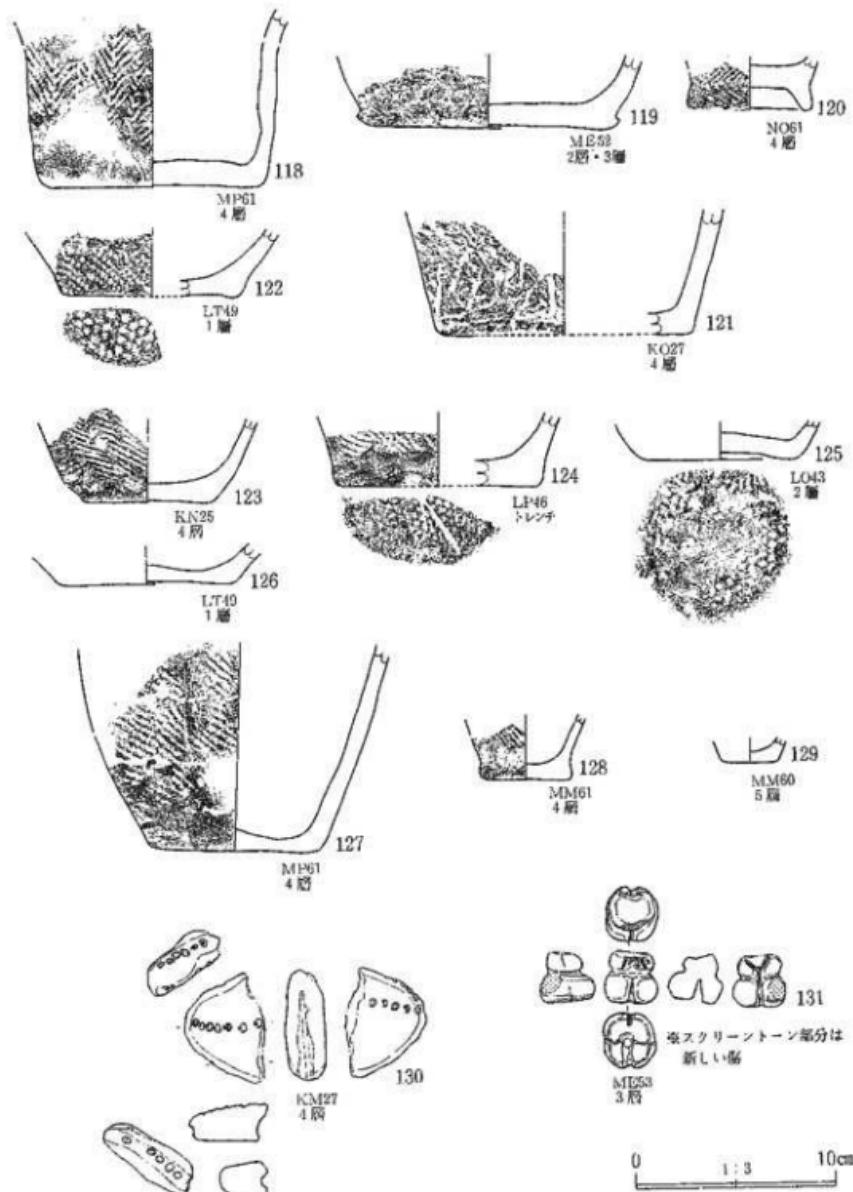
石錐 (S28・S29) いずれも略三角形で、S28は椎部のみに調整剥離を施す。S29は両面とも調整剥離を施さないが、1端が鋭く尖り、その尖端部に使用してできたと思われる剥離痕がわずかに残ることから石錐とした。

石槍 (S30) 1点出土した。全面に調整剥離を施すもので、半月形を呈し、器厚が0.7cmと薄い。前期の所産と考えられる。

トランシェ様石器 (S31) 頂部が尖り刃部に向けて大きく開き、刃部は直線的な片刃で、階段状の鋭い剥離面を残す。

異形石器 (S32) 全面に調整剥離痕を施すもので、上下両端が石鏃様に尖り、中央にくびれがある。

第3節 遺構外の出土遺物



第33図 遺構外出土土器01-VI群・土製品

石箇（S34～S36・S39・S41～S48） 12点出土した。S34～36は刃部が片刃の直刃である。いずれも折損している。S39は全面に丹念な調整剥離を加えているので、刃部が片刃の丸刃である。S41・S42・S47は刃部が片刃の丸刃である。他は折損しているため、刃部の形状は不明である。

搔器（S37・S53・S56） S37は刃部が丸刃である。S53・S56は横長の剥片の1側縁に調整剥離を施して刃部としているものである。

削器（S33・S38・S40・S49～S52・S54・S55・S57～S59） 平面形は、撥形・楕円形・半月形・略長方形・略三角形などバラエティに富む。剥片石器の中では最も個体数の多い器種である。

②礫石器

剥片石器に比較して数は少ない。器種は擦石・凹石・砥石・石皿がある。石質は凝灰岩・安山岩が主である。

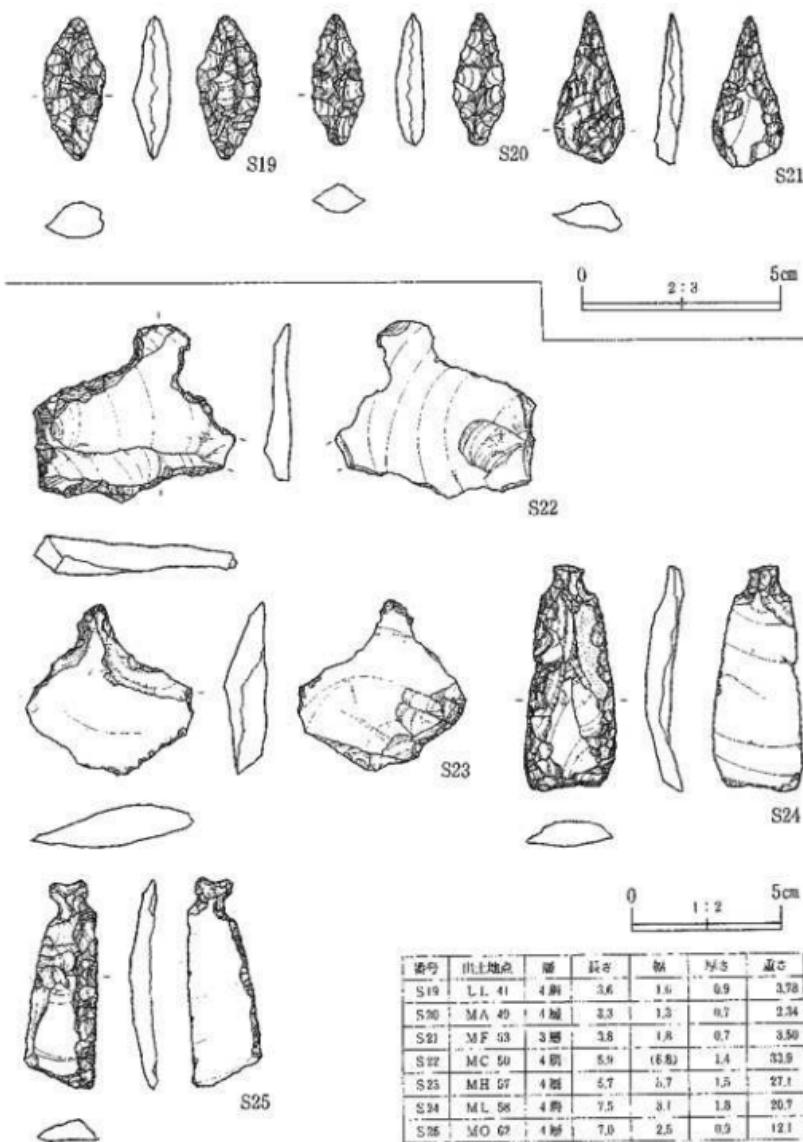
擦石（S60～S62） 横長の自然礫を素材としている。S60・S62は1側面に擦面を残す。S62は両端に敲打痕を残していることから敲石としても使用されたようである。S61は1側縁と片面に擦面を残している。

凹石（S64～S67） 楕円形の偏平な自然礫を素材としている。ほとんどが裏表に1～2箇の凹みを残す。いずれも表裏か、表裏と側面に擦面を残していることから、擦石としても使用されたようである。

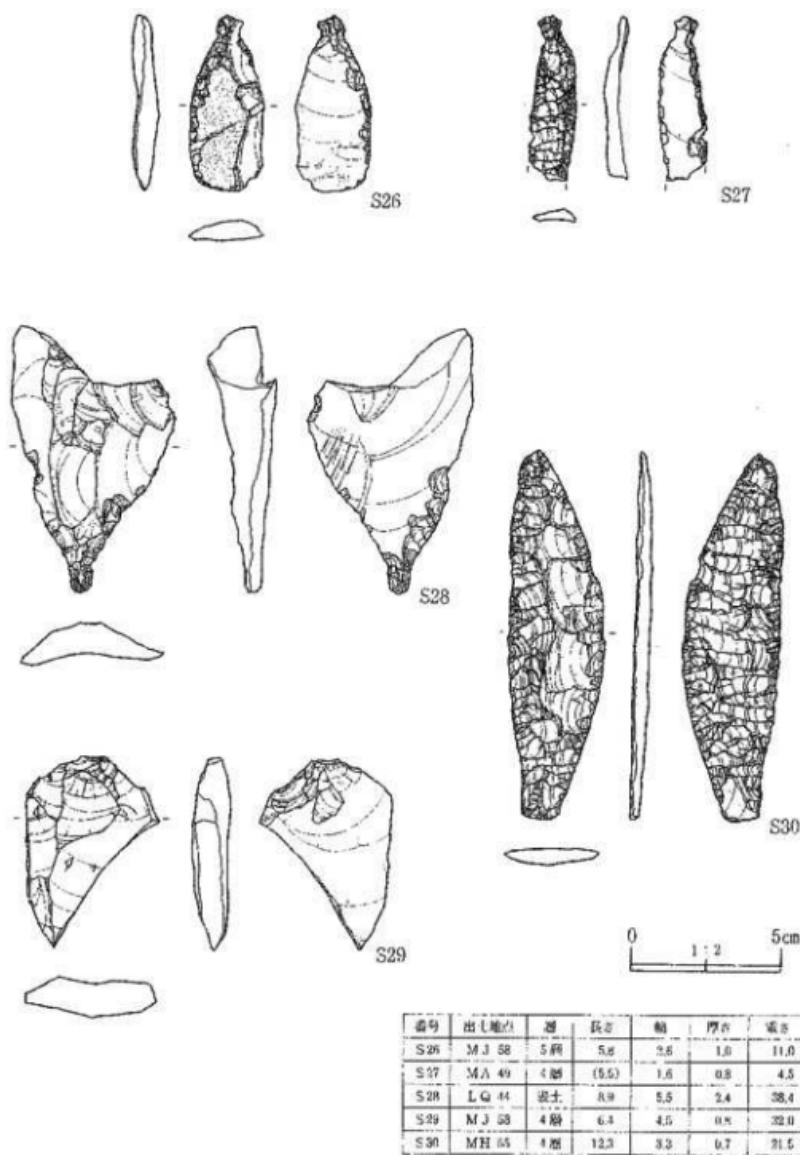
砥石（S63） 片面に砥面を残す。折損品である。

石皿（S68） 片面の全体に擦面を残す。

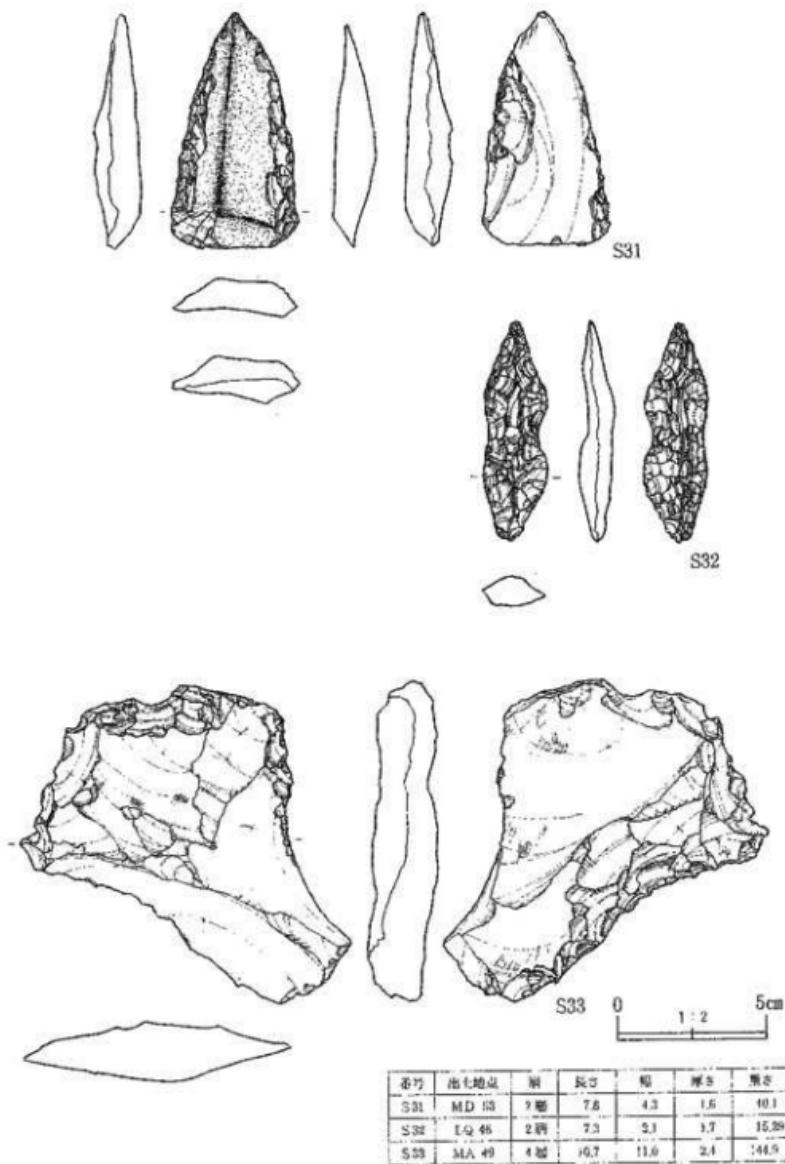
（4）石製品（第45図S69・S70） S69は細長で薄い自然石の端部1箇所に穿孔しているもので、もう1端には盲孔が残る。S70は板状の片面に直線的な縱横の細い線を残しているものである。



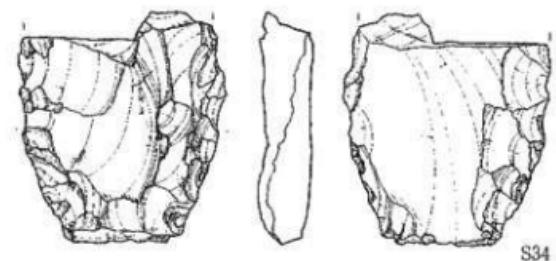
第34図 造構外出土石器(1)



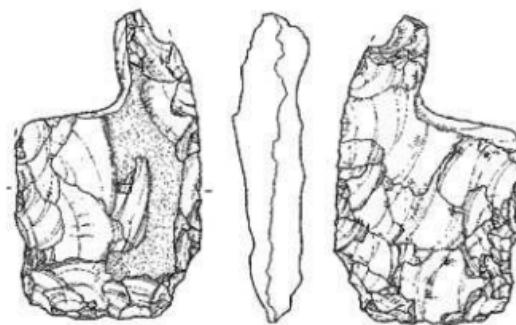
第35図 遺構外出土石器(2)



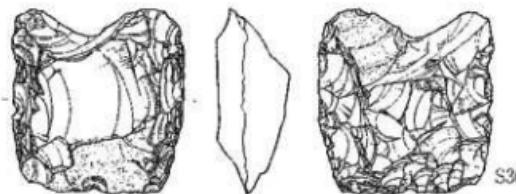
第36図 遺構外出土石器(3)



S34



S35

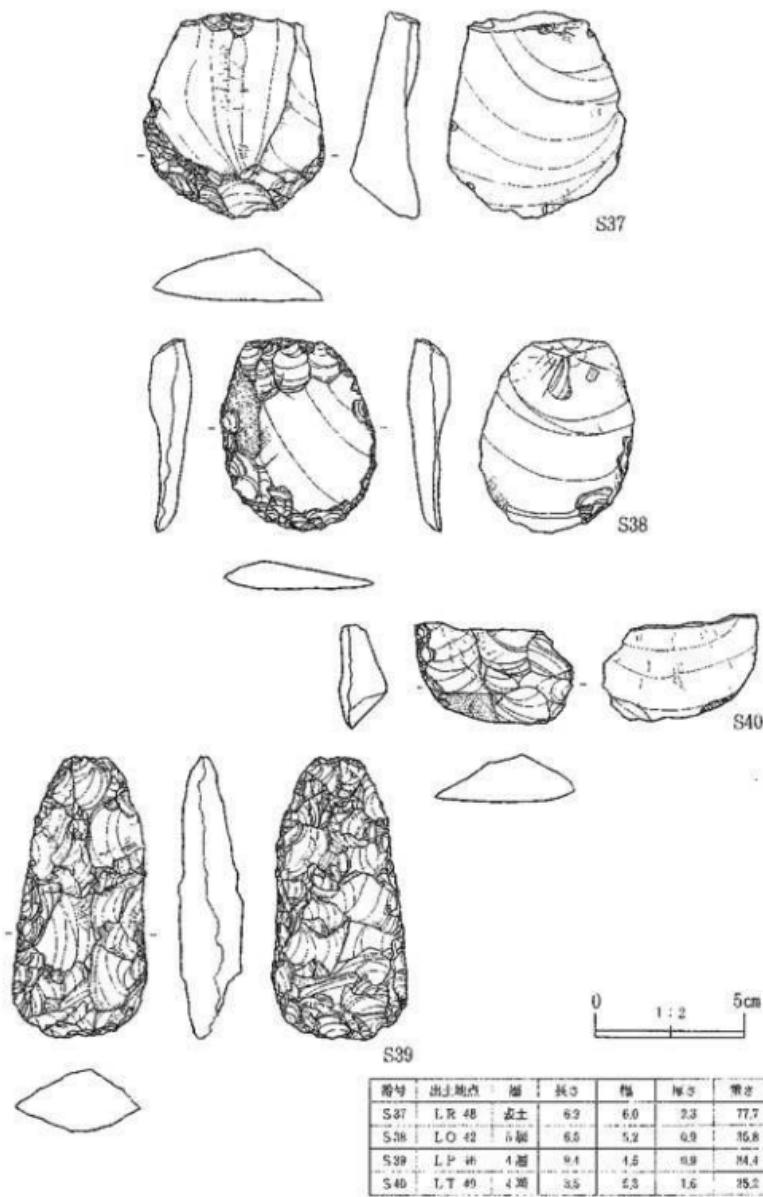


S36

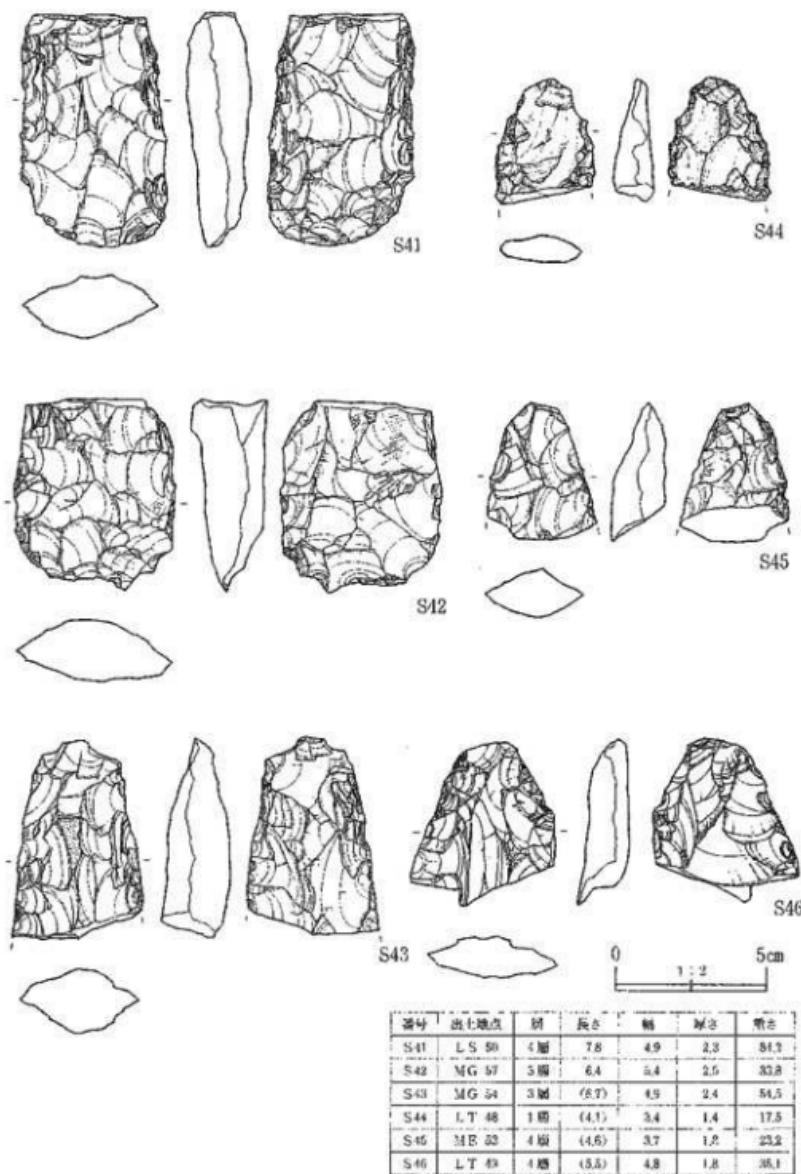


番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S34	LM 42	基土	(7.8)	6.9	1.8	100.8
S35	LP 46	4層	(10.4)	6.8	2.5	122.7
S36	MD 55	3層	6.1	5.8	2.5	79.8

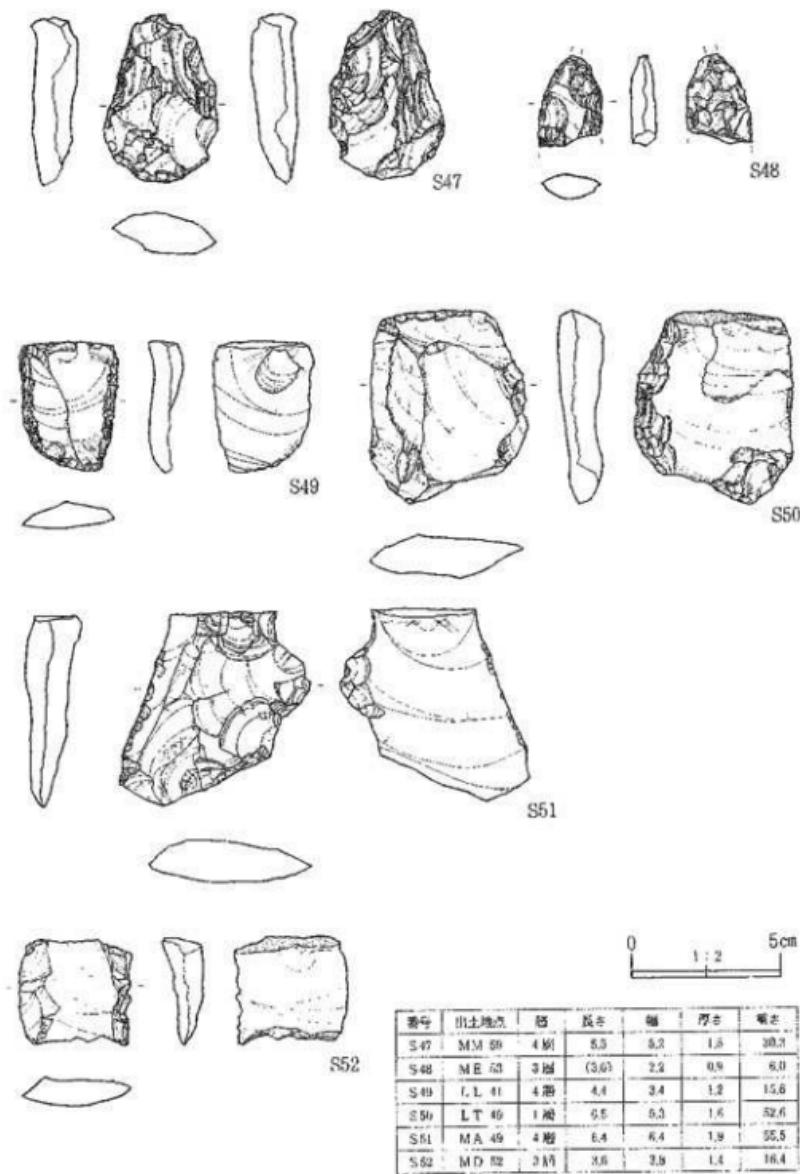
第37図 遺構外出土石器(4)



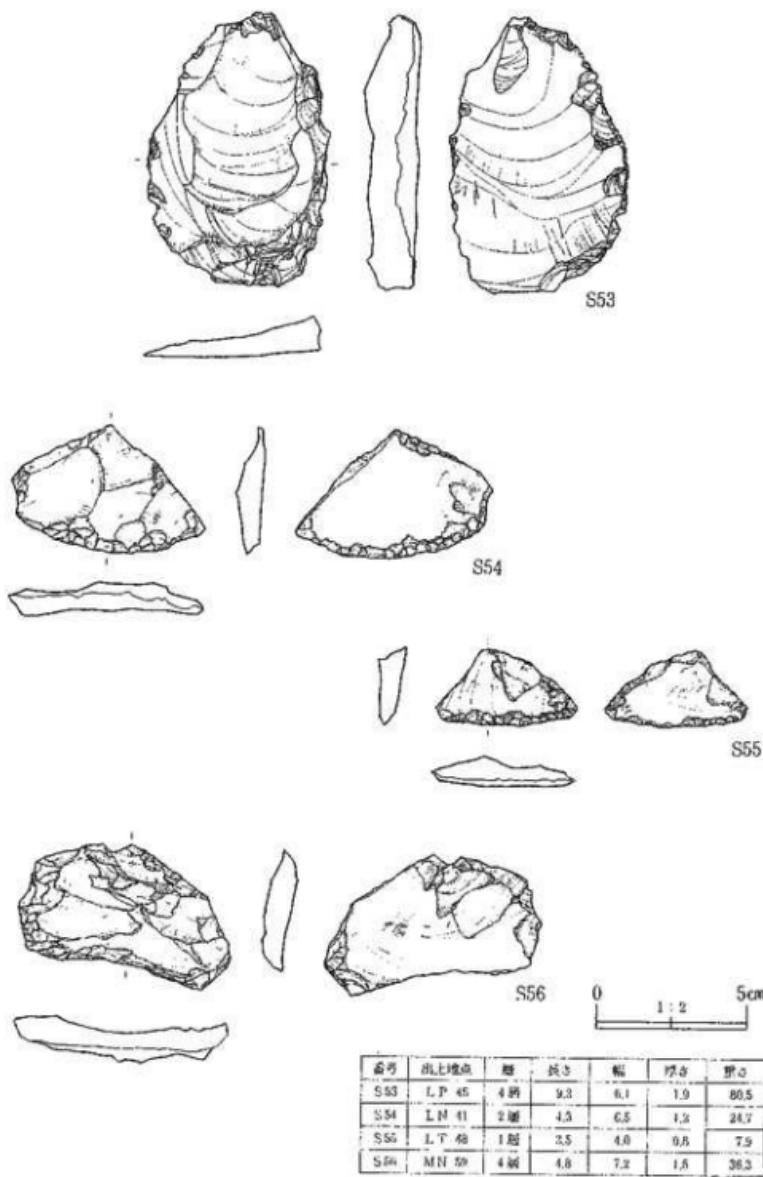
第38図 遺構外出土石器(5)



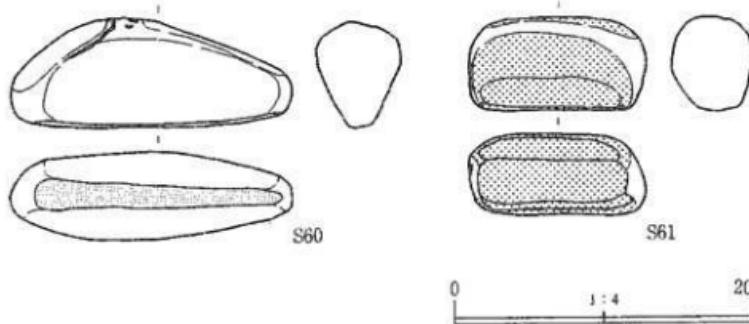
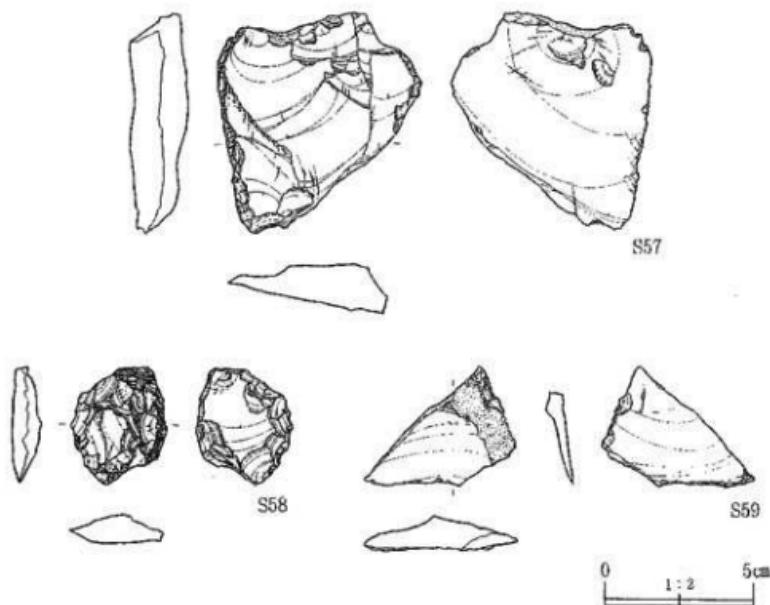
第39図 造構外出土石器(6)



第40図 遺構外出土石器(7)

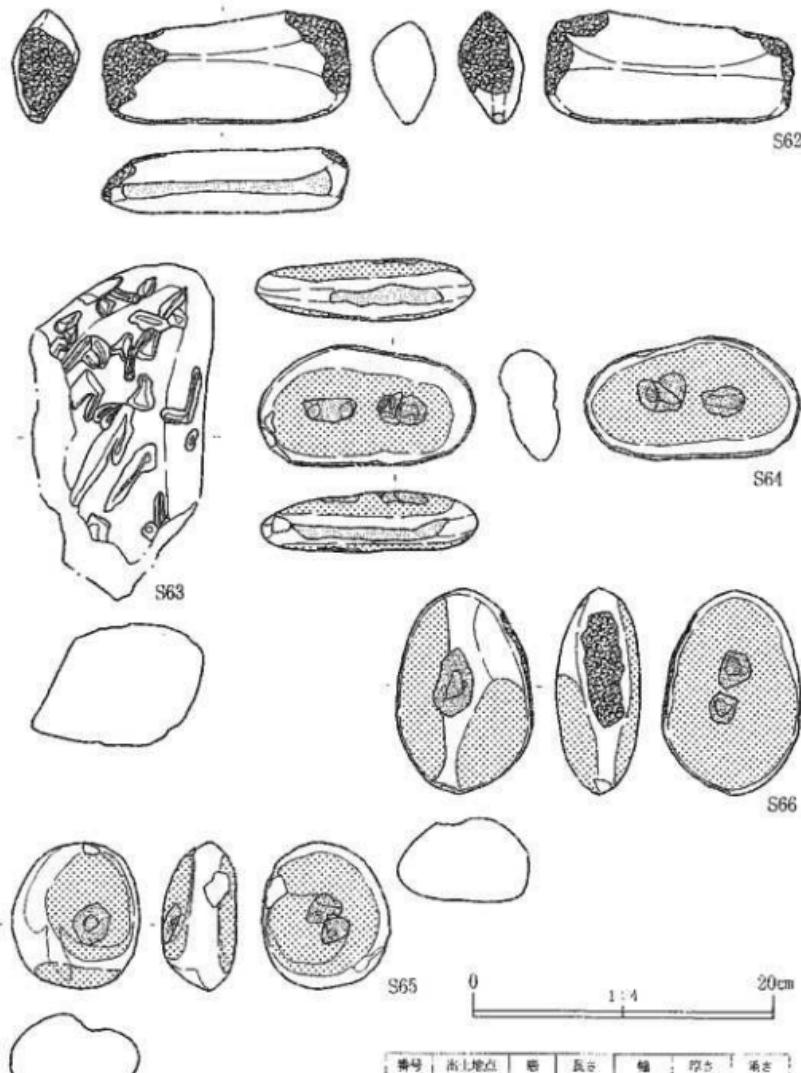


第41図 遺構外出土石器(8)



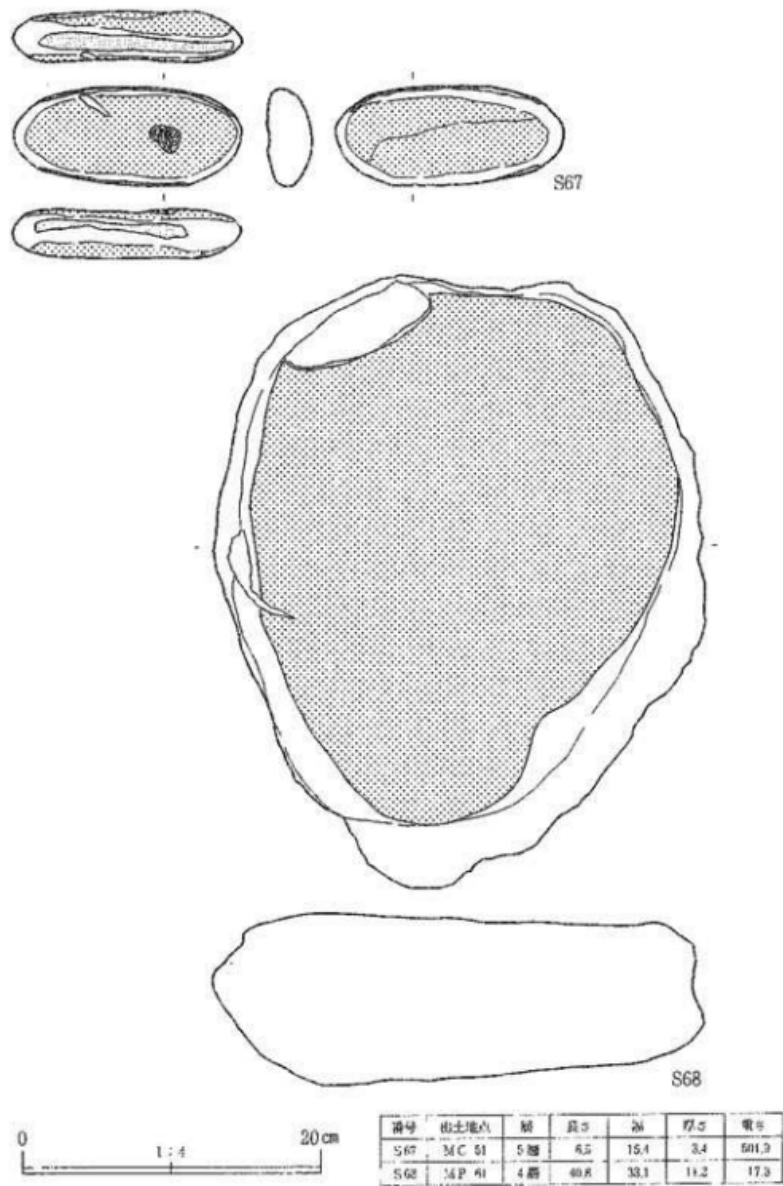
番号	出土地点	周	長さ	幅	厚さ	重さ
S57	LS 48	4個	7.8	6.7	2.6	76.2
S58	LT 58	4個	3.9	3.2	1.8	10.0
S59	MII 54	4個	4.0	5.2	0.9	7.7
S60	ME 53	3個	7.4	19.0	5.2	104.4
S61	MR 64	4個	6.3	11.9	3.4	679.3

第42図 遺構外出土石器(9)



番号	出土地点	幅	長さ	厚さ	重さ
S62	M I 86	3mm	7.4	16.8	4.4
S63	L M 41	23.0	12.3	3.4	2000.0
S64	M J 55	1mm	8.1	14.5	4.0
S65	L T 48	4mm	9.8	6.5	438.0
	L P 35	2mm	12.7	9.1	8.6

第43図 遺構外出土石器



第44図 遺構外出土石器②



第45図 遺構外出土石器02

第5章 まとめ

今回の調査では縄文時代の竪穴住居跡6軒、土坑9基を検出し、縄文時代早期・前期・中期・後期の土器が出土した。このうち、中期の土器が主体を占める。以下ではまとめとして、遺構の帰属時期と、それから派生する遺構の変遷を通して、それぞれの時期における遺跡の性格を考えてみたい。

竪穴住居跡6軒のうち、完掘したのは2軒で、他の4軒は半分か1/3は路線外で完掘できなかった。完掘した2軒のうち、A区に位置するS I 02は楕円形で、短軸上に3本の柱穴を配し、中央部のやや内寄りに地床炉がある。本遺構は、出土土器から、中期か後期と推定したが、柱配置や炉の形態は今のところ類例がない。ただ、隣接して中期の袋状土坑があり、居住域と貯蔵域が同一地点に同時期に存在するということは、通常の遺構の在り方からは考え難いことである。それからすれば、本遺構は、遺跡外出土土器の時期も勘案すると、後期前半に帰属する可能性が高いと考えられる。

B区では5軒のうち完掘したのはS I 09の1軒である。本遺構は竪穴住居跡としては小規模で、掘込炉を伴い、出土遺物から中期中葉と考えられる。B区では他に4軒の竪穴住居跡がある。完掘しておらず詳細は不明の点が多いが、いくつかの共通点を抽出できる。^①平面形はS I 05・06・08の現存部から推定するに楕円形と思われる。^②柱配置では、主柱穴の場合、壁際沿って多く配され、やや大型のS I 08は10本、S I 06は6本と推定される。^③炉はS I 05のように炉脇に櫛乱があるものの、壁際に石圓炉が構築される。S I 06では中央部からやや壁寄りに不整楕円形の浅い落ち込みがあり、その中に炉石の可能性のある自然石が断面中の號で検出され、また、S I 17でも壁際に落ち込みがある。以上の事を勘案すれば、あるいは落ち込み部分が炉の掘り込み部で、石圓炉と一体となつたいわゆる複式炉の祖形的なものの可能性も考えられる。^④壁構は、S I 05・06・08にみられ、ほぼ全周するものと推定される。^⑤B区の住居跡の時期は出土土器から中期に帰属し、S I 05を除き、中期中葉と考えられる。

米代川流域で縄文時代中期の竪穴住居跡を、発掘調査により検出した遺跡は、本遺跡を含め^(註1)35遺跡を数える。このうち、今回の調査で検出した縄文時代中期中葉（大木8a・8b式期＝^(註2)円筒上層c～e式、中の平1式、楕円1・II式期）の遺跡は本遺跡を含め12遺跡である。これらの遺跡の中で、本遺跡の竪穴住居跡の主体を占める中期中葉後半の傾向を見ると、平面形は楕円形や円形が多く、規模は大型・中型・小型と区分されるようになる。中型の住居跡は5.5～8.0mで、小型の住居跡は2.3～5.0mである。この区分からすればB区の竪穴住居跡は、S I 09

が小型に属し、それ以外は中型に属することになる。また、炉は地床炉のほかに半数は石開炉となるようあり、これはS I 05のかの形態と共通している。さらに、壁溝は山館上ノ山遺跡の中前期前半（円筒土解B式期）の住居跡でみられたのみであったが、大木8 b式期にその数は増加し、本遺跡のS I 05・06・08にもそれが伴う。

以上のように、本遺跡で検出した堅穴住居跡は完掘したものが少なく、柱配置や炉の形態などの詳細な比較、検討はできなかったが、概ね米代川流域に分布する住居跡の在り方と似た傾向を示していると言える。

検出した土坑9基は、前述のように、2基はA区、7基はC区に分布しており、B区では検出されなかった。このうち、貯蔵用の施設と考えられているA区のフラスコ状土坑（SKF03）は、人為的に埋められており、土坑確認面から中期中葉の土器が出土している。のことから、ほぼこの時期と考えて大過ないものと思われる。

上記のフラスコ状土坑以外の土坑8基の形態は、平面形・断面形・規模から4つのタイプに分類される（第46図）。

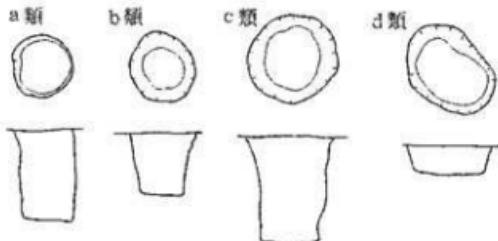
a類—平面形は円形で、断面形は開口部がわずかに広がる円筒形である。深さは0.99～1.20mと比較的深い。—SK 10・13・15—

b類—平面形は円形で、断面形は開口部がわずかに広がる円筒形である。深さは0.73～0.82mとa類よりも浅い。—SK 11・16—

c類—平面形は円形で、断面形は開口部がわずかに広がる円筒形である。深さは1.42mとa・b類よりも深い。—SK 14—

d類—平面形は楕円形、断面形は扁底形である。深さは0.27～0.36mとかなり浅い。
—SK 04・12—

埋上の堆積状況を見ると、
a類はいずれも人為堆積である。b類ではSK 11が自然堆積、SK 16が人為堆積である。
c類は人為堆積で、d類は2基とも人為堆積である。



次に配置状況であるがいざ

第46図 土坑形態分類図

れも重複がなく、△区のd類（SK 04）を除けば、いずれもC区に位置し、至近距離にあるものはない。a類の3基は6～10mほど離れている。b類とd類のSK 12はやや近い距離にあるとは言え、4mほど離れている。また、c類はd類のSK 12から8mほど離れた、調査区の南

東端に構築されている。

遺物は、d類のSK12の確認面より出土した縄文後期前半の土器があるだけである。ただ、c類のSK14周辺からは縄文前期前半の土器が主体的に出土していることから、SK14は該期に構築された可能性が高いと考えられる。

以上のように、a・b類土坑は規模の点ではc類のSK14と異なるものの、平面形・断面形、それに壁や底面にほとんど凹凸がなく平滑で、しっかりした掘り込みを行っており、b類のSK16を除き、a～c類は人為的に埋められているという点で共通する。したがってa・b類はc類と同じ縄文前期前半に構築された可能性が高いと考えられる。

次に、堅穴住居跡や土坑の分布状況からその時期、遺跡（調査区内）の遺構の変遷と性格を考えてみることにする。野沢岱遺跡は北西に向かって張り出す舌状台地上にあり、今回の調査区はその北西側の縁辺部にあたると推定される。検出した遺構のうち、前期前半と推定した土坑群は（a～c類）はほぼ平坦部となっているC区に分布する。A・B区では該期の遺構は構築されていない。中期中葉になると緩斜面となっているA区にラスコ状土坑が1基、ほぼ平坦となっているB区に堅穴住居跡群が分布し、C区に遺構は構築されていない。後期前半になると、A区に堅穴住居跡、C区に土坑が分布しており、B区に遺構は構築されていない。つまり、前期前半の時期にはC区に土坑群が形成され、他の場所は使用されていない。中期中葉になるとA区ではラスコ状土坑が構築されて貯蔵域となり、B区では堅穴住居跡群が構築されて居住域として使用される。後期前半にはA区は居住域として使用され、C区には土坑が構築されるようになる。

以上のように今回の調査区は台地の縁辺部にあたり、調査の結果、遺構は調査区全域に分布しており、それらの遺構・遺物から本遺跡は縄文時代前期の土坑群と縄文時代中期・後期の集落跡の一部であることがわかった。

註1 ①よねしろ考古学研究会『よねしろ考古 第7号 特集 縄文時代前・中期のムラ』
1991（平成3）年

②秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書－山王岱
遺跡－』秋田県文化財調査報告書第221集 1992（平成4）年

文献 では34遺跡であるが、1991（平成3）年に調査された山王岱遺跡第3次発掘調査
では縄文時代中期の堅穴住居跡が10軒確認されている。

註2 註1①・②の文献に拠る。

参考文献

- 秋田市教育委員会 「小阿地下遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書」 1976（昭和51）年
- 大館市史編さん委員会 「大館市史」第一巻 1979（昭和54）年
- 秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第120集 1984（昭和59）年
- 鹿角市教育委員会 「天戸森遺跡発掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料26 1984（昭和59）年
- 鹿角市教育委員会 「天戸森の土器」 鹿角市文化財調査資料41 1990（平成2）年
- 秋田県教育委員会 「杉沢台・竹生遺跡」 秋田県文化財調査報告書第83集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 「国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第84集 1981（昭和56）年
- 日本鉄鋼株式会社船川製油所 「大烟台遺跡発掘調査報告書」 1979（昭和54）年
- 丹羽 茂 「大木式土器」「縄文文化の研究4」「縄文土器大観1」 小学館 1981（昭和56）年
- 丹羽 茂 「中期大木式土器様式」「縄文土器大観1」 小学館 1989（平成1）年
- 成田 澄彦 「青森県の土器」「縄文文化の研究4」「縄文土器大観4」 小学館 1981（昭和56）年
- 成田 澄彦 「人江・十腰内式土器様式」「縄文土器大観4」 小学館 1989（平成1）年
- 鈴木道之助 「図録石器の基礎知識」 柏書房 1981（昭和56）年
- 村越 澤 「円筒土器文化」 雄山閣 1974（昭和49）年
- 稻川町教育委員会 「欠上り遺跡発掘調査報告書」 1990（平成2）年
- 江坂 輝彌 「石神遺跡」 ニュー・サイエンス社 1970（昭和45）年
- 今井富士雄・磯崎 正彦 「十腰内遺跡」「十腰内遺跡調査団」 1969（昭和44）年
- 盛岡市教育委員会 「大館遺跡群 平成2年度発掘調査概要」 1991（平成3）年
- 盛岡市教育委員会 「大館遺跡群 大館町遺跡 平成3年度発掘調査概要」 1992（平成4）年
- 盛岡市教育委員会 「大館遺跡群（大新町遺跡・大前町遺跡）－昭和58年度発掘調査概報－」 1984（昭和59）年
- 盛岡市教育委員会 「大館遺跡群－昭和55年度発掘調査概報－」 1981（昭和56）年
- 盛岡市教育委員会 「大館遺跡群（大新町遺跡・大館町遺跡）－昭和62年度発掘調査概報－」 1989（平成1）年
- 盛岡市教育委員会 「柿ノ木平遺跡－昭和57年度発掘調査概報－」 1983（昭和58）年
- 盛岡市教育委員会 「柿ノ木平遺跡－昭和59年度発掘調査概報－」 1985（昭和60）年
- 盛岡市教育委員会 「人前遺跡群（大館町遺跡）－昭和56年度発掘調査概報－」 1982（昭和57）年
- 盛岡市教育委員会 「繫遺跡－昭和58年度発掘調査概報－」 1984（昭和59）年

- 縄文文化検討会 『第1回 縄文文化検討会 シンポジウム 東北地方北部の縄文時代中期末葉～後期前半の土器編年について』 1986(昭和61)年3月22日～23日
- 鈴木 克彦 「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記 第7号』 1982(昭和57)年
- 鈴木 克彦 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年考察」『北奥古代文化 第8号』北奥古代文化研究会 1976(昭和51)年
- 中村 良幸 「「複式炉」について」『考古風土記 第7号』 1982(昭和57)年
- 梅宮 茂 「複式炉文化論」『福島考古』第15号 福島県考古学会 1974(昭和49)年
- 宮城県教育委員会 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－』 宮城県文化財調査報告書第19集 1969(昭和44)年
- 青森県教育委員会 『三内沢部遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第41集 1978(昭和53)年
- 日黒 吉明 「住居の炉」『縄文文化の研究第8巻社会・文化』 雄山閣 1982(昭和57)年
- 二ツ井町教育委員会 『鳥野遺跡第2・3次発掘調査概報』 二ツ井町埋蔵文化財調査報告書第2集 1992(平成4)年
- 岩手県立博物館 『岩手の土器～県内出土資料の集成～』 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会 『東北縄貫自動車道発掘調査報告書 一居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・竪の上遺跡・上葛岡遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第78集 1981(昭和56)年
(財) 岩手県埋蔵文化財センター 『田代遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第41集 1982(昭和57)年
- 葛西 励 「十腰内式土器の編年的細分」『北奥古代文化第11号』 1979(昭和54)年
- 秋田県教育委員会 『塚の下遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第61集 1979(昭和54)年
- 畠原 泰時 「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』 東北考古学会編 1976(昭和51)年
- 青森県教育委員会 『中の平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第25集 1975(昭和50)年



1 遺跡遠景 道目スキー場から（南西→）－矢印が遺跡－



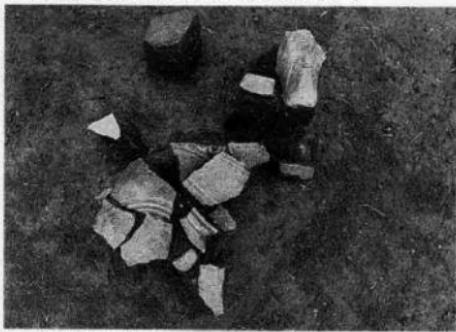
2 遺跡近景（北西→）－車のある所がA区北西斜面－



3 調査前の状況 C区からA・B区を見る（南→）



1 調査前の状況 A区からB区を見る（北→）



2 遺物出土状況（MA 49グリッド 4層 RP1）（西→）



3 A区西斜面基本層序断面（北西→）



1 S 102壁穴住居跡 完掘 (南→)



2 S 105壁穴住居跡 完掘 (南→)



3 S 105壁穴住居跡 炉跡 (南東→)

4 圖版



1 S 100號穴住居跡 完畢 (北→)



2 S 100號穴住居跡 完畢 (南西→)



3 S 100號穴住居跡 完畢 (東→)



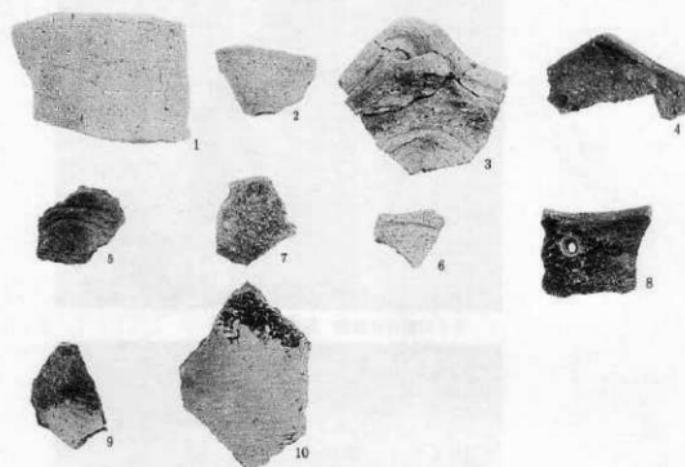
1 S I 17 穹穴住居跡 完掘（北西→）



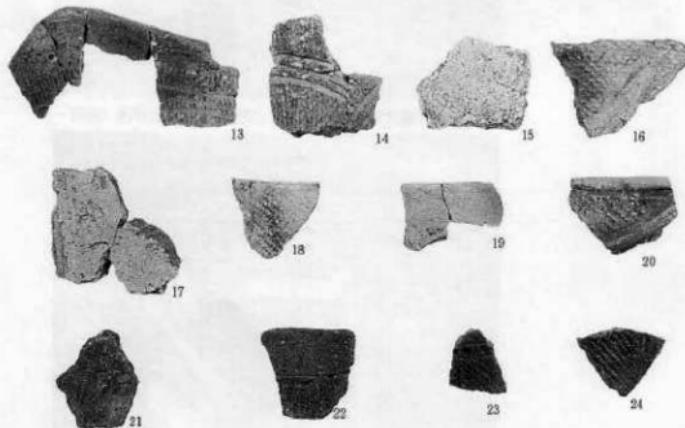
2 S I 17 穹穴住居跡 土器・白色粘土塊出土状況（南西→）



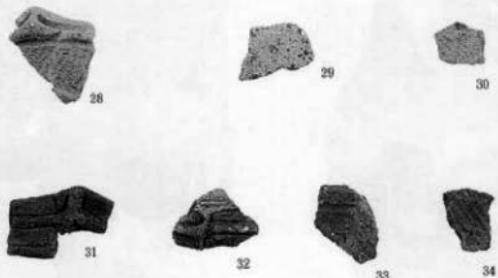
3 B区東全景（調査後）（北→）



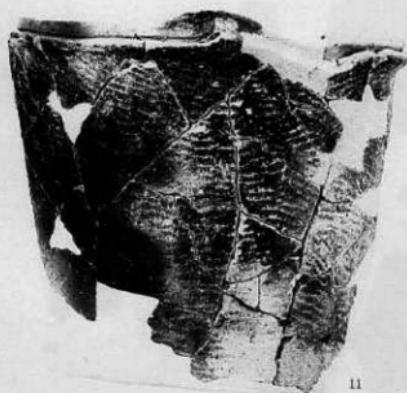
1 造構内出土土器 (1)



2 造構内出土土器 (2)



1 遺構内出土土器（3）



2 遺構内出土土器（4）

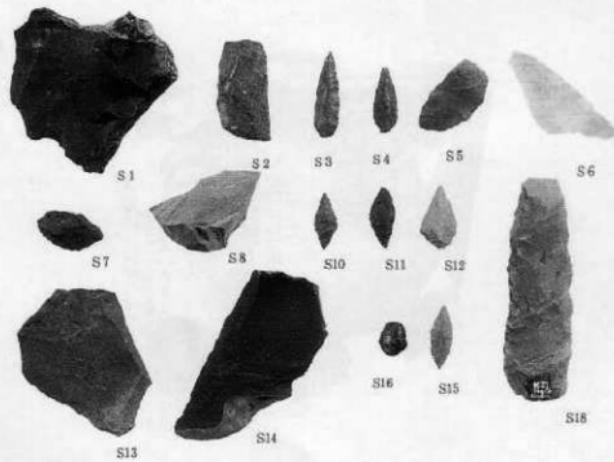


26



27

1 遺構内出土土器 (5)



2 遺構内出土石器



56



59

1 遺構外出土土器 (1) III-1-a



57



58

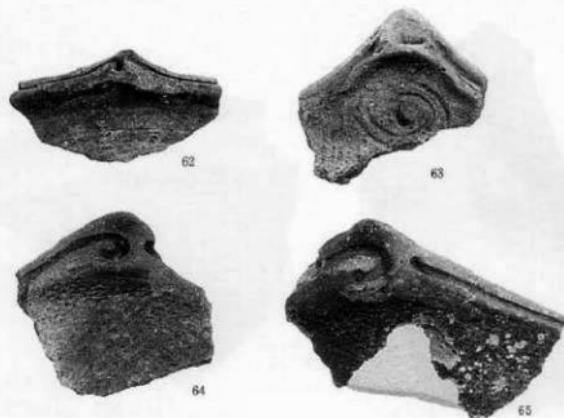


60



61

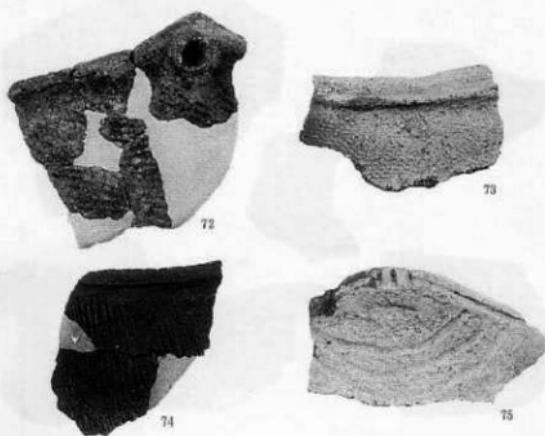
2 遺構外出土土器 (2) III-1-a ~ III-1-b



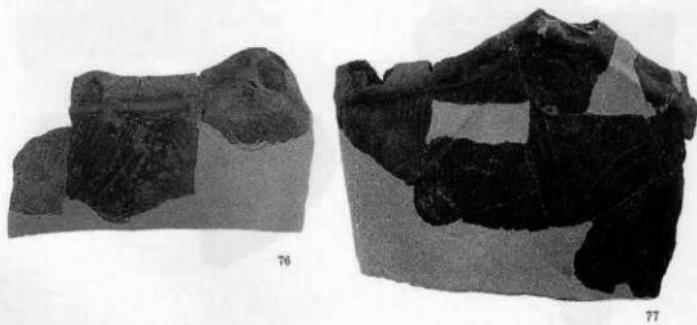
1 遺構外出土土器 (3) III-1-b ~ III-1-c



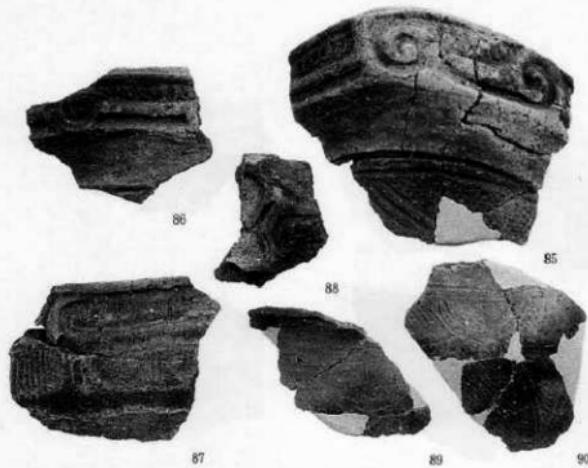
2 遺構外出土土器 (4) III-1-b ~ III-3



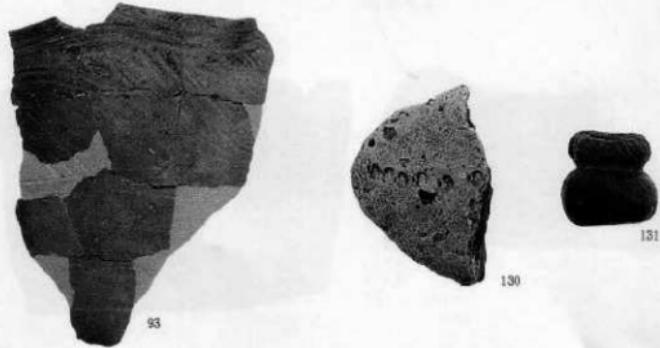
1 遺構外出土土器 (5) III-4 • III-6



2 遺構外出土土器 (6) III-5



1 遺構外出土土器 (7) III群浅鉢



2 遺構外出土土器 (8) IV-1, 土製品